恰かも宗因が十六七歳頃即ち元和末年の頃からの交はりとなる。それはたゞ互に名を知り合ふか、一寸文通でもした位の事かも知れぬが、とに角少くとも二人の交游の始まつたのは、通説の寛永十三年以前からであつた事はいふまでもない。

正保年間宗因は浪華なる天滿宮のほとりに移つた。「本朝文鑑」所載の「告天滿宮文」に

正保の末のとし長月比に、津の國中島のわたり天滿宮のほとりに、かりにうつろひしが云々。

とあるから、それは正保四年の事であつたと思はれる。（〔補記〕大阪天滿宮の社傳によれば正保五年、即ち慶安元年秋、里村家からの推擧で天滿宮連歌所の宗匠になり、社家の一人大道某が伏見まで迎へに行つたのだといふ。するとこゝに「正保の末の年」とあるはやはり正保五年の事とすべきである。）「三籟集」に

大坂住宅のはじめ天滿宮に

淵とならんよるべの水や菊の露

とあるのは、即ち當時天滿宮に奉納した句であらうし、又翌慶安元年（〔補記〕慶安二年とすべきである。）の初春には

去年九月大坂住宅

今もこの花より四方の春邊哉

とよんだ。然るにその後十年ばかりを經て、明暦元年の冬、所をかへて少し程隔たるやうであつたが、更に社の傍に庵地を占めて、翌明暦二年菊月の半ばに新しい住居が出來上つた。即ち向榮庵である。そしてその月十五日に前記「告天滿宮文」を神の御前にさゝげ、又

神やうけし終によるべの菊の水

とよんで、「誠によるべの水のもとにやありけむ」と神德を仰いだ。なほ「誹家大系圖」によれば、萬治の頃社地を去つて天滿内の碁盤屋町に移り寓したといふ。この浪華に移り住んだといふのは、勿論天滿宮の連歌の月並宗匠となつた爲であるが、かうして遂に大阪は談林發祥の地となつたのであつた。

〔註〕

一、宗因の傳については、彼が俳諧に轉じて以後の資料は必ずしも乏しくないが、それ以前のことに

關しては根本資料とすべきものが極めて少ない。はやく追善集として西鶴の「精進膾」(天和三年)・秋風の「打蠶砥」(天和二年)があるが、前者には傳記上參考すべき點は全く無く、後者は大阪北田紫水氏の架中に藏せられる事を聞いてゐるが、まだ寓目の機を得ない。まづ前記維舟の「時世粧」等が最も信ずべき資料であらう。後年のものでは綾綿・俳諧家譜・俳家奇人談・誹家大系圖等の類に、すべて傳をのせてゐるが、大系圖の外には參考に資する程のものはない。それから宗因の句集たる安永六年刊の「俳諧發句むかし口」、及び天明元年刊(安永十年序)素外編の「梅翁宗因發句集」にはそれ〴〵梅翁の略傳がある。素外は江戸談林七世を繼いで最も祖翁に忠實な人であつたから、その傳は大體信じてよからう。句集は飜刻もあり、隨つてその傳も汎く知られてゐるが、中に

ひとたび伏見に寓居せしうち、湖東の縣に遊び、やどりをもかさねしほどに、しるよしの君よりかりにいほりすべき地を望めよの命を蒙り、

爰にせう梅あり山あり河も有り

然りし後又東風に吹誘はれてや、浪速江のあしまめに杖を曳きしが云々

とあるのによれば、伏見寓居後近江あたりにも住んだと思はれる。この事は他には全く傳へを見ないやうである。且つ「爰にせう」の句は俳諧と思はれるから、もし此傳へを正しいとすれば、彼の俳句の中で最も古いものといふことになる。又「俳家奇人談」には

薙髪して宗因と改名し、都の北野に幽棲し、移りて難波の天滿に卜居す。

とあり、大野洒竹氏編の俳諧年表(俳諧文庫第二編所收)には寛永十五年の條に

○宗因北野に移る。

とあるが、これも他に據る所を知らない。なほ洒竹氏は同じ年表の中に、宗因が浪花に卜居したのを寛永十九年としてあるが、これ等も何に據つたものか今明かにする事が出來ぬ。恐らくは共に誤であらう。

二、宗因と名を改めたのは「むかし口」によれば浪人となつて後のことゝ思はれるが、「寛永千句」にすでに宗因と署してあるので、これは單に連歌師としての名と思はれる。

三、「俳諧家譜」に宗因が維舟を師としたとか、常矩に倣つたかといふ說をあげて、二樣の解を試みてゐるが、これは「奇人談」の說の通り、勿論宗因と維舟とは師弟關係ではなく友人關係である。只その俳風の感化を多く受けたといふ事は十分認めてよからう。なほ大野洒竹氏は宗因が重頼と始めて會つた時を寛永十三年として居るが、これも全く據る所がない。

四、「今もこの花より四方の春邊哉」の句は、向榮庵の成つたのも九月であるから、その前書だけでは直ちに決せられないかも知れぬが、「三籟集」の中の句の排列から見て、慶安元年(「補記」慶安二年とすべきである。)の作と斷じて誤がない。その他「三籟集」中正保・慶安頃までの吟たることが明かなものをあげて見ると、

肥後八代城にて

西山宗因

萬代やうちはへ春の花の宿
　はじめて上洛の翌年
あたらしき詞となるやけふの春
　京住宅のはじめ
かけきやは都にことし宿の春
　三十九歳のくれに
のはへはや老といはれんとしの暮
　正保二年
豐年のためしにもせんはじめ哉
　老師昌琢十三回忌(註、慶安元年に當る)
消えにきとみし世の影やけさの月

等がある。

五、向榮庵が成つた時の吟「神やうけし終によるべの菊の水」は、「三籟集」に

その〻ちあらたに庵地をもとめて興行

と前書があるのから推定したので、「告末滿宮文」には只「一句二首をつゞりて」とあるだけで、その句と歌とは記してない。しかし右の文中に「誠によるべの水の元にやありけむ」の句があるから當時の吟であることは疑ひない。なほ「三籟集」に

社邊に庵地をしめけるとき

神の春近きしるしや宿の梅

とあるのも向榮庵での吟であらう。酒竹氏は正保の初つかた浪花天滿宮の北に寓居して、こゝで初めての連歌會席に

どの淵とならんよるべの水や菊

とよんだといひ、又向榮庵が卽ち天滿宮内の碁盤屋町だとして居るが、どうであらう。

六、宗因の家系については今知る所がないが、たゞ「三籟集」に

亡父淨照葬送の翌朝雪ふりけるに

けふりつき雲すむ雪の光かな

とあるので、父の法名は分る。かつその父は宗因と共に上京してかなり長く生きて居たやうに思はれる。又云六齋我陵が淡々の十七回忌追善として出した「十載蔫(トトセワラ)」の中に、

延寶二年春のはしめをの〻あつまりて梅翁の七十にみちぬるを賀し侍ル

あく期なき老木の花の色香哉　久任
吹ものとけき御代の春風　宗因
里〻は田返す比の雨晴て　宗春

下略

宗因祖父は越前少將殿に仕たる御宿勘兵衞とそ因は西山を名のりて西國に侍りける
ゆへ西翁と稱ス万治の比なにはに庵を結ひて梅翁と號ス久任予か祖西田清兵衞交り
をなす事右連歌のことし人々俳諧をすゝめたるに

宗因

いろはにほへの字なりなるすゝき哉

是宗因はいかいのはしめ也

といふ記事が見える。宗因の浪華移居を萬治とするのは勿論誤であるし、「いろはにほ」の句が果して俳諧最初の作たるかも信じ難い。しかし宗因の祖父の事や、宗因と莪陵の祖西田久任との交りがあつた事などは信じてもよからう。

七、宗因が致仕したのは、主家退轉後のことゝいふのが通説であるが、「三籟集」に

西國下向加藤風庵興行

陰たのむ身の春なれや梅の花

とあるのは、風庵がなほ八代在住中すでに宗因は上京して連歌師となつて居たやうに思はれ、頗る訝しい。これは藤井紫影博士もすでに疑はれて居る事で（同博士著「江戸文學研究」參照）、更に考究を要する點であらう。（〔補記〕肥後國志によれば、風庵は晩年安藝廣島に移居したといふ。然らば「陰たのむ」の句は慶安以前宗因が西國に下向した途次、舊主を訪うた時の興行であらう。なほ加藤家の家系等については、「にひはり」大正十五年十二月號所載　能勢朝次氏の研究　並に「上方」昭和七年四月號所載　藤井博士の西山宗因傳參照。）

八、寺田氏編「京都名家墳墓錄」によれば、正方の墓は京都本國寺の塔頭了覺院内にあり、「妙風院殿正方居士」と法名を刻してあるさうである。但し同書は大阪朝日新聞の記事に據つたらしく、正方の歿年を寛永十三年九月廿三日と誤つて居る。

九、京都の醫家山脇玄坤の自筆稿本「灑堂隨筆」卷九（文化十二年七月稿）に宗因のことを記し、その中に「法印探幽ガ女ヲ妻トシテ畫モ亦一風流アリ」とある。大江丸の「俳諧袋」にも「一説には法印守信のむことなりしといふ」と見える。何か據る所があるのだらうか。一説として揭げておく。

一〇、前にあげた宗因の句集「むかし口」は編者不明であるが、（〔補記〕最近藤井博士の調査によれば上田秋成の編にかゝるものだといふ。）卷頭の梅翁傳は宗因のまとまつた傳としては最も古い。それでその一部をこゝに引用しておかう。

宗因は肥後の國の人、姓西山、諱豐一（トヨカズ）、俗名次郎作といふ。前の八代侯加藤風庵子の家士なり。寛永九年不慮（ハカ）なるかしこまりに侯は奥の岩城にさすらへ給ひて後、御暇を給はり、始山城の伏水に隱る。往年風庵君とともに釋將寺の豪信法印と云に和歌連歌の道を學びしが、今はた世に立交はるべうもあらねば、ひたすら月花の嗟歎（ナゲキ）を事として、形をかへ名を改て宗因といふ。又號を一幽子・西翁・梅翁・野梅子とも云、其居を號て忘吾齋と云、又向榮庵とよべり。わきて連歌に志

ふかく、かさねて里村昌琢の門に入て道の奥をも問窮めけるが、彼門にはことに抽出たる作者也き。さればこそ正保の頃、西のくに所々の連歌の便宜に、浪速の天滿に居を移せしと也。連歌一代の發句は、西山三籟集と云書に擧つくせり。（中略）翁連歌のいとまに松江重頼を友としてはいかいに遊ばれしが、作意其比の人にまさりしとて、都鄙ひとたびこの格調にうつしなす。其門につどへる人々とはかりて、俳諧檀林の一體をおこし出ぬる。重頼も老ては西山の今やうをうつしなして、古風をやゝ忘れにたり。（下略）

重頼の俳風との關係はたしかにかうした關係も認められるが、最初は重頼から受けた感化が多かつた事は疑ない。なほ風庵侯が岩城にさすらつたといふのも、誤傳と思はれる。

天滿に向榮庵を營むに先立ち、宗因は承應二年癸巳の秋、播磨灘を渡り久米の皿山を越えて作州津山に遊んだ。當時の紀行一卷が存する。これは必ずやかの連歌の師たる豪信法師か、若くはその縁りの人を訪ねたのであらうと思ふが、紀行にはたゞ「尋る人あり」とばかりで、その訪ねる人を誰とも記してない。しかし「三籟集」に

作州旅宿寂證寺にて

木のもとにそれも淺くや露の宿

の句が出てゐて、しかもこれは紀行の最後にも見えてゐるから、彼が寂證寺に客となつたことは明かである。さて右の紀行によれば彼が浪華の川尻を立つたのは、七月二十三日未の下刻であつた。折から空晴れて月が清かつたので、

舟人も心行くらん難波津を

おし明けがたの月にまかせて

と詠じ、西宮の沖から須磨の浦わをめぐり、淡路の島を霧の間に眺めてほの〴〵と明石の浦についた。

あかし船一夜かぎりか朝霧か

と興じて、翌二十四日は繪島・高砂を經、二十五日の朝室の津にかゝつて明神に詣でた。二十六日からは陸路の旅にうつつて、二十七日午の刻許りに津山に辿りついた。あるじは喜んで迎へ、早速發句を所望されたので

思ひこしこや年月の月の宿

西山宗因

と吟じ、又

國民の姿になびく秋田哉

を發句として連歌の興行などもあつた。かくて暫くはこゝに悠遊し、吟詠の句も多かつたのであらうが、紀行には「此外もあまた有りしかどくだくだしく品なければもらしつ」といつて、津山に到着したをりまでの記事で擱筆してゐるのは殘念である。今右の紀行中から俳諧だけを抄出して見よう。

いなつまもかよふや岩須磨源氏

一の谷の戸たゝく秋風

かやたゝみ紅葉むしろを掃除して

これは恐らく彼の俳諧の連句として最も古いものであらうが、「一折もと思へど舟の付所波の打越もむつかし」と言つて第三までにとゞめてゐる。發句にはなほ

あかし船一夜かきりか朝霧か

文月やめてたくかしく泊舟

舟便にやらんやらめてた文月夜

すゝ虫やりんもましらぬなまり聲

馬草にそへてくはるな轡虫

山里はものゝさひ鮎一種かな

の數章がある。これ亦彼の初期の俳句として貴重な資料といはねばならぬ。

〔註〕右の紀行は藤井博士藏、寫本一卷、雜誌「にひはり」大正十五年十一月號に全文が紹介されてある。その最後に「快映御坊」と宛名がしてあるから、その人に送つたものと思はれ、且つ宛名の前に、旅宿の住僧は高野大師の遺誡をたもち聖德太子の尊像をまもりて、朝暮の勤行たうとく睡眠をおどろかす。結緣あさからすおほへて

はるかなるひかり待出んあかつきを

おもひね覺の法の聲かな

木の本よそれもそ契り露の宿（三籟集には中七「それも淺くや」）

とあるから、快映坊は卽ち寂護寺の住僧と思はれる。又右の紀行中には本國で睦まじくした人が、今は作州の人になつてゐるのに逢つてそのかみを思ひ出し、

見しやそれ宿こそあらぬ宿の月

とよんだ事が見え、右の句は「三籟集」にも出てゐる。すると津山にはなほ八代時代の舊友もゐた事と思はれる。とに角豪信法印の事跡や、右の快映坊の事などについて、今全く知る所がないので十分に考察を進める事の出來ないのは遺憾である。一體釋將寺を津山だといつたのは酒竹氏の俳諧略史がはじめのやうであるが、氏は津山紀行の外に何か基くものがあつたのであらうか。一度津山に行つて是等の事も取調べて見たいと思ひ乍ら、なほ果さないでゐる。博雅の士の教へを乞ひたいと思ふ。

明暦二年九月十五日、向榮庵に移り住んで「告天滿宮文」を草した宗因は、もとより連歌の宗匠としてその文運を祈つたのであつた。しかしこの頃から彼は漸く俳諧に親しむ機會が多くなつたやうである。この年正月に刊行された休安撰の「夢見草」には、「天滿一幽」として

五月雨や天下一枚打曇り
明石舟一夜かきりか朝霧か
から聲になくは蓼食ふ蟲候か
連歌座に打越嫌ふ碪かな

一順の四句目ぶりなり初時雨

等五句と、外に付句二句とが入集して居るのである。これは蓋し彼の句の俳書に見える最初のものであらう。その句風はすべて貞門の糟粕を嘗めて居るのに過ぎないが、かの津山紀行中の句とともに、彼の俳諧の初期の作品として注意すべきものである。ついで萬治元年刊燕石撰の「牛飼」には、當時名高かつた

ながむとて花にもいたし頸の骨

の吟が見え、同三年刊顯成撰の「境海草」や重頼撰の「懐子」等に至つては、二十餘句乃至三十餘句といふ程の多數の作が收められてある。按ふに維舟も「時世粧」に「萬治の頃より俳諧の會合斜ならず招き招かれて」と言つてゐる通り、この頃から彼の俳諧熱は次第に高まつて行つたのであつた。今や連歌師宗因としてよりも、俳諧師一幽としての彼が、より意義ある存在となつて來た。だが勿論それは連歌を全く棄てたといふのではない。「三籟集」を見ても萬治寛文年中の作にかゝる句は多く見出されるし、又萬治四年(寛文元年)正月十一日息宗春と兩吟で、伊勢大神宮法樂百韻を興行したりして居る。たゞこゝに注意すべきはこの頃息宗春が、すでに相

當連歌の手腕も認められるやうになつて來てゐるので、宗因は竊かに連歌の月次宗匠の業を子息に任せ、自分は專ら滑稽の調に遊ばうと考へたのではあるまいかといふ事である。

〔註〕

一、池田秋旻氏の「日本俳諧史」等に、向榮庵を結んだのを以て談林の旗を飜した時と記してあるのは、大きな誤である。尚榮庵と談林新風の鼓吹とは何等の關係がないばかりか、當時の宗因の句風は、本文に述べた通り、全く貞門の古風に倣つてゐるのにすぎない。明暦初年といへば宗因自身が連歌から僅かに俳諧に歩を轉じた時で、まだ談林の新風などといふものはどこにも認められないのである。又向榮庵結庵と俳諧に轉じた事とも直接の關係はない。たゞその頃からたま〳〵俳諧の方に活動し出したといふばかりである。

二、一幽の句が俳書に見えるのは、管見の範圍では「夢見草」が最初であるが、「境海草」の中の左の句も句作年代は明暦二年元旦であるから、「夢見草」入集の句と同時代である。但し「夢見草」は明暦二年正月刊であるから、集中の句は元年以前の作であらう。

年號かはりし元日に
明暦や梅のあらたに聞くる日　（境海草）

三、萬治四年正月の伊勢大神宮法樂百韻は宗因自筆で、三村竹清氏の藏にかゝり、巻末には

右兩吟者奉納
伊勢太神宮法樂之百韻或人依所望染愚筆畢
寛文元年季秋　西山翁圓

と奥書してある。

寛文初年に及んでは彼の俳壇に於ける活躍は益々目ざましくなつて行つた。しかしその句風はなほ多く貞門の古風を出でなかつた。試みに當時の俳書中から彼の作を少し拾ひ出して見よう。

一　辛子酢にふるは涙か櫻鯛　（寛文二年刊神法樂）
ほとゝぎす來ぬ夜數かくかしら哉　（同　上）
手のごひの雫にあかぬ清水哉　（同　上）
歌の道になれも指出の蛙哉　（寛文四年刊佐夜中山集）
價あらば何か雄島の秋の景　（同　上）

西山宗因

難波津に昨夜の雨や花の春　（同　上）
いかに見る人丸が目には櫻鯛　（同　上）
花むしろ一見せばやと存じゃ　（同　上）
木枯しのすりこ木に散る菜のは哉　（寛文六年刊遠近集）
七色に雪や一色まさるまち　（同　上）
けふ唱ふ佛の御名々々弟子こ哉　（同　上）
春もこれへ御馬がまゐる年始哉　（同　上）

是等の句中には、すでに「境海草」や「懐子」に見えてゐるものもある位で、やはり縁語掛詞を主とし、若くは本歌をふまへた趣向のものが多きを占めてゐる。即ち古風の口質を未だ多く離れた所は見られないのであるが、しかも度々誦し去り誦し來れば、格調の上に一味の輕快さが漂つて居る事を感ぜずには居れないであらう。「價あらば」「けふ唱ふ」の如き、そこには古風の句には見られない輕いはづんだリズムがある。それは確かに宗因の個人的特色とも言ふべきものであつた。特に「花むしろ」の句の如き、その謠曲の調をかりて一氣に言ひ下した奔放さは、蓋し當時にあつては頗る異色とすべきものであつたらう。たとひ是等の句が、なほ言語の技巧から多く脱してゐないとはいへ、古風の句に比して何程かの新鮮味を加へてゐる事は十分に看取される。況んや所謂談林の句とても、本質的には貞門の古風と同じく、智的技巧を滑稽の要素として居り、隨つて格調の輕妙自在な點は談林の重要な特色をなすものであるから、この寛文初年の句に談林新風の萌芽を認めると說いても、强ち不穩の言ではなからう。かの謠を以て俳諧の源語だといつた宗因自身の言は、すでにこの頃から實際の作品の上にあらはされてゐたのである。

以上は主に發句について述べたのであるが、當時の彼の連句はどうであつたか。その作品は「季吟十會集」・「同廿會集」・「歌仙揃」・「俳諧獨吟集」等の中に見出すことが出來る。一例として寛文六年刊の「獨吟集」所收の彼の獨吟百韻中から、その一部を抄出して見よう。

戀すてふ道は闇やら涙やら
　一すささきを切つてやる指
　とらへたるすりが命や助くらん

法のむしろの人込の中

これは初裏の一節である。又

千早ふるかみつくばかり醉ひ狂ひ
誓文これは恪氣いさかひ

別路を隣のかたやとめぬらん
借屋もかりの縁でこそあれ

免れあふ一樹の陰の雪隱に
ながれにつかふ手洗身に入む

これは二裏の一節である。その附方にはすでに詞付の煩雜さは殆ど見られなくなり、新しい語彙と題材とが自由に輕妙に驅使されてゐる。それは彼の延寶時代の作品を知るものには、勿論なほ全體的に甚しく固苦しさを感ずるであらうが、これを當時の他の俳人たちの作に比するといかに彼の作に多分の清新味があるかゞ分るであらう。

寛文末年以後の彼の俳諧を說くに先だつて、姑く彼の奥州行脚と筑紫旅行とについて述べねばならない。彼は寛文二年五十八歳の春三月のはじめ、東路の旅を思ひ立つて家を出た。七月二十日餘には勿來關を越えて岩城の城下に至り、八月中旬松島を見物して再び岩城に歸つた。かくて日頃あつて九月の末遂に別れを告げて西に向つた。白川關・那須篠原などをすぎて江戸についたのは十月初旬であつた。知友にとゞめられて師走の空にもなつた。偶々京の人に會つて娘がその年文月に失せたのを聞き、夢の心地に迷ひつゝこの地に春を迎へた。その間の紀行は自筆草本一卷の傳はるものがあり、又寛政元年刊「葛の葉の」の中にも收められて居る。その紀行の終りにはなほ亡女追悼の獨吟連歌二卷が添はつてゐる。東の旅から歸つた彼は、寛文四年秋には又遠く筑紫の空に旅人となつてゐた。卽ち豐前小倉の城下に在つて、折から隱元を訪ふため黃檗に向ふ途次、同地の開善寺に留錫してゐた卽非禪師に謁し、又城主小笠原忠眞公の七十御賀千句の獨吟を奉つたりした。「三籟集」に

豐前小倉城にて小笠原右近將監殿七十賀に獨吟千句第一御作代

年毎の若菜ぞためし千代の春

西山宗因

とあるのは即ち當時の作である。――なほこの千句は寫本として全部傳つてゐる。――かくて翌年はもはや歸つてゐたものと見えて、「季吟廿會集」には寛文九年六月十二日季吟・順正・顯成等と興行した百韻一卷があり、又「季吟十會集」中には寛文六年七月廿七日靈山重阿彌で季吟・任口・保友等と催した百韻一卷が見える。然るに寛文九年の夏六十五歳の時彼は再び小倉に至り、その翌十年二月十五日廣壽山福聚寺の二世法雲禪師から衣戒を授けられた。事は「法雲禪師壽山外集」卷下に載する「西翁隱士爲僧序」に詳かである。今煩を厭はずその全文を抄出しよう。

西翁隱士爲僧序

肥陽西翁名宗因、移居攝之難波、以和歌連歌稱於江湖、每一當其席、雖千百言、皆銜口而成、韻致高古得宗祇之遺風、遊門受業者恆數百人、然性恬退不以淵才自多、布服破帽澹然于世、蓋遁於和歌之徒也、昔者圓位法師深慕涅槃、自詠和歌見志曰、願吾花下死期在仲春望、後果符其言、翁蚤從法橋昌琢于京師、以佛涅槃日自薙其髮、乃賦發句者、而倣圓位之語、又非苟然也、歌之餘留念淨業、誦持彌陀觀音等經、未嘗虛日、遂以西翁爲號、則其所以期者有在矣、數年之前亡長女及季男、繼而喪耦、時屢欲憤素志、爲子弟所擁留、鬱鬱而止、先豐主德公嘗知翁于風雅、而勝于翁之自知、故翁亦自忘其跡、得以就公、比公之賓仙、翁適丁內憂、不及至修一奠、殊抱慊懷、去年夏發舟千里而來謁壽山祠、寓哀於和歌、以酬平昔之義、新豐主極加慰勞、又以舊交在前筑、寄書累招、一節飄然而往、筑主聞其名、令舊交者延見、待遇甚厚、留過二一冬、既而欲羅致之、翁潛遁歸本山、時正值涅槃忌、請予授衣盂、并說淨戒、予嘉其志、方便爲攝受之、翁大喜納拜曰、幸哉今日而遂斯勝緣也、不特豁數十年鄙衷、方得脫曠劫之塵累、言畫潛然不自知淚之下、所謂發句之意有見于先、至是益徵耳、吁世之言遁者甚多、而歸吾徒者亦不少、求其一不變節不易守者幾希、蓋由最初立志之不眞、顧信之不深、徒浮橋外飾而已、是以見利則變處名則易、及血氣既衰、則安肆荒逸靡所不至、庸見避利辭名愈老愈壯若翁之爲者乎、予聞和歌以人心爲種、翁能研其學、探其蹟、充然若有感發于中、而況業於念佛三昧、視彼變易之徒爲何如也、今既受衣稟戒皆備三寶之數、又非前所云云可比、更須益擴其志、以拔生死之根株、凡涉文字勝相、意識情量所記憶者、一皆掃空而勿存、秋毫、剔其餘業習耶、今去後有眼如盲有耳如聾、直使身心若寒灰槁木、始有少分趣向、然此說亦是一時權宜、出於不獲已非究竟也、若錯認方便、以爲實、則又陷知見自作障難耳、古者曰卽今休去便休去、要覓了時沒了時、斯言至矣、西翁勉乎哉。

西山宗因

これによれば宗因は長女と季男を失つた上、更に妻とも死別したのであつた。而して妻の死は恰かも小倉侯忠眞公の歿したのと同年であつたので、公の爲に一奠を修する事が出來なかつた。それでこの度初めて忠眞公の詞に謁し、追悼の和歌を手向けて平昔の恩顧に酬い、それから舊友に招かれて筑前に赴いた。然るに藩主黑田侯は宗因を厚遇して、これを羅致しようとしたが、豫て出世間の志があつた彼は潛かに宰府に遁れ、遂に法雲の許に至つて受戒したのである。なほ當時の事は「壽山外集」卷上に載する「示二宗因隱士授二衣戒一」の偈にも見え、岡西惟中の「誹諧三部抄」(延寶五年刊)には、

梅翁法し法雲和尚に戒授り給ふと聞て余くにのあかつける衣かへを發句にしてつかうまつりけるその句三年すきても猶忘られすとこまやかに褒美して書こし給ふ文のはしにかくなん

垢膩のあか早をとゝしか衣かへ　西岸寺　任口

と、任口の句をあげて居る。宗因は受戒のをり、

いざ櫻我も其方の夕嵐　(時世粧)

と詠んだ。かくて身も心も輕くなつた彼は、即非禪師を訪ふ爲であつたか、遠く長崎に杖を曳いた。しかも禪師は寛文十一年五月二十日遷化したので、

即非禪師遷化の時長崎にて　(三籟集)

かくれけりいかにせよとか五月闇

と悲しんだ。その後彼は引續き秋の頃まで長崎に滯在して居たものと見えて、

長崎にて　(寛文十二年序櫻川)

秋の葉や太山もさやにひぢりめん

長崎にて　(寛文十二年跋續境海草)

月は爰ぞ諸國一見のそうまくり

長崎にて　(同上)

おらんたの文字か横たふ天つ鴈

長崎にて　(同上)

秋の葉や深山もさやに緋ちりめん

長崎にて

三國の湊や秋の泊り舟　（同　上）

等の句が諸書に散見するのである。そして初冬の頃三年ぶりで舊宅に歸つた。それは風鈴軒の「櫻川」に、

梅翁筑紫にて遁世して頃舊宅に歸りければ
寛文十一年亥十月上旬

一句しめせ霧も都にのぼり僧　維舟

とあるので知られる。

〔註〕

一、早大圖書館に「西翁道之記」と題した寫本が藏されて居る。右は寛文二年松島に遊んだをりの句日記ともいふべきもので、最初に

春霞つくる東の日記かな
彌生とともにさくる腰錢
草鞋もたまりやいたきぬ花見して

といふ第三までを載せ、次に

時は寛文四年彌生の始攝州難波のうらを門出せし日愚息にいひける
あらすなよ今歸りみん家櫻

以下發句約六十句を收めてある。こゝに寛文四年とあるのは、勿論寛文二年の誤寫にちがひない。この句日記によれば出發後京に四五日止まつて殘花を見歩き、三月十日日の岡越に向ひ、東海道の順路を經て鎌倉に至るまでは春の間であつた。奥州道中に移つてからは、すべて秋季の句であるから、夏中江戸に止つてゐたのであらう。句は宮城野附近の名所から、松島での吟に及び、更に岩城から歸路、下野の國でよんだ

風や時雨那須の篠原露もなし

で終つて居る。

二、「葛の葉の」は寛政元年の秋、大和の金峰山下に宗因の流れを汲む人々が塚を建てゝ、「きのふまで水たたてしか葛の葉の」の句を刻し、その地の宮島氏孤舟は獨吟千句を墓前に手向けた。然るに偶々浪華の念四坊が宗因の松島紀行の草本を得、これを梓に鏤め人々の句を添へて出版したものである。なほこの紀行は「松島一見記」と題した宗因自筆の一卷が、藤井博士の「江戸文學研究」中に紹介されてあり、續々群書類從第九には「宗因東の紀行」として收められてある。（〔補記〕近時俳文學大系紀行篇にも「陸奥塩竈一見記」と題したものが收められた。孰れも文章に異同が多く、藤

井博士紹介のものと俳文學大系所收のものとには、娘の死については記してない。）

三、寛文四年の小倉行きについては、小笠原家の秀政、忠脩、忠眞三公の傳をかいた「小笠の光」（大正三年刊）に參考すべき記事が見える。同書によれば寛文四年甲辰秋卽非が小倉の開善寺に來た時、忠眞公は之に接見し、その後一年和尙が黃檗より支那への歸途、再び公は之を小倉にとゞめて廣壽山福聚寺の開祖と爲し、師資の禮を執つたといふ。而してなほ同書には

寛文四年八月十五日西山宗因に物を贈られし時

登み渡る千里の外の月影に都の秋を添へて見る哉

宗因の返し

月影の廣き惠みは數ならぬ身にも袖にもあまりぬる哉

といふ忠眞公と宗因との贈答の歌が載せてある。卽ちこの頃宗因は小倉に在つたので、「三籟集」に

卽非禪師に面謁のとき思ひよせ侍る

神の月心にうつせ法の場

とあるのも、當時の事と推定されるのである。

四、忠眞公の賀の千句は、寫本としてその全部が傳つて居り、大阪天滿宮藏本には最初に「寛文五年於豐前小倉城」と記してある。又寛文七年或人の所望によつて宗因が書いた自筆本には、小倉城主の病氣平癒の爲、城中で五日間を限り獨吟した旨を附記してある。今その發句だけを紹介しておかう。

第一　年毎の若菜ぞためし千代の春

第二　のびちかに草木もなびく霞哉

第三　濱路行く八百日も見ばや花盛

第四　待宵の鐘はいく聲郭公

第五　民の戸は安けくもあるか夕涼み

第六　空も空かはるや心今朝の秋

第七　海は西に長くてたれり夜半の月

第八　かざしもて一木を四方の紅葉哉

第九　跡久し文字の關路の磯千鳥

第十　これよりぞ和らぐ國の神々樂

追加　松と共に齡さかえよ家櫻

追加は表八句だけで脇以下を一巡、玄周、以元、親元、重將、吉後、重親の七人がついで居る。皆忠眞の家士達であらう。なほ五日間といふのは十七日から廿一日で、その月次は明記してないが第一の發句によつて正月の事と思はれる。

五、宰府に逃れた時の句は「三籟集」に、

西山宗因

思ひたつ道かへり見ぬ霞かな

の吟が見える。

六、宗因の出家については、維舟の「時世粧」に

天滿宮の前西山宗因、去る衣更著中の五日豐前の國小倉廣壽山卽非和尙其御もとに參りて、

いざ櫻我も其方の夕嵐

かくいひ〳〵のはて〳〵は遁世しけるとかや。あなたふと生ん事賴もしく浦山しくこそあなれ

（中略）。にし國のたよりもなつかしければ、獨り百韻をつゞりて送り參らせい。へだゝれる天雲の返しの風の音信をまつ。

寛文十年十月上旬

とある。卽非和尙に直ちに戒を受けたとするのは誤であるが、かの「釋教百韻」の序にも、

よはひすでに目もうとく耳順はぬ年にも多く過も、もとより墨染の袖唐やうに出立て西海にさまよひしついでに、卽非禪師の門下にたゝずみながら、いかなるか是一句一偈のしめしをもうけず易行にもとづきてひたすら超世悲願のたのみながら云々

と自ら言つて居る程だから、卽非に歸依する事が深かつたさまは知られる。

七、槃林の詩僧元鶴はその傳が「續扶桑隱逸傳」にも出てゐるくらゐで、頗る脫俗高逸の人であつたらしい。性となり疎懶にして身に疾多く、紙衣蓬髪木屐霜笻といふ風采で、毎に四明に登つて詩を樂しんだといふ。その遺草を輯めたものが「山月集」で、貞享乙丑二年秋八月その故友龍興蓮の撰んだ序文があるから、この年の刊行であらう。この「山月集」の中に、次のやうな二篇がある。

懷二西翁一　併引

曩予屢與二西翁一遊、翁篤信二宗乘一、嘗以二和歌一鳴二天下一、常卜二居於難波堀江之北一、或客二居明石一、初不レ定二處一方一、竊慕二圓位法師願死二花下一之意一、而詠レ歌、頃閱二壽外山集一、中載二西翁爲レ僧、可レ謂二進退合レ道者一矣、予不レ見レ翁將二二十年一、不レ知形容語音今且何如、聞有二益壯之風一、作レ此、

爲レ期二花下死一、避レ世樂二和歌一、高躅追二圓位一、雅風類二頓阿一、舟停明石浦、家對堀江波、一杖遊二南北一、壯哉老杜多、

臘八雨雪思二梅花翁一

山頭飛雪江頭雨、恨不レ使二君知一此趣一、松柏今誇一歲寒、梅花素耐三冬苦、幾聲牧笛弄二風前一、何處樓鐘鳴二日午一、聞說叢林衲子多、今朝有レ幾見レ星悟、

宗因と槃派僧徒との交游關係を知るべき資料としてあげておく。

八、宗因が長崎での句は、本文に掲げた外なほ「三籟集」に、

長崎にて

山は紅葉てる日の本の湊哉

西山宗因

長崎にて

ね覺ならぬ心も秋の海べ哉

長崎にて本國の人にあひて

有りし世は猶のこりけり月の友

長崎舊友のもとにて

なれもみしを忘れざりけり萩の庭

長崎舊友をたつねて

人はいさ昔をまねく花すゝき

等の吟が見える。これらはすべて寛文十一年秋の吟であらう。なほ本文掲出の「秋の薬や」と「阿蘭陀の文字」との二句は「今様姿」にも見える。ついでに當時九州旅行中の句、並に必しも當時の吟とは定められないが、とにかく九州に關係ある句を、「三籟集」の中から抄出しておかう。

肥前より筑前へ歸省の時

雲居路は遠くてはやき時雨哉

筑前大守家中へ請待のとき

庭にしくけふの爲とや玉霰

福岡にて

北や雪汐風寒し磯の松

博多にて

沖や雪入舟しるし夕嵐

筑前福岡の城にて

豐かなる國みる雪のかゞみ哉

肥前よりかへるとて

歸り來ん跡殘しけり濱千鳥

筑前にて

旅立ちし空いくかすみ年の春

筑前下向歸庵のとし

あがたみに行くや先の日年の暮

西國下向のとき

おもふ方の春風近き船路哉

小倉城樹木屋敷にて

御園生に千代の數とる木の實哉

西國行脚のとき

いざさらば我もそなたの夕嵐（この句は「時世粧」に見える）

豐前小倉にて

春を祝ふ數々や先つ門の松

於筑前福岡

長閑さや國にしたがふけふの春

肥前佐賀にて

世の中は心なりけりけさの春

宰府社家興行

風にとふや神の昔の梅の花

筑前より出ていひ送りける

あかてこそと立ちはなれにき花の道

豐後寛佐庵を尋ねし時

玉ほこのたよりになすな山櫻

箱崎八幡宮座主にて

あふぎきぬ人の國迄國の春

小笠原右近將監殿御墓にて

跡とむる路や三年の夏の草

豐前へ下向のとき

夏の夜の月にをならへ船の路

豐前奉行職の人の宅にて

人しけきまには門の水鶏哉

豐前にて

うすくもり空や夕たつ沖つ波

筑前にて

涼しさのとまりや袖のみなと風

廣壽山にて

さらでだに御法にむすぶ清水哉

豐前へ下りし時

夏の夜にあやしき風の船路哉

九、「櫻川」に載せた「一句しめせ」の外に、「時世粧」にはなほ西山西翁出家して行ふ其開えありければいひ遣し侍る一句しめせ霧も都にのぼり僧

西山宗因

月形やくらからぬ道に黒ごろも
仕して家は思はじ佛手柑

と三句を連ね出して居る。

延寶元年には名高い「西翁十百韻」が刊行された。世に所謂宗因千句である。但しこれはその中の發句が、大阪・江戸・岩城・伊勢等の各地でよまれて居り、又普通千句の形式として添はるべき追加の卷がない點などから見て、當時新に千句として興行されたものでない事は明かである。現に

闘は名のみ花になこその御意はなし

は、「櫻川」に寛文七年三月と記してあるので、これを發句とした一卷も當時の作と見られ、——卷中にも「村雨や卯月八日になりぬらむ、寛文六年きく時鳥」の句がある。——又最後の戀俳諧一卷の如きは、寛文十二年刊重德撰の「塵塚」中に收められて居る。その他なほ寛文三年・四年等と推定される卷も多い。（補記）宗因千句の卷々が刊行當時以前の舊作たるべき事については、なほ雜誌上方所載藤井博士の「西山宗因傳」、國語國文昭和七年九月號所載小宮豐隆氏の「西山宗因に就いて」の中にも他の證をあげて論ぜられてある。）即ちこれは「宗因七百韻」・「宗因後五百韻」等の類と同じく、單に從來の作にかゝる獨吟十卷を、書肆などの手で纏めたにすぎないものである。隨つて延寶元年の刊行といつても、その多くは寛文初年頃の舊作で、なほ古風の作に屬し、——少くとも古風の餘臭を多分にとゞめたものであつた。世に動もすれば本書を以て、談林の總帥たる宗因の代表的連句集となすものがあるが、それは大きな誤解と言はねばならぬ。しかしかうして宗因の作品が、一つの撰集として纏められ、かつ出版された事は、談林俳風の展開史上頗る注意さるべき事實であつた。即ち今や連歌師としての背景をもつた宗因の俳壇的活動は、すでに彼を俳壇の權威として認めしめるに十分であり、のみならず何よりもその清新味を帶びた作風が、漸く世人に迎へられるやうになつた事を示すものであつた。當時夙くもその異體を以て阿蘭陀流と呼ばれた西鶴一派の新進氣鋭連が、恰かも時を同じくして「生玉萬句」に氣を吐き、しかも宗因が最後の卷に顔を出して居るのは、又この間の消息を物語るものであらう。（「西鶴の俳

歴」参照。）案ふに西鶴・惟中等、宗因門に旗ける俊敏の士は、年が若いだけに、より急進的であつた。そして師に先んじて實際運動に移つたのであるが、それはやがて新風の統率者たるべき宗因の地位を確立するに至つたのであつた。要するに「西翁十百韻」そのものは決して談林俳諧の作品として特筆すべきものではないが、こゝに新風展開の基礎が置かれた事は認められねばならないであらう。

宗因の周圍はかうして動いた。彼自身もまた更に動いて行かねばならなかつた。新風鼓吹の先達たるべき彼の俳壇的地位は、もはや自他共に認める所となつてしまつたのである。「西翁十百韻」が纏められたと同じ延寶元年の夏、

蚊柱に大鋸屑さそふ夕べ哉

を發句として獨吟したかの「蚊柱百韻」は、この宗因の新しい立場を明かに示すものであつた。すでに「西翁十百韻」中の最も新しい作と思はれる戀百韻の如きには、古風の手重な附方を脱して、自由で輕妙な心附が多く見られるのであるが、この蚊柱百韻に至つては、

四つ五ついたいけ盛りの花薄
まゝ食はうとや蟲のなくらん」

献立にのする誰かれ香の物
貞光末武松たけの山」

山公事に獵師の翁にじり出で
あれから是峯生へたむさ髭
花に一首かうこそほつたにが野老」

等、なほ言葉の技巧を離れては居ないが、その聯想の自由で格調の輕快な事は、全く目を刮するものがあつた。しかし新舊の對立は、いつの時代いかなる社會に於ても免れる事は出來ない。これを後年の談林風に比すれば、なほさまで異體といふ程のものではなかつたにも拘はらず、早くも保守派はこれに向つて新風攻撃の第一矢を放つた。それは翌延寶二年三月に出た「澁團（シブウチハ）」である。同書の著者は「俳諧といふも和歌の一體ならずや」といふ窮屈な立場から、蚊柱百韻

の一句毎に批難を加へたのである。これに對して當時宗因自身は遂に返答の書を出さないで終つた。だから後に「破邪顯正」で「延寶二年の比蚊柱の獨吟して板行し、初心を迷はす故非言澁團にてうたれ、返答一言もあがらず」と隨流から言はれたのであるが、門人木原宗圓の撰んだ「阿蘭陀丸二番船」（延寶八年刊）によれば、實はその年の夏、宗因は又新に

蚊柱や削らるゝなら一とかんな

を發句とした獨吟百韻を興行し、これに辯駁の意を寓した長い詞書を添へたのであつた。しかし若殿原と爭ふも大人氣ないといふので、そのまゝに捨て置いたのであるといふ。この詞書は單に反駁としてのみならず、宗因の俳論としても最も注意すべきものである、その中に彼は、

抑俳諧の道虛を先として實を後とす、和歌の寓言連歌の狂言也。連歌を本として連歌を忘るべしと、古賢の庭訓なるよし。

と言ひ、俳諧を以て和歌の寓言連歌の狂言であると喝破した。彼のこの思想は、かつて莊子の像に、

世中よ蝶々とまれかくもあれ

と讃した詞書の中に、「抑俳諧は雜體のそのひとつとして連歌の寓言ならし。莊周が文章にならひ、守武が餘風をあふがざらんや」と言つて居る所にも現はれて居る。即ちかねて古風の陳套に慊らなかつた彼は、これを打破すべき根本的理念として、こゝに所謂寓言の論を得來つたのである。而して俳諧の本質に關するこの新しい解釋が、具體的に示されたのがかの蚊柱百韻であつた。

宗因の寓言說に基く俳論は、門人岡西惟中によつて更に組織的に論述された。惟中は寓言說を高調し、徹底させるあまりに、莊子・源語　徒然草等皆この寓言によつたものだとまで說いた。一體俳諧の本意、延いては藝術の本質をすべて寓言と解し、一時の狂言たるを以て足れりとする態度は、勿論慊るべきものではない。しかし貞德が俳諧の本質を單に形式的要素の中にのみ求めたのに比すれば、宗因が俳諧を和歌連歌の寓言だとして、こゝに內容的の新見地に立脚した事は、藝術的に非常な展開であると言はねばならぬ。長い間和歌連歌に入るべき階梯だ

といふ考の下に、ある規矩に縛られて居た俳諧は、こゝに寓言といふ自由な活動の新天地を得て、從來の風調を全く一變するに至つた。今や俳諧は和歌連歌と對立すべきものとして、その內容的特質が認められるやうになつたのである。けれども宗因の俳諧に對する態度が、すでに

古風當風中昔、上手は上手下手は下手、いづれを是と辨へず、好いた事して遊ぶにはしかじ。
夢幻の戲言也。（阿蘭陀丸二番船）

といふのであり、――こゝには蚊柱百韻の批難に對する皮肉的な皮駁の意味も含まれては居るが、――又彼がかつて肥前の舊友に向つて、「六十に餘りはいかいをせば、若き作者と爭ひて詞の先をかけんも大人げなし。又ふる口として人々に侮られんも口をしかるべし。卑下の袂を黑ちに染め、若やぎ俳諧すべき」よしを語つたといふのでも、眞に第一義的立場から彼が俳諧に向つて進んだのでない事は明かである。もとより當時俳諧に藝術上の第一義的な要素を求めようとする事は、なほ時代精神が許さなかつた。單に和歌連歌に對立すべき內容的意義を見出しただけで、宗因の俳諧史上に於ける功績は十分に認められてよいのである。否宗因が我が近世文學革新の先驅的事業を成したといふのは、即ちその點に存するのであつた。しかしとまれ宗因の寓言說は、「好いた事して遊ぶにはしかじ」といふ消極的な文藝論の上に立つて居た。元來談林俳諧の最も特質とすべき所は、一種の譬喩的表現によつて、對象の特徵を捉へる事であつた。例へば、

青海苔や浪の渦卷く摺子鉢
鬼灯や入日をひたす水の物

等の如く、摺鉢の中でくるくゝ摺られて居る青海苔を浪の渦卷くさまと見、鉢の水に浸された赤い鬼灯を入日に比したのである。もとよりリズムの輕快、句材の新奇等も、重要な特質として數へ上げねばならぬものであるが、談林の俳諧に最も淸新味を齎らした所以は、かうした奇警な譬喩的手法が、自由奔放に驅使された點にある。而してそれは實に宗因や惟中が、俳諧を寓言だと觀じた所から出發して居る。しかしそれが消極的文藝論に立脚した結果は、只管一種の見立ともいふべき智的遊戲としてのみ解され、遂に藝術的に十分深い意義を見出すに至らす

して終つたのである。

〔註〕

一、「西翁十百韻」は横本二册、題簽には「西山宗因千句」とある。原本には刊記・書肆名等が全くないが、阿誰軒の俳諧書籍目錄によれば寛文十三年とある。本文に述べた如く、戀百韻が寛文十二年刊の「塵塚」に收められて居るのによつても、寛文十三年刊行たる事は信じてよからう。原本に刊記がないのは、或はその奥附を缺いて居るのではないかとも思はれるが、最後の丁には空白が多いので、當時の俳書の體裁からいへば、かうした空白がある場合、刊記や書肆名は當然そこに記されねばならないのである。元來同書は傳本が極めて少く、寓目したものも只一本にすぎないからなほ斷定は出來ないが、恐く原本には刊記がなかつたものだらう。

二、蚊柱百韻が世に發表されたのは何時であるか、それは單行の原本が猶知られないので明かでない。然し「澁團」の序文に「延寶二年彌生上旬」とあるから、勿論これより以前の刊行でなければならぬ。尤もそれは必しも單行本として出ず、他の集中に收められて居たかも知れないが、「澁團」の序文に

昔忘れぬ友一人二人とぶらひ來て、世のうきもをかしき事もいひ終りて、懐より西山宗因蚊柱の百句の俳諧とり出られしを、その作ゆかしく開き見るに云々

とあるから、まづ單行本らしく思はれる。發句が夏季であるから、恐らく延寶元年夏の獨吟で、その後間もなく刊行されたものであらう。蚊柱百韻の全體は「澁團」によつても知られるが、なほ延寶三乙卯年仲秋日、寺田重德開板の「新續獨吟集」中に收められて居る。それには

抑生きとしいけるもの心なくんば有るべからず、蚕の息も青雲天上にのぼり、蚊の細聲は貴人の頭上にとゞまる。心の行く所いへばいはるゝ鋸屑、ふすべて膝を入るゝ紙帳の中、一宵のあだ言誰か見るべき。見たらば大事か、笑はゞ大事か、大事もない事。

といふ前書があり、又百韻の終りに

或る人告げて曰く、蚊遣火の大鋸屑有るが中にすゝけ古びたるよし。答へて尤もしか也。然れども予が言これのみに限るべからず。性疲れ眼くらくて新古のわいだめなく、等類を引見ず善惡の吟味にかゝはらず、草庵獨座のなぐさみ草のみ也。昔或法師のいへらく、古き事今更言はじとにもあらずとよき方人、我聞近來句帳とて京田舍取集めらるゝ集、吹上の砂ほこりよりもしげし。藏にも積むべく車にも餘るべし。老眼の及ぶ所に非ず。かつ伺ひ見んも又愚かなるに似たるべし。萬事無心也諸事忘却也。古人いふ稀なる齡ひに至る、何の書に罪あれども刑を加へずと。是天下大法を許す人は許し、そしる人はさもあらんかし。

と附言して居る。而してこれは單行原本の板木をそのまゝ用ひたものと思はれるから、これらの前書も附言も最初から存して居たのであらう。そこには「すゝけ古びたるよし」と言ひながらも、この新らしい作風を以て世評を問はうとする意氣が窺へないでもない。

三、「澁團」に關する論爭については、なほ別項「俳諧論戰史」のその條を參照されたい。

四、莊子像の讃は門人岡西惟中の獨吟を判した集中に載せてある。その年代は詳でないが、惟中がなほ岡山在住中の事であるから、延寶初年――恐らくは二三年の頃――の頃であらう。參考の爲その全文を掲げておく。

莊子像賛

爰にすき人あり、岡西氏なにがしとなのる。いとけなきより入木の道にたづさひ、十有五にして學に志すあまり、數島の道を好みてことさら俳諧の道に名あり。作においては備前の出來もの、目利に及ばぬ名作なり。抑俳諧は雜體のそのひとつとして、連歌の寓言ならし。莊周が文章にならひ守武が餘風を仰がざらんや。今この畫圖に向へば、栩々然として花にたはぶれ、蘧々然として枕をそばだて、夢うつゝの間にあり。世はみなまつかう昔はまつかう、遊んだがましぢや。

世中よ蝶々とまれかくもあれ

こゝにも「阿蘭陀丸二番船」所載の獨吟中に述べたのと、全く同じ考が見られる。

五、肥前の舊友に言つた言葉といふのは、宗因が肥前の城下にある四人の友から歌仙俳諧を送られ、これに對して自らまた

美しき三十六や友千鳥

を發句とした歌仙一卷を獨吟して返した。その獨吟の終に見えて居るのである。

六、談林俳諧の特質については、なほ岩波講座日本文學中の拙稿「俳諧史の研究」三五頁以下を參照されたい。

延寶二年の四月にはかの名高い「釋教百韻」も刊行された。又その年の秋には、すでに齡古稀に達した老軀を提げて、高野詣でを思ひ立つた。流石に意氣壯んな所が見える。當時のさまは寫本「高野詣」によつて傳へられてゐる。その紀行はまづ八月三日、和泉の萬町といふ山里に宿つて

いなばもる里や泉州萬町樂

と吟じた事に筆を起して居る。宿としたあるじは、かの國學者契沖の後援者として知られて居る伏屋氏であつた。年代からいへば、當時契沖は、既に萬町の里に起臥して居たかも知れないのである。契沖の門人若沖の記する所によれば、下河邊長流が大阪に住んだ初の頃、宗因の名聲を知るや、自ら百韻一卷を送つて添削を乞ひ、爾來その會席にも連つて、宗因の推重を得た

といふ。すると契沖と宗因とも、また全く相識らずして終つたとは思はれない。或はこの高野詣の途次、我が古典研究の先覺と文藝新興の先達とは、伏屋氏の邸で相見る機會をもつたかもしれないと思ふと、深い興味を感ぜずには居れない。勿論それは單なる臆測に止るにせよ、この紀行によると伏屋氏重賢は夙くから宗因と交はり、俳諧の教を乞うて居たらしい。それで師を迎へるとすぐ翌四日の夜深く萬町の山里を立出でて、その日の入相頃に高野の宿についた。そしてその夜は泉州尾崎の住、吉田清章（俳號尾蠅）も來り加つて益々興を添へた。五日は奥の院に詣でゝ、

露の世や萬事の分別奥の院

と吟じ、その夜は大德院で俳諧を興行し、翌六日も亦二百韻を催した。それらの發句は宗因・重賢・清章が各々一句づゝ吟じた。七日曉深く下山して麓の里から船で和歌山に下り、翌八日は藤代御坂の景を賞し、歸途には紀三井寺や和歌浦をめぐつて暮過ぎて宿に歸つた。九日愈々家路に赴いたが、途中清章亭にとゞめられ、重賢も共に客となつて一日二日そこに遊んだ。紀行の文は頗る簡略で、そこまでで筆を止めて居るが、なほ最後に清章と重賢と三人で道すがら言捨てにしたといふ三吟百韻一卷を添へてある。

延寶三年は談林新風の展開史上から見ても、宗因自身の俳歴から言つても、最も記念されねばならない年であつた。即ちこの年春宗因は遙かに江戸に下つて、田代松意一派の人々に迎へられ、かの名高い「談林十百韻」の興行を見たのである。元來宗因の新俳風を呼ぶのに談林の名を以てするのは、實はこの松意一派の連衆の名稱が移つたのであつて、この一事を以てしても、「談林十百韻」が新風鼓吹上いかに重要視すべきものであつたかは明かであらう。同書の序によれば、かねて八九人の同志が鍛冶町に時々會合してゐたが、やがてその席を「我等如きの俳諧談林とこそ申すべけれ」など戯れたのから起つて、皆人が談林と言習はすやうになつた。その折節梅翁の下向に遇つて、是ぞ幸ひと親しみより、發句を乞うて松意以下九人の連衆が遂に十百韻を滿たしたのであるといふ。而してその第一卷は實に

されば爰に談林の木あり梅の花　梅翁
世俗眠をさますうぐひす　雪柴

といふ發句と脇とに始まつて居る。即ちこゝに梅花翁を中心とした談林の新俳叢がある事を自

ら劈頭に名告り、次にこの新風を以て世俗俳人の眠りを呼びさまさうといふ盛んな意氣を見せて居るのである。當時江戸では松尾桃青・山口信章等も亦宗因を迎へて一座し、大いにその風に傾倒したのであつた。かくてその年五月、宗因は老齢七十とはいふものの、意氣揚々たる姿で江戸を後にしたのであつた。歸途幽山・似春の二人は鎌倉まで慕ひ來て、

よれくまん兩馬があひに磯清水　梅翁

を發句とした所謂鎌倉三吟を興行したりした。京都に入つたのは六月十三日であつたが、舊友維舟を訪ねて、

夏の夜や東咄しに月は西

と興じ、天滿祓の頃浪花に歸つた。時恰も大阪の門人由平・幾音・西鶴等九人の獨吟に、宗因自ら判を加へた「大坂獨吟集」二卷はすでに刊行されて居る。今や談林の新風は東西相呼應して、まさに全俳壇を風靡する概があつた。

〔註〕

一、釋教百韻は題簽に「西山宗因釋教誹諧」と題した横本一冊のものがあるがこれには刊記がない。

然るに別に宗因の獨吟數卷を集めた題名不詳の横本中にも、この釋教百韻が收めてあり、右横本には

延寶二年寅四月上旬　板木屋權兵衞開板

とある。而してこの兩者は板下を全く異にして居り、その刊行の前後は推定する事が出來ない。――阿誰軒の俳書目には「釋教百韻」として出で、刊年を記してない。――なほ本書には安永七年笠古道と加茂由起とが、宗因の自筆を摸刻出版した半紙本一冊のものもある。

二、高野詣の寫本は伊藤松宇氏の藏で、書寫の年代は比較的新しく思はれる。かつ魯魚の誤も一二あるやうであるが、今この他に傳本のあるのを知らない。とにかく津山紀行・松島紀行等と共に珍重すべき資料である。（〔補記〕近時高野紀行は俳文學大系紀行篇中に收められた。）

三、若沖の聞書を左に抄出しておかう。

或云難波に初て住するの時、冬夜因商家談次當所之歌學連歌之達人間、或人西山宗因を以て告。即其歸る道すがら、水鳥の羽音はとぢぬ氷かなとして、幾程なく百韻をつゞり、宗因に削添を乞。或人に宗春（因子）語云、點多く加て卷之奥に此作者の名を聞事欲と云々。流即行名告終日談、宗因爲奇。其時以後會席に連る時は有讓如窺。

なほ詳しくは「國語と國文學」昭和六年四月號所載、森銑三氏の「新資料に據る下河邊長流傳の研究」參照。同氏は長流が大坂にあつて宗因に就いたのを、慶安三年の頃であらうと推定して居る。

四、延寶三年宗因東下のをり、芭蕉や素堂と一座した事については、別項「芭蕉雜考」を參照されたい。

五、梅翁・似春・幽山の鎌倉三吟は「宗因七百韻」中に收められてあり、なほ管見の範圍では別に二種の寫本が傳へられてゐる。各々小異があるが、大體寫本の方が原形で、「宗因七百韻」所收のものは、あとで多少推敲を加へたものらしい。なほ重安の撰んだ「糸屑集」（延寶三年十一月刊）卷二夏部の中には、梅翁の當時の道中吟が多く錄されて居る。同書はあまり流布されて居ないから、左にその全體を抄出しておかう。

西山の翁去ル夏の比、江戸よりのぼれりける道すがら、發句物語ありしをたゝにくたしおかんも、且ほいなけれは幸爰に書加へ侍る。

幽山似春とて兩人江戸よりしたひ來て於鎌倉三吟せしに

よれくまん兩馬かあいに礒清水　大坂　梅翁

於鎌倉

何代か玉卷葛のつるか岡

凉風や折ふし是はと筆捨松

やあしはらく夕のかね澤釣鰹

扇谷にて

やつ〳〵や此庭前の持あふき

螢火は百か物ありなめり川

明やすし夜日三日に大礒宿

小田原や植付られし長興山

箱根茶屋にて

燒豆腐薄うてあつき入日哉

三島手の雫凉しき茶碗哉

夏瘦か見えすくはかり原の里

江山やぬまつの屏風竹むしろ

さらしほす夏きにけらし富士の雪

餅に消る氷砂糖かふしの雪

江戸にて居尻定めぬと申けるをおもひ出て

爰に一夜江尻さたむるほたる哉

安部の市やいさまた人を夏紙子
葛楓腹にしけるや十團子
夕立や岡部にかゝる御迷惑
島田にて雨天にとめられて
夏川や難儀は爰にとゝめたり
命なりさゆの中山香蕎散
御油五位の沙汰ありしに
御油か五位かとかく茂るは驚の森
八橋にて
五文字やけふは水行ところてん
宮
舟は七里三里先にや夏の月
夏帶や鈴鹿の御祓せしめ繩
影涼し松原さして落日和
十三日京入に
祇園會の山路に急け大津駕籠
維舟にて
夏の夜や東咄しに月はにし
御手洗や明日は東の十團子
下船にて
夏山や或は野を分ふし見哉
天滿祓に
かはる瀬や御祓に捨る瓜の皮

「糸屑集」中に收められた梅翁の發句は總計三十四句で、しかもその中三十句は以上の旅中吟である。

〔補記〕

談林十百韻が興行された際の事については、當時の連衆の一人たる野口在色の隨筆稿本「誹諧解脫抄」に、

東府忠知は梅翁の連誹殊更に稱美しけれど、終に對面はなかりき。予には三十程年まし侍れど、常にむ

つまじくかたらひけり。江戸の風俗賤しく、俳諧入ほがなるを歎き、より〳〵忠知と千句を催し初心のやからに知らせん事をねがひしに、おもはざりき忠知身まかりき。止事を得ずして由比雪柴老人・田代松意・三輪一鐵、その外は初心の中も其器あるをまねきて、鍛冶町に會所をしつらひ侍し折から、難波より梅翁下向して、内藤左京亮殿に旅宿有しを迎へければ、日なく歩行よりまふでけるに、人々喜悦のおもひをなして、初心を導く便として千句をおもひ立侍る。幸の下向なれば　卷頭の句したまへとせめければ、

されば爰に檀林の木あり梅の花　西山梅翁
世俗眠りをさますうぐひす　由比雪柴
朝霞たばこのけぶり横折て　野口在色

是を最初として檀林十百韻となしぬ。連衆は松意・正友・一鐵・卜尺・一朝・志計・松臼、都て十輩、板に刻て西は長崎東は仙臺を限りて、この道の好士耳を洗はぬと云事なし。

と記してある。「談林十百韻」の序に述べる所とほゞ同一だが、これによれば寧ろ在色が主となつて會所を設けた如く思はれる。しかし同じく在色の稿本「曉眠起」によれば、「寛文十二年春より松意宅を吾等の誹諧談林所と稱す」とあるから、やはり松意がその中心人物であつた事は明かである。又「曉眠起」にはこの十百韻が三日二夜で卷き終へられた事も記してある。なほ「解脱抄」には在色が公用で備前に赴き、その歸途始めて宗因に謁した時のさまを述べて、

大坂に歸り天滿に行て宗因の方丈を尋ね侍るに、僕も見へず、爐に炭はあれども書棚もなし。此人は八歳より歌學に入て世にふれし連歌の師也。誹諧もことなき(マヽ)作者にて、誹名は難波の梅翁と呼けり。しばらく物がたりして予發句

繼穗にはゆるせ難波の梅法師

是をしるしに師に仰がんと乞ければ、こよなふ祝ひ給ひき。旅宿しばしの中、梅翁連誹の門弟境の玄順・茶臼山の隱士道寸・西鶴など出會て、百韻四五席終りぬ。

と言つて居る。その年代を明記しないが、寛文末年頃の事と推定される。當時の宗因の生活の狀も窺はれ、又その聲名の世に高かつたさまも知られる。（「解脱抄」は昭和七年九月長野縣上伊那郡教育會から謄刻刊行された「野口在色遺稿第一篇」による。なほ在色の遺稿については、雜誌「筑波」昭和五年七月號所載、小松松韻氏の「談林十百韻作者野口在色」參照。）

今や宗因は新風提唱の中心人物として、意氣潑剌たる多くの新人たちに擁せられ、老の至つたのを忘れるくらゐであつたらう。延寶三年以後に於ける彼の俳壇的活動については、別掲の

年譜に讓つて絮說する事を避けるが、西鶴・惟中・高政・松意等門人たちの活動は更に〳〵目ざましいものがあつた。案ふに談林新風の勃興に際し、その第一線に立つて呼號したのは、寧ろこれらの門人たちであつた。宗因自身は流石に穩健持する所があつた。だがかの阿蘭陀流や伴天連社の徒等は、必ずしも相互に深く提携して進んだのではない。だからもしこれを統率すべき適當な人物がなかつたとしたら、新風が果してあれだけの急速な展開を以て、その威力を發揮し得たかは疑はしい。或は支離滅裂な混亂の中に、徒に異を唱へ奇を叫んで終つたかもしれない。幸ひにしてこゝに連歌師としての長い修養を積み、指導者たるべき十分の背景と重味とを持つた宗因を、この過激な新人たちの統帥者として得る事が出來た。宗因は元來俳系上貞門閥の拘束を受ける事がなく、古風俳諧の行詰りを打開するには最も自由な立場にあつた。而して連歌師としての閲歷はその俳壇的地位を重からしめ、加ふるに新進俊髦の士を多く門下に擁して、こゝに新風樹立の功を全うし得たのであつた。宗因が一幽と號して始めて俳壇の人となつた頃、かうした目ざましい成功を收めようといふ事は、恐らく豫期しなかつた所であつたらう。もとよりそれは彼自身の才と力とによる事ではあるが、一面また時の勢に乘じた幸運でもあつた。

延寶末年に及んで談林の新調は殆ど全俳壇を風靡してしまつた。がその放縱亂雜の弊も亦甚しくなつた。燎原の勢で蔓つた新風も、流行わづかに十年に滿たずして、早くもその前途に行詰りが感ぜられるに至つた。宗因も晩年にはこれを歎じて犬櫻の吟があり、また楊梅の一句に口を閉ぢて再び連歌に還つたと傳へられてゐる。犬櫻の吟とは

今筑波や鎌倉宗鑑が犬櫻　梅翁

の句をさすので、鳴瀧の秋風等が風義を亂すのを慨して作つたのであるといふ。今この說の出る所を詳にしないが、句は「阿蘭陀丸二番船」(延寶八年刊)に載する獨吟百韻の發句であるから、當時の作であらう。又楊梅の句も同書所載の獨吟百韻の發句であるが、別に梅翁の「江戸大坂通し馬」(延寶八年刊)にも、

なんにもはや楊梅の實むかし口　江雲

我等もかびた紫蘇に薑

と唱和して居る。こゝには明かに時弊に對する皮肉な口吻が見られる。但し天和二年刊の「家

土産」などにも、なほ梅翁の數句を見るから、楊梅の吟以後全く俳諧に口を閉ぢたとは考へられない。だが當時宗因が漸く俳諧から遠ざかる傾があつた事は、實際天和年間に入つてからの作が寥々たる事によつても察せられる。勿論老齢氣力の衰へた點もあつたらうが、別項延寶八年と天和元年との年譜を比較しても、その間あまりに甚しい差が見られるのである。これを老齢の故とのみ解する事は出來ない。案ずに宗因は初め俳諧を連歌の寓言だとして、自由清新な調を唱へたが、結局遊戯的娯樂的な態度から離れてしまふ事は出來なかつた。しかも末流の徒が放縱な遊戯三昧に陷つて行くのを見ては、やはり不滿を感ぜずには居れなかつた。それは一見矛盾した事のやうであるが、宗因の藝術的反省は、この時すでに時代に先んじて動いて居たのである。延寶末年に於ける俳風の行詰りは、當時の心ある人たちの間に、期せずして新たな展開が求められて居た。而してそれは和歌連歌から獨立し開放された俳諧に、和歌連歌と同樣な眞の藝術的意義を見出さうとする眞摯な要望となつて顯れた。かうした俳壇の內部的な動きを最も強く自覺し、最も眞面目に精進したのは、卽ち芭蕉を始め、鬼貫・言水・來山・才麿等の人々であつたのである。而して宗因自身も亦晩年に至つて、同じくこの要望を自覺し始めて居たのであつた。しかも老齢八十に垂んとしてゐる彼には、もはや俳風を更に革新しようとするだけの氣力もなく、纔かにその要望の逃避所として、連歌への復歸を求めたのではあるまいか。

天和二年三月二十八日、七十八歳で宗因は歿した。法名實省院圓齋宗因居士。墓は大阪天滿西寺町西福寺にある。俳諧は彼によつて遂に藝術として大成されるには至らなかつた。とはいへ芭蕉をして貞德の涎を舐るに終らしめなかつたのは、實に宗因の力であつた。又西鶴をして近世の小說に一生面を拓かせたのも、その基く所は談林の俳風にある。宗因のわが俳諧史上、否近世文學史上に於ける地位は、もつと正しく認識されねばならないであらう。

〔註〕

一、犬櫻と楊梅との句については、素外の「梅翁宗因發句集」の序に、「老後鳴瀧の秋風等風義を亂すに及て犬櫻の唫あり、將楊梅の一句に口を閉ぢて世を連歌に終る」とあり、又同句集には次のやうな詞書を附して居る。

當世の風體年々日々所〳〵にうつり
かはる新しく珍らしくかなはぬ老の

耳にだにおもしろくうらやましながら初學の人いづれをよしとおもひさだむるかたなくやとおぼえて

今つくばや鎌倉宗鑑が大さくち

しかし「阿蘭陀丸二番船」所載の獨吟には全く詞書がなく、

蒙ひそかにきく裏猿の春

と脇をついでゐる。又角醒秀億の「葛藤」（明和五年刊）にはこの犬櫻の句を載せて、「俳諧無心に變ところ此句をつくりて孔敷せしと也」と記してある。鳴瀧の秋風に關した說については、何か據る所があるのだらうが、今これを知る事が出來ない。――秋風撰の追善集「打曇祇」にでもあるのではないかと思ふが、同書は未見である。――楊梅の句、「阿蘭陀丸二番船」所載獨吟の脇までを示せば

なんにもはや楊梅（ヤマモ）の實（サネ）むかし口

時に吹風呑こんで夏

とある。

二、宗因が晩年俳風の亂脈を歎じた事については、かつて門人に送つた手紙の中に、さうした事を述べてあつたものを見た記憶がある。今遺憾ながらこれを確かに引用する事が出來ない。〔補〕在色の「俳諧解脫抄」に

門弟梅朝東府へ下りしに小札を調へ、俳の事も老衰益なきなど書て、猶々書に明朝和郡山へまかる。古き都の花見んなど書送られしを、形見とおもひ予表具して、今以所持す。

とある。これは「江戸大坂通し馬」の刊行された延寶八年の事と推定される。當時俳諧に不滿を抱いて居た狀が察せられる。

三、宗因の享年については、七十三歳・八十三歳等の異說もあるが、延寶八年の「俳諧破邪顯正返答」中に「忝も梅翁老師は、（中略）ことし七十六歳の餘算をへて」とあるから、七十八歳殘たる事は疑ひない。〔補〕雜誌國語・國文第二卷第九號所載小宮豐隆氏の「西山宗因に就いて」の中には、西鶴撰の追善集「精進膾」によつて、その歿したのは通說の如く三月廿八日でなく、廿七日であると論ぜられて居る。しかし西福寺の過去帳を始め、諸書に傳へる所すべて廿八日とあるので、――よしそれらが多く根本資料とすべきものでないとしても、――「精進膾」だけで直ちに廿七日と決するのも、些か早計に失するかも知れない。なほ享年についても同論文參照。

四、大阪天滿宮の所傳によれば、宗因は延寶八年初夏の頃、天滿宮連歌所宗匠の職を息宗春に讓つて江戸に赴き、同地で客死した。墓は江戸谷中日暮里養福寺内にあり、大坂西福寺内のものは宗春が門人の建てた供養碑であるといふ。又「浪花人物志」にも「天和二年壬戌三月廿八日江戸の客舍に歿す。年七十三或、云七十八。墓は江戸日暮里養福寺にあり、又大坂天滿西寺町西福寺に碑あり。實省宗因法師觀光昌察處士と刻せり」とある、しかし江戸客死說は確證の徵すべきものがなく、「精

進膾」によつても江戸で歿したとは思はれない。又碑面の刻字中宗因の法名は「實省宗因法師」だけで、以下は孫昌察の法名を混同したのである。なほ俳家奇人談も東都で歿したとしてゐる。

〔補記〕

國學院雜誌昭和八年一・二月號所載彌富破摩雄氏の「加藤正方と西山宗因」は、宗因の研究上特に正方との關係を知るべく、極めて重要な論文である。同氏の紹介した宗因自筆の紀行「しづのをだまき」――寛永九年九月熊本を出發して上京した折の紀行で、十月十四日着京、當時本圀寺内に浪居して居た加藤風庵の許に寄寓した事に筆を止めてゐる。「しづのをだまき」の名は彌富氏の假に題する所である。――によれば、

釋將寺豪信僧都はわがあげまきの頃より、なにはづのことのはをもをしへたまひて、師弟のむつび年久しく侍れば、別の時も後會頼みがたしと、思へるけしきのわすれがたくて、

老いぬればこれやかぎりと歎きける
人のわかれぞことにかなしき

とあり、豪信僧都に夙くから師事して居た事が明かにされる。又同紀行に、

八代の城は年頃たのみしかげにて、すみなれたる所なれば、名殘見にまかりたくは侍りつれど、さすがに時にあひ、はなやかなるふるまひこそせざりしかど、あたりちかくつかへ、ことさら連ね歌の道よりまつはされたる身のおとろへ、物げなきあしもとにて、さまよひ見られんよりもと、思ひまはすごとにおもひいづるは、ゆふば川、悟眞寺、白木社の御前の山なり。

春のやま秋のもみぢにしめゆひし
かざしも今はたれならすらん

とあるから、正方には連歌を以て近侍して居た事が知られる。紀行は

十四日都に入りぬ。かくてとしごろたのみたる人、今は世の望みもなし、年の殘りもいくばくならじとて、かざりをもおろし、しもつかたの堀河法花三昧おこなふ寺あり。その寺の林下にやぶれたる風の庵を結ばれしに、予も亦かたはら近き夕顔の小家をしつらひて、ゑみの眉ひらけぬるありさまにぞ侍る。世の中はいづくかさしてといへる古歌に、よくもかなへる身かな。

くりかへし思へば世やはうかるべき
身はもとよりのしづのをだ巻

といふ條で終つて居る。「むかし日」の梅翁傳に「始山城の伏水に隱る」――素外の「梅翁宗因發句集」の序にも伏見寓居の事は見える。――とあるのは、なほこれより後の事であらう。

なほ右の傳中に加藤風庵が奥の岩城にさすらつたとあるのは全く誤で、肥後侯加藤忠廣が出羽莊内に謫居を命ぜられた事と混同したのであらう。正方は忠廣の事件に關して、江戸に召喚訊問を受けたのだが、直ちに釋放されたのである。しかし爲に浪々の身となつて、年來法緣が深かつた京都本圀寺の日運上人をたより、先づそこに身を寄せたのであつた。その後正保元年八月、幕府は正方の身柄を松平安藝守に御預としたので、遠く廣島に下り、この地で終つた。墓は同地の妙風寺にあり、又別に正方が父の菩提寺として建立した本國寺塔頭了覺院にも供養の石廟が建てられ、その傍には正方に殉死した青木兵三郎の墓もある。

附記、本稿は雜誌「同人」昭和三年六月・同年八月・昭和四年六月號に連載した拙稿「西山宗因」をもととして、これに些か補訂を加へたものである。但し右の拙稿は延寶三年以下未完のまゝであつたので、今新に補つた。それは改造社版俳句講座の爲に執筆した宗因評傳の後半部と、ほゞ同一である。又次に掲ぐる年譜は、雜誌「上方」昭和七年四月發行上方俳星號所載拙稿「西山宗因年譜」により、これにその後知られた新事項を若干增補したものである。

西山宗因年譜

宗因に關する事蹟の中で、今その年代が明かに知られる事項のみについて、簡單な年譜を作製した。何年から何年までの間頃といふやうに、大體の年代を推定し得る事項は、なほこの外にも多いが、それらはすべて省く事にした。又歿後に出版された書は、宗因の追善集とか句集とか、特に關係の深いもののみに限つて掲げる事にした。

慶長十年（一歲）

○出　生。（歿年より逆算推定。）

元和六年（十六歲）

○この頃より連歌に志す。（「時世粧」に「二八の比より連歌の道に志し」、又昌琢廿五回忌追善宗因獨吟の詞書に「廿たらぬ程より三十あまりまてなづさひ」とあるによる。）

寛永五年（二十四歲）

西山宗因

○七月二十九日、京都に於て昌琢・昌俔・兼也・玄陳・慶純・今相・久世・存賀・政重・昌佐・正利等と一座し百韻興行、豐一の附句八あり。

同　八年（二十七歳）

○三月二十五日、加藤正方と兩吟千句を催し昌琢に判を乞ふ。

同　九年（二十八歳）

○六月、主家加藤忠廣出羽莊内に謫居を命ぜらる。正方も江戸に召喚を受け、宗因これに隨從す。

○七月、江戸より京都に歸り、更に鄉國に下る。九月二十五日故舊に別れて熊本を出發し、十月十四日上京、當時浪人して本圀寺にありし舊主加藤正方（片岡風庵）の許に身を寄す。（この上京、歸國、再上京を寛永九年の事とするのは今彌富氏説に從つたが、なほ再考の餘地がある。）

同　十三年（三十二歳）

○昌琢歿す。

同　十五年（三十四歳）

○北野法樂獨吟千句を興行す。

○九月、西本願寺にて玄的・楓・正方・玄俊・利水・紹春・仲安・定長・滿世・言當・昌通等と百韻興行。

同　十六年（三十五歳）

○四月、近衞櫻御所に於て梧・玄的以下十二人と共に千句興行。

○冬、讃岐に遊び松山白峯寺に詣づ。紀行「讃岐下り水くらげ」あり。

同　十七年（三十六歳）

○春、昨遊を憶ひ獨吟の百韻一卷あり。

○二月十餘日、正方・玄的と共に東に赴く途中、伊勢尾張の間の海上にて三吟百韻を催す。

同　二十年（三十九歳）

○歳暮に「のばえばや老といはれむ年の暮」の吟あり。（三籟集）

正保元年（四十歳）

西山宗因

○八月、加藤風庵松平安藝守に御預けとなり、京都より廣島に移居す。

同　二年（四十一歳）

○「豐年のためしにもせむはじめ哉」の吟あり。（三籟集）

慶安元年（四十四歳）

○九月、浪華中島天滿宮のほとりに移り住む。（告天滿宮文）

○九月二十三日、加藤風庵廣島にて歿す。同地妙風寺に葬る。

同　二年（四十五歳）

○九月二十三日、風庵追善の獨吟千句を興行す。

承應元年（四十八歳）

○二月二十五日、菅家神退七百五十年萬句興行あり、その一座に加はる。

同　二年（四十九歳）

○七月二十三日、大坂を發し津山に旅行す、「津山紀行」一卷あり。「三籟集」中にも當時の作多く散見す。

同　三年（五十歳）

○風庵七回忌「七かへり卷ほす袖や露の秋」の吟あり。（三籟集）

明暦二年（五十二歳）

○元日に「明暦や梅のあらたに開くる日」の吟あり。（境海草）

○正月、休安撰「夢見草」刊、發句五附句二入集。俳號を一幽といへり。

○九月十五日、向榮庵に移り住み告天滿宮文を作る。

同　三年（五十三歳）

○二月十六日、卽非禪師渡來す。

萬治元年（五十四歳）

○九月、燕石撰「牛飼」刊、一句入集。

同　二年（五十五歳）

○正月、「萬代を年の名しるしけふの春」の吟あり。（三籟集）

○九月、胤及撰「鉋屑」に入集。十月、梅盛撰「捨子集」刊、一句入集。

同　三年（五十六歳）

○二月五日、昌琢二十五回忌追善の獨吟百韻興行。

○五月、重賴撰「懐子」刊、入集。七月顯成撰「境海草」刊、發句二十七附句十入集。

○風庵十三回忌「消えにきとみし世の影やけさの月」の吟あり。（三籟集）

寛文元年（五十七歳）

○正月十一日、息宗春と伊勢神宮に詣で法樂の兩吟百韻を興行す。

○成安撰「埋草」刊、九句入集。

同　二年（五十八歳）

○正月、如之撰「伊勢正直集」刊、十一句入集。六月光方撰「雀子集」刊、一句入集。

○三月、大坂を發し七月二十日あまり岩城に着、八月中旬松島に遊び九月末西歸、十月初旬江戸に着す、紀行一卷あり。この旅中に娘死す、その追悼の獨吟百韻あり。

同　三年（五十九歳）

○江戸にて春を迎ふ。

同　四年（六十歳）

○元日「十六の若文字かへすことし哉」の吟あり。（發句集追加）

○五月、重賴撰「佐夜中山集」刊、十七句入集。西翁と號せり。

○秋、豐前小倉に至り折から留錫中の卽非禪師に謁す。

同　五年（六十一歳）

○正月、小笠原忠眞公の七十賀獨吟千句を興行す。

○六月十二日、季吟・順正・顯成等と百韻を催す。（季吟廿會集）

○八月、立圃撰「小町踊」刊、六句入集。

同　六年（六十二歳）

○正月、「立春に二日路早し午の年」・「今朝是へお馬が參ることし哉」等の吟あり。（櫻川）

○正月、岩城飯野八幡に奉納の獨吟百韻興行。（歌仙そろへ）

○二月、一雪撰「洗濯物」刊、入集。三月長愛子撰「遠近集」刊、十四句入集。九月重德撰「俳諧獨吟集」刊、獨吟百韻一卷入集。風鈴軒撰「夜錦」成る、入集。

○七月二十七日、靈山重阿彌にて季吟・任口・保友等と百韻を催す。（季吟十會集）

同　七年（六十三歳）

○正月、重以撰「百人一句」刊、入集。正月「小相撲」刊、西翁點の卷あり。

○三月、雨中清水に花見して「登蓮が蓑きて笠きて花見哉」の吟あり。（櫻川）

○四月上旬、宇治に遊び「藤浪やしばらく御座をかゝり舟」の吟あり。（櫻川）

○十月十八日、小倉の忠眞公歿、年七十二。

同　八年（六十四歳）

○五月、加友撰「伊勢踊」刊、三句入集。

同　九年（六十五歳）

○夏豐前小倉に至る。（壽山外集）

同　十年（六十六歳）

○宰府に詣でゝ發心の志あり「思ひたつ道かへりみぬ霞かな」と吟ず。（三籟集）

○二月十五日、小倉廣壽山福聚寺の法雲禪師の許にて薙髮出家す。當時の自吟、知友よりおくられし句等多し。

○六月、正辰撰「大和順禮」刊、三句入集。

同　十一年（六十七歳）

○二月、周可撰「吉野山獨案內」刊、入集。七月不三・宜休撰「難波草」刊、六句入集。

○五月二十日、卽非禪師長崎にて遷化す。當時宗因も長崎にありて「かくれけりいかにせよとか五月やみ」と吟ず。なほ當時の連歌俳諧の發句諸書に見ゆ。

○十月頃筑紫より歸り、維舟より「一句しめせ霧も都にのぼり僧」の句を贈らる。（櫻川）

同　十二年（六十八歳）

○正月、明石にて「書初や千秋播州大杉原」の吟あり。（櫻川）

○三月、重賴撰「時世粧」刊、二十四句入集。六月「有馬私雨」刊、二句入集。七月顯成撰「續境海草」刊、四十九句入集。八月重德撰「ちり塚」刊、戀百韻入集。一雪撰「晴小袖」刊、入集。風鈴軒撰「櫻川」成る、三十四句入集。

延寶元年（六十九歳）

○「宗因千句」刊。（塙本には刊記なし、阿誰軒の「俳諧書籍目錄」による。）

○「哥仙大坂俳諧師」に發句と肖像出づ。

○六月、鶴永撰「生玉萬句」刊、追加の第三に出句す。

同　二年（七十歳）

○正月「七十は何程の事ぞ千世の春」（大井川）「書初や七十歳筆攝州住」（三部抄）の吟あり、又久任・宗春と三吟にて宗因七十賀の連歌興行あり。（十載鷹）

○三月、「澁團」刊、宗因を難ず。

○四月、釋教百韻所出の獨吟集（題名未詳）刊、十月中旬釋教百韻を自ら書す。

○五月、維舟撰「大井川集」刊、六句入集。五月蘭秀撰「後撰犬筑波集」刊、發句二附句七入集。十一月貞竹撰「小川千句」刊、一句入集。

○七月十一日、明石人丸社法樂獨吟百韻興行。

○八月、高野山に詣で紀行一卷あり。

同　三年（七十一歳）

○春、江戸に赴き田代松意等の「談林十百韻」卷頭の發句を吟じ、又松尾桃青等と一座して百韻を興行せり。

○四月、「大坂獨吟集」刊、宗因判せり。

○五月、幽山・似春との三吟あり。（鎌倉三吟）

○六月十三日、歸坂の途京に入り維舟を訪ふ。當時旅中の吟「糸屑集」に多〻見ゆ。

○七月、高政撰「誹諧繪合」刊、獨吟百韻入集。同月重德撰「新續獨吟集」刊、獨吟百韻入集。十一月重安撰「糸屑集」刊、三十四句入集。廣岡宗信撰「千宜理記」刊、發句二十六附句二十三入集。

○十一月、「談林十百韻」刊。

同　四年（七十二歳）

○三月、季吟撰「季吟二十會集」刊、入集。同月維舟撰「武藏野」刊、十三句入集。七月蝶々子撰「當世男」刊、發句十二附句四入集。西鶴撰「俳諧師手鑑」刊、入集。

○七月八日、保俊・旨恕・如見・尾蠅・保友等と玖也追善の百韻を催す。（宗因七百韻）

○「宗因五百韻」刊。（攝陽奇觀卷二十一）○「溫故日錄」を撰び刊行す。
○「天滿千句」刊、門人等との千句なり。
○鬼貫十六歳にして宗因に師事す。（獨言）

同　五年（七十三歳）

○五月二十五日、未刀・如見・尾蠅・幾音等と百韻を催す。（宗因七百韻）
○七月、高政撰「後集繪合千百韻」刊、高政との兩吟百韻・弘氏との兩吟百韻入集。十一月惟中撰「三部抄」刊、入集。兼賴撰「熱田宮雀」刊、入集。

同　六年（七十四歳）

○二月十五日、由平・如水・恕行・木因等と俳諧興行。（眞蹟）
○四月十五日、維舟・旨恕・宗吾・政寛等と百韻を催す。（維舟眞蹟）
○五月十二日、一時軒宅にて惟中・西鶴・益翁・由平等と百韻を催す。（太郎五百韻）
○夏、高政自宅に宗因を聘す、宗因「末茂れ守武流の惣本寺」と挨拶の句あり（破邪顯正）
○十二月十六日、江雲・惟中・益翁・由平・貞因等と百韻を催す。（次郎五百韻）
○二月、「四人法師」刊、葎翁との薪二百韻入集。石齋撰「珍重集」刊、葎翁との兩吟百韻・石齋との兩吟百韻・獨吟百韻入集。「三鐵輪」刊、獨吟百韻入集。旨恕撰「難波風」・橋水撰「筑紫海」・西鶴撰「物種集」・友雪撰「櫻乎句」刊、連句・發句・附句等入集せり。

同　七年（七十五歳）

○五月十五日、定之・道方・玄的等と連歌興行。
○七月二十五日より二十七日まで峯・常副・守供・氏重・經冬・氏延・守相・氏守・守厚・元哉・俊正等と千句連歌興行。
○十一月七日、松門亭にて似春・旨恕・益翁・西鶴・惟中等と百韻を催す。（わたし船）
○十一月二十五日、茶翁・保友・如水・由平・木因等と俳諧興行。（眞蹟）
○「宗因連歌千句」（風庵追善の獨吟）刊。
○七月、三田淨久撰「河内鑑名所記」刊、入集。九月蝶々子撰「玉手箱」刊、二十九句入集。十一月富永辰壽撰「花みち」刊、入集。十二月旨恕撰「わたし船」刊、連句入集。正月惟中撰「太郎五百韻」・「近來俳諧風體抄」刊、連句及び發句十二入集。西治

撰「二葉集」刊、附句入集。「名取川」刊、發句入集。

○隨流著「誹諧破邪顯正」刊。

同　八年（七十六歳）

○四月、遠舟撰「太夫櫻」刊。七月宗圓撰「阿蘭丸二番船」刊。幽山撰「誹枕」刊。十月松意撰「軒端の獨活」刊。友悅撰「それ〴〵草」刊。九月梅朝撰「江戸大坂通馬」刊。九月西國撰「雲喰集」刊。以上の諸書に連句發句入集。

○六月、「山の端千句」刊、梅翁・四友・似春の三吟百韻十一卷を收む。

○「行事板」・「破邪顯正返答」・「綾卷」・「猿蓑」・「二ツ盃」・「賴政」等刊。

天和元年（七十七歳）

○言水撰「東日記」刊、入集。

○八月二十四日、惟中・宗實・一禮・益友等と讃岐觀音寺の宗鑑舊蹟一夜庵百韻を催す。（一夜庵建立緣起）

同　二年（七十八歳）

○正月刊「俳諧關相撲」に梅翁點の卷を收む。（俳家奇人談所載）

○春和州郡山にて「たのしてふ世の春をみん三笠山」の吟あり。（三籟集）

○四月、幾音撰「家土產」刊、七句入集。九月「有馬名所鑑」刊、入集。

○三月二十八日歿す。

○七月、秋風撰の追善集「打曇砥」刊。

同　三年

○三月二十七日、西鶴・宗因の一周忌を營み「精進膾」を撰び刊行す。

○一周忌に息宗春「霞む野は今しも去年の夢ぢ哉」の吟を手向く。（三籟集）

享保八年

○息宗春歿す。

同　十年

○九月、虎角撰「古帋子」刊、宗因に關する話を錄せり。

同　十九年

西山宗因

○「三籟集」刊。

明和五年

○秀億撰「葛藤」刊、宗因に關する逸話を錄す。

安永二年

○「十載薦」刊、宗因の祖父に關する話等を錄す。

同　六年

○九月、句集「むかしロ」刊。

同　七年

○笠古道・加茂由起「釋教百韻」眞蹟本を刊行す。

同　十年

○三月、追善集「梅翁百年香」刊。

天明元年

○素外編「梅翁宗因發句集」刊。

寛政元年

○大坂の獨名・舍鳳の社徒本禪院境内に宗因の碑を建て、追善集「葛の葉の」を撰びて刊行す。

同　十二年

○一炊庵編「宗因文集」刊。

○二月、「宗因俳諧發句集」刊。（安永六年刊「昔日」の改題本にして、一炊庵の序文と月居の跋文とを加へたり。）

文化二年

○春、素外編「梅翁宗因發句集」增補版刊。（本書は始め安永十年に成り、天明元年に追加百十二章、同七年に拾遺百十一章、文化二年に後拾遺六十四章、後々拾遺四章を增補し考異を加へて出せるなり。）

同　六年

○素外編句碑集「梅のまつり」成る。文政元年刊行。

同　十一年

○春、素外・素塵等宗因の碑を三綠山中飯倉宮居東門の傍に建て、その碑文の拓本を刊行す。

文政六年

○春、素外編「梅翁發句集」刊。

〔追補記〕

補記にあげた「しづのをだまき」はその後「飛鳥川」と題し、小宮豐隆氏の解說を添へて複製出版された。又本文は彌富氏の著「近世國文學の研究」の中にも收められてある。なほ津山の釋將寺については、雜誌「唐辛子」昭和八年三月號に西村燕々氏が津山高女教諭池田土城氏の調査の結果を紹介して居る。これによると釋將又寂澄は寂靜が正しく、寛永年間僧映快が津山市小田中に建立したものであるといふ。津山には熊本退轉の浪士が多く移り住んで居たので、宗因の舊友もあつたわけである。

西鶴の俳歷

西鶴が藝術家としてふみ出した第一歩は、いふまでもなく俳諧の世界であつた。どんな環境や事情が彼をさうした第一歩に導いたのか、それについては今日考察を試みるべき何の材料も殘されてゐない。西鶴の出自やその家庭の有樣、もしくは彼の少年時代・青年時代の生活、さういふ傳記方面の事は從來全く知られてゐないのである。只彼が大阪に生れた事だけは、自ら「俳諧團袋」の中に「ふるさと難波」と言つて居るので明かにされる。又其角の「句兄弟」にも「されば難波江に生れ云々」とあり、北條團水の撰んだ西鶴十三回忌追善集「心葉」にも、「攝ノ浪速ノ産ナリ」とあるので、大阪出生說についてはもはや疑問を挿む餘地はない。卽ち元祿六年五十二歲で歿したといふ所から逆算すれば、彼は寛永十九年難波に呱々の聲をあげたのであつた。その外には父母のことはおろか――祖父の事は多少分つてゐる――西鶴自身の俗稱すらも明かでないのである。かつて饗庭篁村氏が「雀躍」か何かの中に、平太夫といふ俗稱

を發見したといつて、それから彼を武家出であらうなどゝ述べられた事があつたが、それも實は園水の印記の誤讀であつた。少くとも彼が、武家の家庭に育つたとは到底思はれない。それはいろ〳〵想像は加へられぬ事はない。例へば彼の父祖に文人的の血が流れてゐただらうとか彼がかの世之介の如く早熟の少年であつたらうとか、或は又青年期の生活環境が幾分享樂的耽溺趣味のものであつたらうとか、さういふ推測は彼のその後の作品を透してさま〴〵に考へられはする。けれども要するにそれは推測に止るにすぎない。まづは彼が俳諧に指を染めた動機は、多少とも文學を好む少青年が、今であれば映畫劇の一つも作つて見たり、新感覺派の小說でも書いて見たがるのと同じく、當時の誰にでも弄ばれ易かつた俳諧をやり出したのである位に、解しておく方が無難であらう。

〔補記〕

西鶴の傳記に關する新資料として、近時伊藤梅宇の隨筆「見聞談叢」中の「貞享元祿の頃攝津の大阪に平山……五といふ町人あり、有德なるものなれるか、妻もはやく死し、一女あれとも盲目、それも死さり、名跡を手代にゆつりて、僧にもならず、世間を自由にくらし、行脚同事にて、頭陀をかけ半年程諸方を巡りては宿へ歸り、甚俳諧をこのみて一晶をしたひ、後には又流儀も自己の流義になり名を　西鶴とあらため、永代藏又は西の海、又は世上四民雜形なといふ書を作れるものなり云々」といふ記事が紹介された。（國語と國文學、昭和四年一月號所載、藤村作氏「井原西鶴は平山藤五か」參照）。この記事がすべてそのまゝ信ぜられないとしても、これによつて西鶴の私生活の一面は、ある點まで明かに推察する事が出來る。但し俳諧に於ける一晶との關係は、右に傳へるやうな事實は認められない。たゞこれも近時發見された一晶筆の西鶴像が存在する事によつて、二人がかなり親しい交游關係をもつて居た事だけは推測される。

それでは彼が俳諧をやり始めたのは、いつ頃からであらうか。それもはつきりした事は分らないが、延寶九年に刊行された「大矢數」の跋に、自ら

予俳諧正風初道に入て二十五年云々

と言つてゐるので、それから逆算して見ると、彼は明暦三年十六歳のをり俳諧の初道にふみこ

んだ事になる。但しこの「大矢數」は、延寶八年に興行されたのであるから、跋文もその年書いておいたものとすれば、明暦二年十五歳の時から始めた事になる。又元祿四年に刊行された「石車」の中にも、

西鵬俳道に入て三十餘年の執行云々

とか

西鵬詞に俳諧程の事なれども我三十年點をいたせしに今に毎月の卷々覺束なき事のみ云々

とある。元祿四年から三十年前は寛文二年で、西鶴が二十一歳の時にあたる。十五六歳から俳諧をはじめるといふ事は、普通人としてはやゝ早すぎるかも知れないが、天才的の彼、ことには早熟であつたらしい彼の事であるから、十五六歳の頃からすでに十七文字を弄ぶ位のことはもとよりこれをよくしたであらう。且つ「石車」の言葉を、文字通り三十年と解釋すれば、二十一歳の時には早くも點者の域に達して居るのである。これも三十年は概數であらうと疑へば疑はれぬ事はないが、それにしても少くとも二十五六年前にはならう。するとやつぱりまだ而立の年にも達しない中に、もう點者となつてゐたわけである。況んや西鶴は算數の文字を用ひる事には、極めて正確な人なので、これもこのまゝ三十年と勘定して多く誤はなからう。實際又彼の才から見ると、弱冠にして早く人の師となることも、さして怪むに足りない事なのである。小西來山の如きも十八歳で判者となつたと傳へられてゐる。且つ彼の句の最も初めて物に見えるのは、今日知られてゐるものでは、寛文六年に刊行された「遠近集」であるが、この書は撰者の自序によると、實は寛文元年に業を始めたものであるから、集中の西鶴の句はやはりその頃のものであらうと思はれる。卽ち彼が二十歳か二十一歳頃の作と見てよい。この集には宗因の句も十四句出てをり、西鶴の句は三句見える。すでに宗因等と伍して集中に名を列して居る位であれば、當時彼が俳壇に相當名を成して居た事は認められるであらう。卽ち西鶴は十五六歳の頃始めて俳諧に志し、しかも數年の後には早くも集中に名を列するだけの伎倆を持つに至つたのであつた。

次に起る問題は、彼が俳諧に於て初めて師事した人は、誰であつたかといふ事である。だがこれもやつぱり確かな事は分らない。ある人は彼の初期の作品に、著しく貞徳風のよみ口が見える所から推して、彼はまづ貞門の人について學んだのであらう。そして宗因に見えるやうに

なつたのは大分のち、恐くは延寶初年からの事であらうといふやうな說を述べてゐる。成程彼がかの大矢數の跋に、「俳諧正風初道に入て」といつた正風といふのは、談林の當流に對して用ひた言葉であつたかもしれない。否それでなくとも、實際彼自身の初期の作がすでに貞德風のものなのだから、彼がまづ古風の俳諧に親しんだ事は、もとより明かである。だがそれだから彼が最初について學んだのは宗因ではなかつたのだ、とは言へない。一體明暦萬治の頃などには、まだ談林などといふやうな新調は、どこにもあらはれてゐないのである。それどころでは ない、談林俳風の祖たる宗因自身すら、寛文初年まではまだ決して古風の口つきを離れてはゐないのである。かの明暦二年秋、宗因が向榮庵記をものしたをりを以て、新風旗上の時のやうに傳へたものなどがあるけれども、もとよりそんな事があらう筈はない。隨つて西鶴が最初貞門風の句をよんでゐるからと言つて、當時宗因と無關係であつたとは言へない。私は寧ろ明暦初年、宗因が俳諧師一幽として漸く活動し始めた頃、同時に西鶴もその門に入つたものであると考へたい。「心葉」のうちにも、

近比井原西鶴ト云者アリ。攝ノ浪速ノ產ナリ。西山梅花翁ノ門ヨリ出テ、俳歌ヲ以テ名ヲ天下ニトバス。

とあつて、宗因以前に師事した人のあることを記してはない。とまれ私は次のやうな場面を想像して見たい。これから將に俳壇の風雲を呼んで、大いに獅子吼しようとする老宗匠と、儁爽の氣眉宇に溢れて、後生畏る可しの感をもたせる一少年とが、相會した時の感激にみちた光景を。それは誠にわが文學史上の一偉觀ではなかつたらうか。宗因がある意味に於いて、わが近世文學革新の先達となつた事も、實は西鶴など若い門人たちから與へられた刺戟による事も多かつたのであらう。

西鶴はかうして明暦二三年、彼が十五六歳の頃西山宗因に師事して、まづ古風の俳諧に親しむ事になつた。彼の句が始めてものに見えるのは、前にも述べた通り寛文六年刊行の「遠近集」である。此書は西村長愛子の編で、その自序の一節に、

さるによりて寛き文元のとし、難波津にしてまたなには江なれぬことなれば、おほつかなき事もおほかめれと、和歌の道ならぬ神もゆるしたまはんとのふることを本として、露のはゑあるとおほしきことの葉を書あつむれは、かす〳〵になりぬるを一つ巻物として、それを遠

近集と名付云々

と述べてゐる通り、寛文元年に業を始めたものである。編者については全く知る所がないが、集の内容は立圃・重頼・貞室等貞門の高足をはじめ、多數の俳人の作を集めた全七冊の厖大なものである。その中に西翁の句十四句、鶴永――西鶴の初號である。西鶴と改めた後も落款には長くこの號を用ひたものと見えて、「俳諧手鑑」や「胴骨」の自筆本、その他後年の浮世草子等にも鶴永の落款がある。――の句三句が出てゐる。西翁の句も

なにとがな先五文字はかきつばた

庚申待に

七色に雪や一色まさるまち

けふ唱ふ佛の御名〳〵弟子こ哉

かたぶけよ爰は八幡のかみ頭巾

等の類で、割合に人口に膾炙する

明石にて

いかに見る人丸が目にさくら鯛

宇治橋の神や茶の花さくや姫

の句などもこの集に見えてゐるのだが、――此二句は寛文四年刊「佐夜中山集」にも出てゐる。――決してまだそこには談林の特色を認める事は出來ない。否前の四句の如きは全く純然たる貞門の句で、後の二句とても言語の遊戯を離れてゐない。――言語の遊戯といふ點のみからいへば、後の談林の句とても、全くそれを脱してゐるわけではないが。――これを貞門の作者の句として出しても、大して變る所はない。では鶴永の句はどうであつたか。その三句は

餝縄や内外二重御代の松

心こゝになきかなぬか郭公

彦星やげにも今夜は七ひかり

である。「心こゝになきかなかぬか」と言切つたあたり、何となく後年の奔放さを偲ばせぬ事もないではないが、それは寧ろ氣のせゐであらう。やはり貞門風な著想といふ以外には、どこと取り立てていふべき特色も見出されないのである。第一句は二重から三重と御代とにいひかけ

た所が眼目であらうし、第二句はことなと二の頭韻を用ひた句調上の苦心は存するが、「心不在焉視而不見、聽而不聞云々」といふ大學の成句を用ひた外にはたらきはない。――句意は郭公の聲を一向耳にせぬが、それは郭公は鳴いても心こゝにあらざるために、所謂聞けども聞えなかつたのか、それとも實際鳴かなかつたのであらうかと疑つたのである。――第三句は彦星に曾孫の意をきかせて、それに「親の光は七光り」といふ俚諺をもつて來た古風常套の手法である。

寛文初年の西鶴の句は實に此の如き幼稚なものであつたのである。がその後どういふ順序で次第に進歩展開して行つたか、不幸にして「遠近集」以後寛文末年に至るまでは、まだ彼の句の散見するものを知る事が出來ない。寛文十一年に至つて始めて、この年刊行された「落花集」に

長持へ春そくれ行く更衣

の一句を見る。――「落花集」は宗因門高瀧以仙(又益翁とも號する)の撰である。――右の句は翌々年延寶元年刊行の「哥仙大坂俳諧師」にも出てゐて上五文字が「長持に」となつてゐる。この「哥仙大坂俳諧師」は大阪の俳人三十六人の像を描いて、各々その句を讃したもので、鶴永は有髪で左手に扇をもち、片膝立てた姿で寫されてゐる。

〔補記〕

この書も「當世誰が身の上」巻二「名は末代の歌仙女」の條に「今は昔難波津西鶴入道の撰集とて大坂歌仙といふもの見侍れば云々」とあるので、西鶴自身の撰だと思はれる。(上方習和六年二月號所載、拙稿「西鶴著作雜考」參照。)

この更衣の句は普通には

長持に春かくれ行く更衣

として傳へられて名高い句になつて居るが、實は右の通り西鶴のまだ初期の作に屬すべきもので、しかも「春そ暮れ行く」なのである。(水谷不倒氏の「西鶴本」所載の眞蹟にも「春そ」となつてゐる)しかしこの句にはもはやその表現の上にも、構想の上にも著しい進歩が見えて居て、古風の陳套さからよほど脱してゐるやうに見える。且つ大阪俳歌仙の一人としてこゝに選ばれてゐることは、彼が當時俳諧師として立派な地位を占めて居た事を明かに物語るものであらう。時に彼

は三十二歳で、椎本才麿もこの年に西鶴に從つたのであるといふ。なほこの延寶元年（寛文十三年）の頃には、彼がすでに阿蘭陀流の名を得て、大いに活動を始めてゐた事を知るべき有力な資料が存する。それは從來全く世に知られない新資料で、しかも鶴永自筆のまゝを板下としたと思はれる「生玉萬句」である。

西鶴自撰の俳書として最初に出たものは、從來知られて居る所では延寶四年刊の「古今誹諧師手鑑」であつた。然るにすでに夙く寛文十三年（延寶元年）の夏、彼は一書を撰んで世に公にして居るのである。その俳書は從來の西鶴研究者によつてまだ一度も紹介されたことのないもので、蓋し頗る珍重すべき新資料であらうと信ずるから、先づ該書の内容を一と通り紹介しよう。原本は神戸川西和露氏の藏で、横本二十九丁の小册子である。題簽は全く剝落してしまひ、内題もなく柱にも丁附の外何にも記してないので、何といふ書名か殆んど見當もつかない。撰者も勿論分らない。しかし私はその内容から推して、必ず西鶴の撰になるものであらうと思ひ、且つ書名を假りに「生玉萬句」と名づけておいた。それは大阪生玉神社で催された萬句俳諧の第三までを百組收めたもので、最後に祝吟發句數十句を載せてゐる。まづその序文の全體を紹介して見よう。

或問、何とて世の風俗しを放れたる俳諧を好るゝや。答曰、世こそつて濁れり、我ひとり清り。何としてかその汁を啜り其糟をなめんや。問曰、文盲にしてその功成かたし。答曰、六祖は一文不通にしてその傳を繼。如何してか其分あらん。朝于夕聞うたは耳の底にかひはへて口に苔を生し、いつきくも老のくりごと益なし。故に遠き伊勢國みもすそ川の流を三盃くんで醉のあまり、賤も狂句をはけは世人阿蘭陀流なとさみして、かの萬句の數にものそかれぬ。されとも生玉の御神前にて一流の萬句催し、すきの輩出座その數をしらす、十二日にしてこと畢れり。指さして嘲る方の興行へ當る所にして、其功ならすと聞しは予かひか聞にや。ともいへかくもゆへ、則座の興を催し、髭おとこをも和けるは此道なれば、數奇にはかるの句作そしらは誹れ、わんさくれ、雀の千こゑ鶴の一聲と、みつから筆を取てかくばかり。

即ちこの序文で見ると、當時已に異風の格調を好んで、世に阿蘭陀流などゝ呼ばれた一團の俳人達が居た事がわかる。言ふまでもなくそれは西鶴一派の人々であつた。そして是より先大阪で萬句俳諧の興行があつたをりにも、これら一派の連中はその仲間から除かれたのであつた。

それで連中は更に生玉神社前で、彼等一流の風調をもつて萬句俳諧を興行したものらしい。しかもそれは彼等を除外したさきの萬句興行が、その功を終へなかつたのに反して、數寄の俳人が雲集して十二日間に日出度く萬句を興行し終へた。意中頗る得意なものがあつたであらう。さてこそ爰に一集を編んで、これを世にひけらかす迄にもなつたものであらうと思はれる。さてそれでは彼等の所謂阿蘭陀流とはどんな風體のものであつたか。以下第十卷までを原本のまゝ掲げて見よう。

第一　梅

飛梅やかろ〳〵しくも神の春　荒木田守武

ふるき句も又あらた成とし　生玉覺澄

鶯を日毎にきけと興は有て　山口清勝

第二　若緑

老松も雨や瀧水若みとり　西田久任

何國の孫か手折藤か枝　北峯正甫

靡れつゝそしいと鞠打春くれて　一禮

第三　櫻

馬に鞍尾上の櫻咲にけり　悅春

對の革籠の玉の緒柳　吉井廣之

澁張にあらさる池の氷とけて　尾崎清章

第四　灌佛

生れ名よ佛も元は助四郎　和氣遠舟

茂る柳もおなし髪たれ　白石醉白

乘馬に清水流るゝあと見えて　上村清勝

第五　子規

名乘きかん懷紙の雲にほとゝかす　中堀初知

硯の蓋も明やすき月　爾云

十露盤も更行鐘の音添て　似扇

第六　初穐

今朝とかはり秋の夕といふ物有　早川西隨

啼むしの音は何とやら唯　仁和寺有年

腹中も讀ぬ歌人月を見て　生田未清

第七　礎

双六盤うつてかへたる礎哉　渡邊未學　古竹

片肌ぬきし月人おとこ　安井豐由

秋立て相場飛脚や急覽

第八　枕

天川に枕なかるゝ珊瑚珠　岩井武仙

革巾着やいつの小男鹿　井原鶴永

山ふかく入旅きせる霧こめて　志水正察

第九　頭巾

御免あれ赤地の錦の置頭巾　均明

時雨のあめに染るひん髭　流水

十面を誰か誠より作るらん　豐春

第十　神樂

其時のわけいかつちは神樂哉　胤久

或は諸天に千早ふる雪　正倫

鷺の足も水くゝるとはかけ見へて　一得

以上で連衆の顔振れと風調の大概は窺ひ知られるであらう。その外作者には幾音・由平・淨久等後年談林派中の著名な士も居り、多くは「大坂獨吟集」や「物種集」・「二葉集」等の中に見える人々である。さうして序文の中にも「伊勢國みもすそ川の流を三盃くんで」と言つてある通り、まづ守武の句を卷頭において、脇は恐らく生玉神社に關係ある人の句であらう、それを特に乞うて附けた。（覺澄の名はこゝにあるだけで後には全く見えない。又萬句成就の卷にも發句以下助太夫、松太夫等神官らしい人々の作が見える）。句の風體は勿論延寶末年頃の奔放自在な趣はまだ十分

に認められない。特に何分にも收めてある部分が一卷中最もおとなしかるべき第三まであるから、その全貌について確かな批評をする事は出來ない。しかし已に阿蘭陀流の世評をうけた人々の風體である。懷紙の雲に郭公の名乘を聞かうといひ、珊瑚珠を天の川に流るゝ紅葉などと見立てるのは、誠に貞門保守派の人々には異形異體と評する外はなかつたであらう。況んや革巾着の毛皮を見て、いつの小男鹿であつたらうと思ひよせるなどは、嘗てかの「遠近集」の中の作者であつたとも思はれぬ程の奇警な口つきではないか。流石にこの一派の翹楚たるに恥ぢない手腕を見せて居るのである。

しかしこの「生玉萬句」が西鶴の撰であらうといふ事は、以上紹介した所だけでは決してすぐにこれを肯定する事は出來ない。たとひ全卷中鶴永の句が最も代表的なものであつたにせよもとよりそれだけですぐに彼の撰であるとは言へない。だが萬句の最後に追加された一卷は、この興行の主催者が鶴永であつた事を、十分暗示してゐるものではなからうか。即ちその追加は

追加

咲花や懷紙合て四百本　井原鶴永

水引一把青柳の糸　南方由

春風をおさむるへきに熨斗添て　西山西翁

の三句である。懷紙四百本はまさに萬句興行に用ひた懷紙の總數で、（百韻一卷には四枚の懷紙を用ひる。）それに水引に熨斗添へて目出度く神前に捧げた事が、この第三までに祝はれて居るのである。その發句を鶴永自身がよみ、しかも第三に師西翁が顔を出して居るのも、（他の卷には西翁は一座して居ない。なほ脇句の作者方由も他の卷に見えぬ。方由は堺の人南元順の事であるが　西鶴と何か特殊の關係があつたものであらう。）この追加一卷が特殊の意味を持つてゐるものである事は容易に想像される。さうだとすれば發句の作者鶴永は、即ちこの興行の主催者であつたらうと判斷する外はない。いやそればかりではない。この書の板下は紛ふ方もない西鶴の自筆である。これを「哥仙大坂俳諧師」中の更衣の句の筆蹟に比べて見るとすぐ分る。特に「鶴永」の二字などは字形までが全く同一である。西鶴が後年の浮世草子などに自筆のまゝを板下にして居ることは、水谷不倒氏などが夙に言はれて居る通りで、此の「生玉萬句」の板下が西鶴自筆である事

は、やがて彼が撰者であつた事を有力に物語るものではなからうか。さうして見ると、かの序文の終に「そしらば誹れ、わんざくれ、雀の千こる鶴の一聲とみづから筆を取つてかくばかり」と言つて居るのも成程とうなづける。鶴の一聲といふやうな自負的な言葉の中に、自分の事を句はせてゐるのも、いかにも西鶴のやりさうな事である。文章が後年の簡勁なのと趣を異にしてゐる點、聊か疑はれぬではないが、延寶四年「古今誹諧師手鑑」の序にものした文が、やつぱりまだ普通の筆致にすぎないのを思へば、それは深く疑ふには及ばないのである。かうして私は本書が西鶴の撰であるべきを信じ、隨つて萬句興行の主催者も亦彼であつたらうと推測するのである。

西鶴が生玉神前にこの萬句興行の主催者として、所謂阿蘭陀流の爲に氣を吐いたのは、前にも言つた通り寛文十三年の六月であつた。右の「生玉萬句」の卷末に

寛文十三年癸丑林鐘廿八日

執筆　青木藤兵衞　友淨

同　伊藤長右衞門　道清

とあるのは、卽ち興行の終つた時の日附であらう。するとこの月の十七日から始めて十二日間暑さにもめげず各々出座して、丹誠を勵んだものと思はれる。當時西鶴は三十二歳、年齒なほ壯であるが、その才は一派の先達としてもはや十分の重みを加へさせてゐる事であらう。而してこの「生玉萬句」の發見によつて、阿蘭陀流の名がすでにこの頃からあらはれてゐて、西鶴が實にその中心人物であつた事を明かに知り得たのは、單に西鶴の俳歷としてのみでなく、汎く俳諧史上から見ても興味深い事がらであつた。

ついで延寶三年には名高い「大坂獨吟集」が成つた。この延寶三年といふ年は、いふまでもなく、宗因の新風勃興にとつては、最も記念せらるべき年であつた。卽ちこの年春宗因ははるばる江戸に東下して、田代松意の一派と

されば爰に談林の木あり梅の花

世俗眠をさますうぐひす

と唱和して、大いに新風の氣勢をあげた。當時江戸では芭蕉なども宗因と一座して、すつかりその風に心醉してゐた。山口信章との兩吟に、

梅の風俳諧國に盛なり　信章

こちとうづれも此時の春　桃青

といつて、一向新風への追隨をこれつとめる程の有樣であつた。かくて談林の新風はまさに全國俳壇を風靡するの勢を呈した。宗因は年七十に及んでこの成功を贏ち得、意氣揚々として大阪へ引上げた事であつたらう。さうしてかの「大坂獨吟集」は、彼の歸阪と相前後して世に公にされたのであつた。この書は幾音・素玄・三昌・意樂・鶴永・由平・未學・悅春・重安等の獨吟に、宗因が判を加へたもので、まさに新風勃興の代表作として宗因門下の精髄を集めたといふべきものであつた。西鶴も勿論その代表者の一人たることに洩れよう筈はない。でも流石に前記の人々の中では最も若かつたと見えて、宗因が彼の句にかけた長點の數は、他の人々よりは少い。しかしなほ

輕口に任せて鳴けよほとゝぎす

を發句にした彼の一卷に、「ほとゝきすひとつも聲の落句なしとや申すべからん。是こそ俳諧の正風とおぼゆるはひがごゝろえにやあらん、しらずかし」と讃辭を與へて居るのである。その卷中にはすでに

約束も時付をして仲人かゝ

一順箱は戀のよび出し

物まうは夜分に成てどれからぞ

芝居のしくみ明日はつらみせ

看板に僞のなき神無月

時雨ふり置くうらやさん也

といつたやうな自由な口調が盛んに見えてゐる。他の人々の卷ももとより代表作たるに恥ぢないだけ、十分に新風の特色を發揮してゐるが、流石に西鶴の才は特にその中に光を放つてゐる。長點の數が少いのは、恐らく宗因が他の先輩に對して、いくらか憚つた儀禮的の所置が加はつてゐたのであらう。長點の句の多少によつて、遽かに技倆の甲乙を定める事は出來ないのである。

延寶三年は談林一派の上で記念すべき年であつたばかりでなく、西鶴個人の俳歴に於ても亦

一種の劃期的な時であつた。それは「大坂獨吟集」に始めて彼のまとまつた連句の創作が發表されたばかりではない。彼はこの年鶴永の號を改めて西鶴と稱したのであつた。遙か後の出版ではあるが、延享四年刊行の「梅の牛」に、西鶴の句として

西山梅翁庵にて

此度や師を笠に着て梅の花

といふのが見えるのは、思ふにこの改號當時の吟であつたらうと推測される。或人はこれを西鶴が宗因の門に入つた時の作だと解してゐるが、私は「師を笠に着て」といふ文句から見て西翁の西を鶴永の上に冠つて、西鶴と改號した時の作にちがひなからうと思ふのである。而してこの西鶴の號が始めて物に見えるのは、延寶三年八月の序ある「糸屑集」である。「大坂獨吟集」はこの年四月に刊行されてゐて、しかもまだ鶴永と號して居るのを見れば、その數ヶ月間に改めたものであらう。更に進んで推測するならば、宗因が江戸から凱旋將軍のやうな勢で歸つて來るや、これを迎へた鶴永は自分も氣分一新のつもりで、特に師の一字を乞うて西鶴と改號したのではあるまいか。たゞ宗因が江戸から歸つたのは六月の末であるから、前記の梅の花の句では季が合はないけれども、それは師の號梅翁に因んだものと見れば別に差支はなからう。ともあれこの年八月には、西鶴の新號を以て始めて彼の句が發表されてゐるのである。それは前にも述べた通り、宗因の門人伊勢村重安の撰になる「糸屑集」の中の句であつた。この書は必しも談林一派の人々の句ばかりではないが、重安の自序にも

治まれる世の樂遊び、四天王寺の花むしろ、敷島の道の清水連歌は、むつかしき支にや侍らむ。俳諧は誰もしれる四條川原の歌舞妓野良のぬめり小哥あやつり芝居のはやり上るり語るひとふしの付合も、上手はおかしう其座の興を催す人の心の花薄、まそをの糸をくりかけてすき人をまねくによしあし曳のやまとこと葉の櫻麻云々

などと言つてゐる通り、人事趣味に勝つた新風の句集として、かなり興味多いものである。宗因が江戸から歸る途中の吟なども三十餘句收められ、由平・春澄・意朔・玖也等の作が最も多い。而してこゝに西鶴の名で出てゐる句は實に左の五章である。

衣裳たんす桐の立木の模樣哉

枝おほふ楸や山をかくし題

日高には能登の國迄やさし鯖賣

朝貝や髪結かしる花盛

牛の子や作る鳥羽田の池の菱

之を「大坂獨吟集」の連句に比すると、却て大いに遜色があるやうである。謠曲安宅の文句をかりて突如刺鯖賣を點する所などには、成程彼の才が見られないでもないが、山をかくすと隱題といひかけたり、簞笥に桐の模樣があるをかしみを捉へたりしてゐるのは、どうひいき目に見ても、陳腐たるを免れない。これが「生玉萬句」や「大坂獨吟集」の作者と同人の句であるとは思はれない程である。わざ〳〵西鶴の新號を用ひて居る位であるから、勿論舊作でもあるまい。思ふにこれは西鶴が詩想の展開と飛躍とに自由な連句にはすぐれた才を働かす事が出來たが、一句きりの發句には十分その驥足を伸ばすことが出來なかつたものであらう。實際彼は連句の方では千句萬句の大作を多く殘してゐるのに反して、その發句の傳はるものは極めて少いのである。しかもその少數すらが、決して他の談林派の人々の作に比してすぐれてゐるとは言へない。彼が發句に不得意な傾向はかうしてもう早くから見えてゐるのである。さうしてこの

素質が、やがて彼をして俳諧から小說に移つて、そこに大成せしむべき大きな素因を形つたものであつた。

延寶四年の十月には守武以下宗因に至るまで、當時名ある俳人都合二百四十六人の眞跡短冊を摸刻して、「古今誹諧師手鑑」を編したその中には自句

只の時もよしのは夢の櫻哉

も交へ載せてあり、且つ「大坂松壽軒井原西鶴」と署名して、自ら序文をものしてゐる。即ち西鶴の編著として「生玉萬句」に次ぐ出版物である。しかしこれは古人今人の手蹟の蒐集に多く興味をもつたので、「生玉萬句」の如く新興俳諧の意氣を示したものではもとよりない。たゞそこには三十五歳の西鶴が、やゝ落着いた餘裕ぶりが見られるであらう。なほこの年彼に「柾木葛」の撰があるといはれてゐるが、延寶四年三月の序がある「柾木葛」は、立圃の門人隼士常辰の撰で、西鶴とは全く關係のないものである。阿誰軒の俳書目錄にも同書の名は見えてゐるが撰者と刊行年代とを逸してゐる。どうしてそれが西鶴の撰と誤られたか知らないが、とに角原本を一見すれば、その誤傳たることは明かである。

翌延寶五年には彼の最も得意とした獨吟の早業が、はじめて公開的に興行された。時は五月二十五日、場所は大坂生玉本覺寺、青木友淨・水田西吟の二人を執筆とし、外に二人の指合見を控へて、

初花の口拍子きけ大句數

を劈頭の第一句とし、一日の内夕陽傾かざるに千六百韻の獨吟を見事にやつてのけたのである。この獨吟は「西鶴俳諧大句數」と題して刊行された。その序文には自ら

天下の大矢數は星野勘左衞門其名萬天にかくれなし。今又俳諧の大句數初て我口拍子に任せ、一夜一日の内執筆に息をもつがせず、かけ共つきぬ落葉の色をそへ實をあらせ、花の座月雪の積れば一千六百韻、見渡せば柳にから碓櫻に横槌をとりまぜ、卽興のうちにさし合もあり。其日數百人の連衆耳をつぶしきゝ給へり。

と誇り、又此頃各地で四百韻だの六百韻だのやつたといふが、それは雪中の時鳥だと嘲り、自分はつねゞゝひとりで詠草書にすると三千六百句迄はする。しかし諸人の中に出ると、句の取廻しが五百句出來る人はやつと二百句しかよめないものだなどゝ言つて、頗る得意の體を示してゐる。一體こんなに限られた時間内で、多くの句を獨吟するといふやうな試みは、いつ頃から始めて流行し出したのか正確には分らないが、この頃方々でかうした催しがあつた事は、この西鶴の言に徵しても明かである。然るに西鶴こそは實にかゝる速吟に於て、非凡な手腕の持主であつたのである。四百句六百句位で誇示する徒を見るや、かねて伎癢にたへなかつた彼は、一氣に千六百句を吐いて、世人をあつと言はせたのであつた。この西鶴の催しは、果して世間を大きに驚したにちがひない。彼の俳名は爲に頗る高くなつた事であらう。さうして彼の摸倣者もまたそれから相尋いであらはれた。中にも月松軒紀子は翌六年奈良で千八百句を獨吟し、――これも「俳諧大矢數」と題し、高政の序を添へて出版されてゐる。――翌々七年には大淀三千風が仙臺で一日二千八百句の獨吟に成功して、――これまた「仙臺大矢數」と題して刊行された。――いづれも西鶴の記錄を破つた。紀子の獨吟に對しては、「いさ白波の跡かたもなき事ぞかし」と罵つた西鶴も、三千風には「證據分明にして所の人も都への土產にいたさるゝ上は奇妙也」といつて、「仙臺大矢數」に追加の一卷を送つてゐる。しかし記錄保持者(レコードホールダー)たる資格を奪はれた西鶴は、そのまゝ默つてはゐなかつた。三千風の興行のあつた翌八年、再び本覺寺

で四千句の獨吟に成功して紀子・三千風等を一蹴し、更に貞享元年には住吉神前で二萬三千五百句といふ破天荒の獨吟をやつて、もはや永久に追隨する者を無からしめた。

右の四千句及び二萬句の獨吟については、年代の順序上更にあとで述べる事にしよう。今ここではかうした速吟にかけての非凡な、否寧ろ人力以上ともいふべき天賦の才が、藝術家としての彼にどういふ強味を與へ、又いかなる弱味を齎らしたか。それについて姑く考察を加へて見たい。例へばあの晦澁ともいはれる位極端な省筆法を用ひて、事件の推移をぐん〳〵寫して行く鋭い筆致、それはこの連句に於て、一卷の展開と變化とに機敏なはたらきを見せた素質から生れたものである事はいふまでもない。又神速奇警にして且つ多方面な聯想を必要とする速吟が、彼の小説に取材の範圍の豐かさと着想の勁拔さとを示すべき根柢をなした事も當然であつたらう。これらの點についてはもとより先輩も既に十分論究してゐるのである。要するにあの鋭い描寫と簡勁なユニックな文章とが、彼のこの異常な頭のはたらき、それは實に電光の樣にも鋭く迅く動いて行く頭の素質に負ふ所が多いのは、今さらいふ迄もない事である。だがさうした素質は、部分的の描寫に儁敏奇警な筆致を擅にするには適してゐるが、全體としての構成上に統制の力を缺く恨みが少くない。動もすれば取材の選擇が放肆蕪雜に流れ、全篇の構想に統一を破つて顧みない弊が伴ふ。西鶴自身もまた恐らくこの長所と短所とは自覺して居たであらう。彼が淨瑠璃若くは長篇の小説にあまり手を染めないで、主として短篇の創作に向つて進んだのは、實に自ら知るの明があつたのである。實際彼の作にかゝる淨瑠璃として、明かに知られた唯一のものたる「暦」を見ても、その結構は頗る散漫たるを免れてゐない。否彼の得意にした短篇すら、どうかするとその短かい作品の中で、すでに全説話の統一を破らうとする如き傾向を屢々見るのである。例へば「日本永代藏」でいふと、才覺を笠に着る新六の話の中で、東海寺の門前に一夜を明した時の乞食の話が、寧ろヴイヴイットに語られてあつたり、或は廻遠きは時計細工の條の如き、大體長崎での唐物商の話をしてゐるのかと思ふと、手代共が主人の金儲けした種を話合ふ筋が取入れられてあるし、また胡椒粒をもとにして金米糖を作る工夫を始めた事が一番面白く長々と描かれてあつて、それがこの一節の主題かとも思はれるやうな有樣である。あまりにも彼の興味と聯想とは八方に走りすぎるのであつた。短かい一篇の中でさへかうである。所詮西鶴にまとまつた大きい作品を望む事は無理といはねばならない。急所々々に鋭

い皮肉な筆の冴えを見せながら、自由に奔放に人生の諸相をそれからそれと剔抉解剖して行く、そこに彼の藝術家としての生命は見出されねばならなかつた。而してこれは一句の附合に機巧と變化とを尙ぶ談林俳諧にとつては、正に最もふさはしく有力な素質であつたのである。速吟達吟にかけて非凡の伎倆をあらはした彼の天才は、かうして短篇小說に於て益々縱橫にその本領が發揮されたのであつた。勿論速吟達吟そのものの藝術的價値とか意義とかは、こゝでは問題ではない。矢數俳諧といふ如き催しは、寧ろ藝術の邪道であつたらう。宗因などは流石に餘りこれを喜ばなかつた。嘗て西鶴が十六卷の點を乞うた時なども、かゝる大きなる事にはと體よくことわつた。西鶴自身はその事を却つて得意氣に語つてはゐるが、實は宗因はそんな事に對して好感をもつてゐなかつた事は明かである。同門の惟中などは「近來俳諧風體抄」の中に、

近年俳道の盛なるに任て、千句萬句など名付け、早口の俳諧を好む事誠に何の味ひもなき事なり。句は沈思して一句にても心をとめてし出すこそ面白けれ。

と正面から攻擊を加へてゐる。誠に尤もな事である。しかし西鶴がこの速吟に於て、何人も企て及ぶべからざる非凡の才をもつて居り、又彼が自らそれを得意にして屢々矢數俳諧を試みてゐる事は、その事の是非はともあれ、彼の藝術の素質を考へる上からは最も興味深く且つ重視すべき事であらう。

さて「大句數」時代における彼の俳諧は、どういふ進歩の跡を示してゐるか。再び考察の眼をその上にかへして見よう。いふまでもなく彼の進境は目ざましいものがあつた。そこにはもう全く古風の幼稚と陳腐とを脫し切つた新鮮味が滿ち〳〵てゐる。取材格調共に談林風の特色を十分に發揮して餘蘊がない。かつその內容が直ちに後の浮世艸子を想はせるやうなものすら、少からず見出されるのである。例へば

なびかする御もつあがりの松の丞
　角は入れてもつけざしならば
一歩一つ夢と定めてかり枕
　浮世の旅は小田原外郎
　鰒汁に命しらずが參り合ひ

だとか、

通ひ路は二條寺町夕ながめ
川原の床は小歌三味線
ひらに是へそれへ提重送られて

拙者が勝手にすみ公事の宿

とか言つたやうな趣は隨所に見られる。よく例にひかれてゐる

胸の火やすこし心を置火燵
揚屋ながらにはじめての宿
なんと亭主變つた戀はござらぬか

昨日もたはけが死んだと申す

といふ一節なども、この「大句數」中の句である。彼が小說作家としての素地は、ます〳〵固まつて來たといふべきである。

延寶六年及び七年に於ける彼の活動は、更に目ざましくあらはれて來た。その現存してゐる文獻についてのみあげても、先づ延寶六年には師西翁と弟子の西夕と三人で催した獨吟三百韻の「三鐵輪」、葎宿・松意との三吟三百韻「虎溪の橋」、由平・西國との三吟三百韻「胴骨」——但しこれは西鶴・西國・由平三人がそれ〴〵一卷づゝ書いたものが傳存してゐるだけで、（その中西鶴自筆の一卷は稀書複製會で複製され、又全體も稀書解說第四卷中に紹介されてある。）刊本はなほ知られない。——青木友雪等と催した櫻千句の「大坂檀林三日千句」、獨長庵石齋撰の「珍重集」に收められた獨吟百韻、片岡旨恕の「難波風」に見える旨恕・貞因・昌本との四吟百韻等があり、なほ自ら「新附合物種集」を編して、前後五ケ年に亙つて集めた諸家の附句五百を集めた。彼が實際の句作に精進したばかりでなく、かうした付句集の編纂などといふ研究的批評的な仕事をやつてゐる事にも、當時彼の眞面目な努力のさまが窺はれるのである。それればかりではない、なほ此の年彼は「博多百合」「五德」の二書を撰んだといふが、それは不幸にして今日傳本を失つて知る事が出來ない。とに角かうして彼が俳諧に對する油は次第に乘つて來た。談林新調の急先鋒として、自信と自重の念は益々强く加はつた。今や所謂オランダ流と呼ばれる異風異體の句を、あへて誇らしげにふりかざして突き進んだ。「三鐵輪」の序文には阿蘭陀流といへる俳諧は、其姿すぐれてけだかく心深く詞新しくよき所を、今世間に是を聞

覺えて、たとへば唐錦にふんどしを結び、相撲といはずに其句に聞え侍るは、一作一座の興にありやなしや。

といつて

こと問はん阿蘭陀廣き都鳥

と吟じ、又「胴骨」の中にも

梅は豐攝兩陽の名木花の作意合して同じ。爰におらんだ流のはやふねを浮め、一日に此三百韻硯の海靜かに名殘のうらに着きにけりまで、さし合あらためるに及ばず、心任せの三吟是を俳諧の胴ぼねと名付け侍る物ならし。

と大つぴらにオランダ流の宣傳をやつてゐるくらゐである。

次の延寶七年には正月に惟中の「太郎五百韻」が出版された。中に梅翁・惟中・由平等との九吟百韻一卷、惟中との兩吟百韻二卷が見える。――實は三卷とも延寶六年中の興行である。なほこの惟中との兩吟の序に、惟中が「こゝに入道あり西鶴と名のる」と言つて居り、且つ前年出た石齋の「珍重集」中の西鶴獨吟の終に、

唯花は見えた通りの捨坊主
三十七の春もわらんべ

とあるので、延寶六年三十七歳の時にはもう法體してゐたものと見える。――「誹家大系圖」に「初ノ名ハ鶴永、薙髪シテ西鶴ト改ム」とあるのは據る所が明かでない。――ついで二月には井筒公木の旅行を送つて友雪・遠舟・正察等とものした「四吟六日飛脚」が出た。西鶴の

關こすや六藏が引く朝霞

の句を以て始まつて居り、實はその年正月の興行であつた。三月には西六・西花・西吟・西友の四弟子を集めて、山は彌生の六日七日八日の三日間に五吟五百韻を成した。即ち「西鶴五百韻」である。その序文には

上々吉清水の流れ、上戸も下戸もなべて好くべき酒ぶり、諸國の人にいや〳〵〳〵とはいはせじ。甘うなりとも辛うなりともお相手になるべし。

と頗る手前味噌を並べて、自家の句風を吹聽してゐる。四月には青木友雪と兩吟で一日千句の興行をやり、翌月「兩吟一日千句」と題して出版された。九月には前年編纂した「物種集」の

續篇たる「二葉集」が出た。――この書は和露文庫に藏されて居るが、題簽を缺き序のある部分が落丁になつてゐるので、確かな題名は分らぬ。只内容から見て「物種集」の序に「追加二葉集にしるし侍る物ならし」と言つたその「二葉集」に當るものだらうと推定される。――十月には西花・西長・西虎等の門人、及び小西滿平(來山)・青木友雪等の知友を率ゐて「飛梅千句」の興行を催した。

大鵬はねも奇瑞は神の梅

と、自ら卷頭の發句を吐いて壯んな意氣を示してゐる。嚮の「西鶴五百韻」といひこの「飛梅千句」といひ、そこには彼の新風鼓吹の態度が、極めて積極的に發露されてゐる。彼は今や門弟知友を統帥する「派の盟主として、新風の第一線に立つて呼號してゐるのである。十一月には又江戸から來た似春を迎へて、梅翁・惟中・旨恕等と共に連吟を催した。それは旨恕の撰んだ「わたし船」に出てゐる。なほ此の年彼が生重(大和屋甚兵衛)・辰壽(富永平兵衛)・一水・頓悅・定方・重行・友雪・立花等八人と興行した歌仙六卷を收めた「句箱」が刊行された。――「句箱」は東大圖書館舊藏。震火に亡びてしまつて、遂にその内容を傳へる事が出來なくなつたのは遺憾の至りである。――その外此の年刊行された「花みち」・「近來風體抄」・「河内鑑名所記」等の中にも彼の句が散見する。それから前にも述べた通り、三千風の「仙臺大矢數」に遙かに跋文と獨吟歌仙一卷とを送つた。

〔補記〕

「二葉集」はその後序文の完備した本を知る事が出來た。これによると本書は西鶴の自撰でなく、伊勢の杉村西治が、「物種集」のあとをついで撰んだものである事が知られる。西治については今知る所がないが、恐らく西鶴の門人で、「二葉集」も西鶴の後援によつて編纂されたのであらう。なほ本書は内題には「俳諧新附合千與」とある。今序文と卷頭の數句を左に掲げておく。

萬よし世の中に俳諧の附合物種をまかれし田簑の島の鶴のあし跡をしたひて、村雀のすみか竹の都山田かはらに生出る二葉集、その數千草の花は色々の姿言葉のかはりたる一作、今あらためて新田をひらけは、土も木も我大君のくになを神風おさまつてこの御時、何かなめづらしき物をと思ふ事ならし。

延寶七年霜月十一日　　勢州杉村　西治

かねの鐶（クヮリ）のなかき君か代　井原西鶴

臣は水日本一のあたけ丸

やく匂ひ明石の浦の赤めばる　夕偶庵道寸

神鳴殿も落る精進（シヤウシン）

主も下人も鱠やき物

旅籠屋は伊勢の神垣（カキ）隔なし　松山玖也

親は〳〵の小蝶とふ也

うつけとも夢ともあれか見へぬけな　西山梅翁

「句箱」は本文に述べた如く、今その内容の全體を知る事が出來なくなつたが、原本は横本十三丁、延寶七年八月日、大坂伏見吳服町書林、深江屋太郎兵衞板である。

以上の文献に徴しても當時の彼の活躍がいかに目ざましいものであつたかは、ほゞ想察されるであらう。恐らく彼が俳諧師としての生涯中、この延寶六七年の頃こそは、その最も油の乘

切つた時代であつたらうと思はれる。延寶七年刊「難波雀」の俳諧點者の條に、

鑓屋町　井原西鶴

として彼の住所と名前とが見出されるのも、勿論此の種地理案内書としてたま〳〵同年のこの書が今日知られてゐるからだといふにすぎないのではあらうが、何だか當時の彼の活動ぶりがそこにも反映されてゐるやうな氣がする。それにとに角かの「俳諧中庸姿」に對して、猛烈な攻撃を始めた中島隨流の「俳諧破邪顯正」も亦この年十二月に上梓されたのであるが、その中には

當時宗因流を學ぶ弟子數多ある中に、殊更すぐれて相見えしは、江戸は不知大阪にて阿蘭陀西鶴、京には惣本寺伴天連社高政、兩大將として云々

と言つて、當時宗因門中西鶴が大阪隨一の花形役者であつた事を正に明かに物語つてゐる。即ち當時の彼の句風は、最もよく談林の異調を代表するものとして世に認められ、隨つて貞門の古風な俳諧者流からは、異端邪宗として甚しく忌み嫌はれたのであつた。今實際その作品に就いて見ても、例へば

花に來てや科をばいちやが折りまする　（大句數）
とやきけりきいて里しる八重霞　（兩吟一日千句）
しゝ〳〵し若子の寢覺の時雨哉　（同　上）
顏見世は世界の圖也夜寢ぬ人　（花みち）
みつがしら鶉なく也くわくわくわい〳〵　（虎溪の橋）

の如き類で、誠に古風者の眼には異形異體に見えたのである。更に連句の例をあげてみると、

飛螢尻におもひの野郎ども　友雪
雲の上まで戀は中事　西鶴
一尺五寸死身になりて花の陰　同
藤の棚からけふの月おつ　雪
大谷の鶯としをさすらせて　鶴雪
六はらのかぶろ少年の春　雪
惡所へも落足の時亂れそめ　鶴

預け衣裳のうらみ寢の床　雪（兩吟一日千句）

といつたやうな調子で、成程所謂「大坂西鶴は、西翁より放埒拔群に勝れ」といふ非難も尤もだと思はれる位の奔放さを發揮してゐる。しかし西鶴自身にとつては、それは決していゝ加減な口から出まかせの句ではなかつた。勿論彼の性質としては、沈潛苦吟といふ底の手堅いやり口を敢へてする事は出來なかつたらうが、連句の進展に伴ふ飛躍的な局面の打開とか、前句に對する最も自由で奇警な聯想だとか、さういふ事については一通りならぬ工夫と苦心とを拂つてゐた事を見逃してはならない。即ち「物種集」・「二葉集」等（〔補記〕二葉集は前に補記した如く西鶴自身の編ではない。）の編纂はその研究的態度のあらはれであり、又「物種集」の表紙裏に「大坂中俳諧月次日」として日割が揭げられてあるのを見ると、毎月一日から二十九日まで各所で晝夜俳諧の會合が催されてゐる。恐らく西鶴はこれらの會の最も熱心な出席者であつたのだらう。彼が常に人生のいろ〳〵な諸相を注意深く眺めて、日夜句想を練り詩材を豐かにする事に努めてゐた事は、その實際の作品の中にも窺はれるのである。すべてを彼の天賦の才力に歸してはならない。その絕倫な精根と共に、張り切つたこの努力のあとをも認めなけれ

ばならないであらう。

延寶八年には前年三千風の爲に矢數俳諧のレコードを破られたので、この年五月七日再び生玉の寺内で大矢數を興行した。今度はまだこれまで前例のない四千句の獨吟だといふので、世間の評判も大したものであつた。數千の聽衆は庫裏から方丈客殿廊下を滿たし、三日も前から花筵や毛氈を敷いて見物する有樣であつたといふ。指合見には和氣遠舟・小西來山等五人、脇座が益翁・惟中等十二人、その外執筆八人に執筆番繰とか、奉幣係とか懷紙の番繰、線香見、附添の醫者に至るまで一座の役人都合五十五人といふ大がゝりなものであつた。かくて

天下矢數二度の大願四千句也

を卷頭の第一聲として口拍子たがはず、殊に最後の百韻三卷の如きはいづれも捲線香三寸より内にあやまたずしすまして、四十卷の懷紙に千秋樂を諷ひをさめたのであつた。その全體に要した時間は、卷中に

大矢數春宵一日價四千

飛ぶ鳥雲に入あひかぎり

といふ句が見えるから、入相時を限つて終つたものらしい。假に明六ツから始めて一刻の休みもなく續けたとしても、四千句をよむには、約十秒强の間に一句、卽ち一分間に五句乃至六句づゝよまなければならぬ。しかも自ら誇つてゐる通り、それは決してまやかしをしたのでもなければ、指合その他の法式を無視したのでもない。此の四千句が「大矢數」と題して翌年出版された際、彼は自ら跋に

殊に頃の座懷紙放埒の雲をつかひ、四十五句五十句は遊女の噂歌舞伎芝居の風情、殘る四十句は博奕わざ喰物等拔脫、こゝろ行の付かたとて其座に一人も聞えず、我ばかりうなづきて一句々々に講釋大笑ひより外なし。

と言つて世の出鱈目作家を冷評し、又

此後大矢數のぞみの人あらば此掟を守るべし。

と、自分の矢數俳諧が規矩法式に從つてゐることを誇示してゐる。その上彼はこの大仕事をやつた翌日も、平氣で松門亭の月次俳諧にいつもの通り出座してゐるのである。誠にその精力絕倫なのに驚かざるを得ない。

さてこの四千句獨吟の内容はどんなものであつたか。もとより速吟を目的としたものであるから、たとひ以前から相當腹案をしてゐたにせよ、その文藝的價値を普通の立場から批評したり、平常の規矩によつて律したりすることは無理である。只既に述べた如く、彼のかうした天才がどこまで發揮し得られたかを觀察すれば足るかも知れぬ。しかしこれを「大句數」に比すると、その取材の範圍が更に著しく人事的の方面に傾いて來たことが先づ注意される。即ちそこには浮世草子の作者たる西鶴の俤が、より明かに映し出されて來てゐるのである。それ等の例は特にあげるまでもなく、至る所に見られるのであるが、二三例示すると、

成ほどしはい人の山住

茂りぬる枝は藤屋の市兵衞か

悪銀などを見ぬ者のため

浮世茶屋やうすがあつて立破り

玉の床なる疊ちり〳〵

この藤屋市兵衞は、「永代藏」に世界の借屋大將として描かれた同一人物であらう。

近道に戀の仕樣が有る物を

島原よりも堤町の暮

筒井筒ゐづゝによりて久しいの

互に影を見なんだは月

かい揚る霧立籠る風呂の内

かく古典の人物を拉し來て、直ちにこれを現代化するのは浮世草子や淨瑠璃の常套手段であるが、かうした趣向は「大矢數」の中にはなほ甚だ多い。

河内屋のみつが情を問寄りて

袖行く水は太股だけか

などには好色本の匂ひが濃く漂つてゐる。なほこんな材料なり着想なりを、彼の後の浮世草子と丹念に一々對照して見たら、頗る興味多い發見があるだらうと思ふが、今はたゞ西鶴の俳諧におけるかうした著しい傾向を注意するに止めておかう。

大矢數に成功した彼は、多少氣がゆるんだせゐであらうか、それとも彼が俳諧から小說へ轉

じようとする内部的要求が動き初めた爲めであらうか、とに角當分彼の俳壇における活動はあまり見られなかつた。延寶八年、天和元年の兩年を通じて、「大矢數」以後には纔かに「阿蘭陀丸二番船」・「江戸大坂通し馬」・「太夫櫻」等の書に連句數卷と發句付句數章を見るのみにすぎない。只彼が當時の難波俳人百人の肖像を自ら描き、その人々の句を讃したものをそのまゝ摸刻した「難波色紙百人一句」が、土橋春林の編で天和二年正月出版されてゐるのが、多少この淋しさを破つてゐる位である。案ふにこれについては前に述べた如く種々の原因もあつたであらう。しかしかの「大矢數」の跋を見ると、彼は

今世界の俳風詞を替へ品をつけ、樣々流儀有りと雖も、元一つにして更に替る事なし。惣て此道さかんになり東西南北に弘る事自由に基く俳諧の姿を我仕始めし已來、世上に隱れもなき事今また申すも愚なり。

と言つて、新風創始の功を自分一人に歸せしめてゐる。これは宗因がなほ在世中の言としては頗る穩ならず聞えるのである。よしこの言は彼が所謂阿蘭陀流の開祖たるの意で、諧林提唱の功を奪はうといふのではなかつたとしても、又實際彼の奔放自由な句風は宗因の作以上世間を驚かしたとしても、あまりにこれは謙抑を缺いた言ではなかつたらうか。延寶八・九の二ヶ年間見出し得る發句の數は僅かに數句であるが、それが

江戸の樣子皆までおしやるな山は雪　（通し馬）

不便や櫻とつて押へて板木摺　（太夫櫻）

の如き寧ろ放漫な作である。彼が自ら安んずるのあまり、漸く俳諧に對して熱心を失つて來たさまが見られるではないか。且つ案ふに當時師宗因との間柄にも、以前とはちがつた一種の疎隔が生じてゐたのではあるまいか。少くとも宗因が西鶴に對してあまり好感を持たなかつたであらうといふ事は、種々の點から推測されるのである。さういへばかの四千句第一卷の第三に、

宗因が

郭公八わりましの名を上げて

と弟子の高名を祝つてゐるのも、とりやうでは皮肉に聞えぬ事もないのである。それはともあれかうして西鶴の俳諧に對する態度に、多分の倦怠とゆるみとを生じてゐる所へ、更に彼を俳諧から遠ざからしむべき大きな原因が生じた。それは師宗因の物故である。

宗因は天和二年三月二十八日、七十八歳を以て歿した。時に西鶴は四十一歳であつた。宗因の死は談林一派にとつてはかなり大きな打撃であつたらうが、西鶴自身にとつては彼が俳諧師としての生活に、一轉機を齎らすべきいはゞいゝ機會となつたのであつた。果せる哉彼はその年十月に、はやくも「好色一代男」を世に公にして、小說作家としての第一歩を踏出したのである。この彼が創作の方面を轉換した動機については、既に先輩もいろ〳〵の考察を試みてゐる。だがこれは要するに彼の內部に潛んでゐた創作要求が、師の物故といふ偶然の誘因を得て、急に外部へあらはれたに外ならない。人生を如實に端的に觀照し描寫し得た彼の筆は、實は俳諧とか和歌とかいふやうな約束的な風雅の境地に拘束されるべきものではなかつた。勿論談林の俳諧は和歌と同日に論ずべきものではないが、なほ月花の定座、春秋の季等を守らねばならない。漸く俳諧に對する熱を失ひかけて來た彼が、思切つてその圈外に出て見ようと考へた事は容易に推測されるのである。恐らくかの「一代男」の如きも、その腹案は師の歿する以前にはやく出來上つてゐたものであらう。そこへ偶然の機會が彼をしてこの飛躍を敢行せしめたのであつた。彼は決して談林の前途を悲觀して打算的に宗旨替へをしたのではない。又好色本であるが故に長く師を憚つて出版せずにおいたのでもなかつた。すべてが機熟した際の偶然であつたのである。「一代男」の刊行は勿論師の歿した事によつて、その時期を早められたではあらうが、たとひ宗因がこの年歿しなかつたとしても、西鶴はあまり長く辛抱しないできつとこの書を世に公にしたにちがひない。彼は自己の創作欲を抑へてまで師に遠慮するやうな人物ではなかつたし、又當時宗因との關係はそれ程憚る必要もなかつたと思はれるからである。

天和三年三月には自ら施主となつて、高津の南見庵で師宗因の一周忌を營んだ。「精進膾」一卷が卽ちその追善集である。この年は右の追善集以外には、彼の俳諧の作品を見るべきものは何もなく、又小說の方にも筆を執つたものはなかつた。案ふに當時彼は今後進むべき方針について、いろ〳〵煩悶し熟慮してゐたのではあるまいか。愈々小說家として立たうか、それともやはり俳諧を本技としようか。流石に彼も迷つたものらしい。この年一年間の沈默は、彼のその心の動搖を物語つてゐるものであらう。然るに彼は翌貞享元年に至つて、突如として二萬句獨吟といふ破天荒な放れ業を演じて、全國の俳人を震駭せしめた。だがこれは彼が再び俳人として立つ決心を固めた爲めの仕事ではなかつた。寧ろそれは俳諧師としての生涯の思出たる置

土産ともいふべきものであつた。即ち彼は愈々俳諧を捨てて小説作家たらうとする方針を定めたのである。だがその事については後に改めて述べよう。先づ順序としてこの世にも驚くべき大獨吟の次第を語らねばならぬ。

貞享元年六月五日の事である。大阪住吉神社の神前に於て、かの一晝夜二萬三千五百句獨吟といふ空前絶後の大興行が、西鶴によつて見事に行はれた。一體これだけの句數を一晝夜によむとすると、二十四時間の間便利飲食を止めて吟じ續けたとしても、平均一句を三・六秒餘りの間によみ終らねばならぬ。即ち一分間に十六句程の割である。これは實際人間業以上の仕事でなければならぬ。從來この事實が一種の誇張であらうとして、少くとも大いに割引して解釋されてゐたのも無理ならぬ事であつた。しかし天才の仕事は往々にして人力を絶する。西鶴十三回忌追善集として、門人北條團水が撰んだ「心葉」の序文には、

サル程ニ貞享元年六月五日攝ノ住吉ノ神前ニ於テ、西鶴亦一日一夜ノ獨吟二萬三千五百句ヲ唱テ然モ楮上ニ顯ハス。（中略）コレヨリ自號シテ二萬翁ト呼。見聞ノ徒神ヲ以テ稱セズト云コトナシ。

と明かに記して居るのである。さうして列座の俳人には由平・惟中・幾音　來山・萬海・一禮等談林派の錚々たる人物を網羅し、一座の諸役人には門下の人々が當り、殊に江戸の其角が遙々來合せて後見役を勤めた事などまでが詳しく記されてある。これは西鶴に最も忠實に隨身した門人の言として、十分信憑するに足るべきものである。これを更に他の傍證に徵して見ても、其角の「五元集」には

住吉にて西鶴が矢數俳諧せし時には後見たのみければ

驥の歩み二萬句の蠅あふぎけり

の句があつて、「心葉」に「此日江府其角來リ合セテ蠅拂ノ句ヲ吐ク」とあるのに符節を合するのである。のみならず「西鶴置土産」卷題の追善發句中に、

月に盡ぬ世がたりや二萬三千句　如貞

の吟が見えるし、又元祿末年頃刊の前句附集「寶の市」に

力業には成らぬ物なり

西鶴が二萬三千矢數の句　伏見文子

の附句があり、些か後年のものではあるが、正德六年刊「西鶴傳授車」の序にも、

西鶴法師も此浦に足を停めて洒落風雅の大しやれ者、雪の曙郭公の夜なゝも中々唯居る合點なく、小頸傾けて二萬三千句の置土產、さりとは上檀な氣調(イキカタ)也。

とある。特に何よりも動かす事の出來ない證據は、元祿三年刊可休撰の「俳諧物見車」に、西鶴自らその判詞の中で

此坊主も一日一夜に二萬三千五百句の早口はたゝきしが云々

と問はず語りをしてゐる事である。――この詞を可休が西鶴を罵倒した言だと解してゐる人もあるが、原本を一見すればそれが西鶴自身の判詞たることは明瞭で、決して可休の罵言ではない。――以上の諸資料に徵して、この二萬三千五百句獨吟の事實は毫も疑ふ餘地がないのである。しかも團水の言によれば、それは悉く楮上にあらはしたとあるから、よしそれがあまりに大卷で出版の運びに至らなかつたとしても、執筆が腕のつゞく限り書きまくつた懷紙は存してゐたに違ひない。不幸にして今日それは傳はつてゐないが、もしその一部分でも知る事が出來たら、どんなに興味深い事であらう、人間の能力がどこ迄不可思議に發揮されるものであるか、心理學的立場から觀察して見ても面白い問題であらうと思ふ。それはともあれこの二萬三千五百句獨吟といふ殆んど命がけの大仕事を、彼はこの頃どうして思ひ立つたのであらうか。やはり俳壇に未練が多いあまり、再び俳諧師としての盛名を世に鳴らしたかつたのであらうか。否それは既に一寸述べて置いた通り、寧ろ彼が俳壇を去らうとするに際しての思出として殘した仕事であつたと思はれるのである。「心葉」の序文によると、西鶴は實に矢數俳諧の創始者ともいふべきで、それ以來紀子・三千風・才麿・一晶等の摸倣者が續出し、中には一萬句獨吟をやつたなどと稱する者もあつた。たとひそれが證據不分明なまやかし物であつたとしても、そんな世間の噂は甚しく西鶴の自尊心を傷けたにちがひない。かの四千句獨吟以來彼は矢數俳諧の記錄保持を記念する意味からであつたらう、自ら四千翁と號して「精進膾」などにも「大坂俳林四千翁」と署名してゐるのである。ところが更に一萬句獨吟の噂などをきくと、四千翁の名が頗る貧弱に思はれて來た。負け嫌ひな彼は、愈々俳壇から去らうとするに際して、永久に思ひおきなゝ矢數俳諧のレコードホールダーたる榮譽を贏ち得ておかうと思ひ立つたのである。さてこそ前年以來ひそかに經營慘憺、その準備に餘念なかつたものであらう。かくて遂に追隨者無

き二萬翁の名は彼に冠せられたのであつた。かつて一千六百句興行の際、自らなほ「此道執行募りて後二千二百句迄もなる人はなるべし」といつた事を思ひ出して、我れと我が力の非凡なのに驚いた事であつたらう。

〔補記〕

兒島員九の俳諧に關する雜談を集めた「厚顏記」(享保六年刊)の中に、「西鶴は一日に二萬三千句をいへども、一句も前句にのらぬもなう、風體に意味のうすいもなし」といふ一節が見える。員九は西鶴の門人たる才麿門であるから、この記事も信ずるに足るであらう。なほ本文にはこの二萬句が楮上にあらはされたとありながら、全く傳はらないのを遺憾としたが、大阪の俳人鹿島白羽が延享四年五月六日獨吟一萬句を興行した時の竟宴集「五文臺」に序した羅人の文中に、「二萬翁か句は棒のみ引たれは今世にのこらす」とある。これによれば、口をついて出る速さに執筆が句を書留める遑がなく、たゞ紙上に棒を引いたものらしい。蓋し一分間十五六句を吟ずる速度としては、實狀さもあつたらうと考へられる。而してこれによつて二萬句興行の眞實性は一層裏書されるのである。

この置土產に成功した彼は、果して愈々小說作家として目ざましい進展ぶりを見せる事になつた。まづ二萬句を獨吟した貞享元年には「二代男」、翌二年には「大下馬」・「椀久一世」、三年には、「五人女」・「一代女」・「本朝廿不孝」、四年には「男色大鑑」・「武道傳來記」、元祿元年には「永代藏」・「武家義理物語」・「新可笑記」・「好色盛衰記」、同二年には「櫻陰比事」と、實に矢繼早に小說の筆を執つてゐるのである。その外疑はしい作までも數へあげるとなほ多くの數に達するであらう。それに貞享元年には「曆」などといふ淨瑠璃までも書いて見た。しかもその數年間に俳諧の作品としては、「稻莚」と「庵櫻」に收められた句を見るくらゐである。即ち門人西吟に挨拶の一句を送つた程度で、貞享二年から元祿二年に至る滿五年間、彼は俳壇から——少くとも現存の文獻についてのみいへば——殆ど消息を絕つてしまつたのである。かの二萬句大獨吟の眞意が那邊にあつたかは、以て明かに窺知し得るであらう。ところが元祿三四年の頃に至つて、彼は再び俳壇に些かその影をあらはした、さうして小說の方には却つて全くその作品を見せなかつた。だがそれを以て彼が俳諧への復歸だと見てはならない。實はこの頃可休が「俳諧物見車」を出して、貞門・談林・蕉門各派に亙つて、その點者の批評を試みた事

がある。西鶴も亦その非難を蒙つた一人であつたので、それが例の負け嫌ひの彼をして俳壇に嘴を入れさせる原因となつたのである。いはゞそれは他發的なしかも一時的の現象にすぎなかつた。「物見車」の非難に對して、西鶴の門人北條團水は早速「特牛（コトヒウシ）」を著してこれに應じた。しかもそれだけでなほ心ゆかなかつたのか、西鶴自ら松魂軒の號を用ひて「石車」を著し、「物見車」の批評をうけた點者二十五人の爲めに一々辯護の勞をとり、特に西鶴自身の點について は「物見車」の非難の當らざることを反駁した。だがかうした事件は自ら長らく馴染んで來た俳諧に、彼を再び親しませることにもなつた。「牛駒堂」・「團袋」・「大悟物狂」・「四國猿」・「渡し船」・「蓮の實」・「百人一句」等の當時の俳書に、彼の句が散見することによつても彼が再び作句に興味を感じ出した事が察せられる。なほ此の頃彼は暫く「西鵬」の號を用ひてゐた事が、「團袋」・「物見車」・「渡し舟」・「百人一句」等によつて知られる。その理由については「嬉遊笑覽」などに說が見えるが、果してその故であるかはなほ明かでない。（〔補記〕當時鶴字の使用を禁ぜられた事については、雜誌柳樽研究、昭和五年四月號所載拙稿參照。なほ眞山靑果氏はこの事について、昭和五年十月發行の文藝春秋誌上で「鶴字法度」と題し、詳しい考證を試みて居る。同論文參照。）

西鶴が晩年におけるこの俳諧への復活は、しかし結局老後の餘技に過ぎなかつた。「物見車」に對する應戰などで、一寸活氣を見せた事もあつたが、それはすでに言つた通り全く一時的の現象にすぎなかつた。爾來彼は歿するに至るまで、俳壇と多少の交涉を持續しては居たが、彼の主とする所はやつぱり小說であつた。「胸算用」は此の間に出版せられ、「置土產」・「織留」・「文反古」等の遺著も物せられたのであつたらう。そして俳諧の方はもう西吟や團水等の門人に任せきつた姿であつた。かの「團袋」の序中に、西鶴自ら團水との兩吟について、

ひと夜咄交りに兩吟せしに、中々老の浪のよつてもつかぬ所、句毎にめざめて我又其心にうつしてあとより游ぎつけど、とかく足の重たくやう〳〵歌仙の中程瀨を越所にして止ぬ。

と言つてゐるのは、這般の消息を十分に思はせるものである。卽ち要するに西鶴の俳諧師としての生活は、延寶六七年の交を以て最頂點に達し、それからは次第に下り坂に向つたと慨說すべきであらう。只こゝに注意すべきは、彼の晩年の句風が些かながら自然觀賞の中に、幽玄閑寂の趣を見出してゐる點の存する事である。例へば

笙ふく人留主とは薫る蓮哉　（生駒堂）
里人は突臼かやす花野哉　（蓮の實）
山茶花を旅人に見する伏見哉　（同上）
世に住まば聞けと師走の礎哉　（同上）
夜の芳野蕣は月の落花たり　（新始）
枯野哉つばなの時の女櫛　（渡し船）

等の句には、延寶時代の作に見られない閑寂味が漂つてゐる。それは蕉風全盛の時代におし移つて行つた周圍の影響も多少はあらう。だが彼は周圍から動かされるにはあまりに自信が強かつた。寧ろかうした變化は、彼自身の内部の心の動きによる事が多いと見なければならぬ。中年を過ぎた彼の物を見る目が變つて行つたのである。それは彼がより深く人生の相に徹して行つた心の反映に外ならない。由來西鶴といふ人は、一所に久しく停滞することの出來ない性格をもつて居た。常に新しい局面を拓いて他に先んじようと努めた人である。彼の晩年の俳諧がよしすでに餘技視せられてゐたにせよ、彼をして浮世の月を更に十年も長く見過させたなら、俳諧の方面でもまたいかなる展開を見せるに至つたか、端倪すべからざるものがあつたかも知れぬと思はれるのである。とまれ西鶴の俳諧生活が、彼の藝術家としての生涯の重要な一半を成してゐる事を思へば、こゝに從來比較的等閑視されてゐた彼の俳歴を說くことは、かなり意義多い仕事であると信ずるのである。なほ最後に讀者が彼の俳歴を通覽する便宜上、又一方にはこの中に話しもらした事を補ふために、彼の俳諧年譜を附けておく事にしよう。

附記

本稿はもと大正十五年十二月京大國文學會主催の講演會で話した「西鶴の俳歴」にいくらか加筆して、雜誌「國語國文の研究」昭和三年二月號、四月號に連載したものである。なほ本稿の前半は雜誌「同人」昭和二年三月號、四月號に寄稿した分と、ほゞ同一である。その後補訂すべき事實も多く、又見解の上にも多少考を異にするやうになつた點もあるが、今姑く纔に補記を加へる程度にとゞめた。なほ次の年譜は雜誌「國語國文の研究」所載の分に增補して、雜誌「上方」昭和六年八月號に寄せたものをもととし、更にこれに一二の取捨を加へた。爲めに西鶴の句の入集したもの等について、本文の記述と二三齟齬する點もあるが、それらはすべて年譜の方に從ふべきである。

西鶴年譜

寛永十九年（一歳）

○大阪に生る。（歿年より逆算推定）

明暦二、三年（十五、六歳）

○この頃俳諧を始む。（「大矢數」の跋及び「石車」中の記事より逆算推定）

寛文二年（二十一歳）

○この頃俳諧點者となる。（「石車」中の記事より逆算推定）

同　五年（二十四歳）

○五月十二日、祖父西譽道方歿す。（誓願寺日牌による）

同　六年（二十五歳）

○三月西村長愛子撰「遠近集」刊、鶴永の名で發句三入集、これ西鶴の作品の文獻に見える最初である。

同十一年（三十歳）

○高瀧以仙撰「落花集」に發句一入集。

同十二年（三十一歳）

○風鈴軒撰「櫻川」に發句一入集。（「櫻川」は寫本で寛文十二年正月三日の季吟の序、延寶三年五月中旬の玖也の跋がある）

延寶元年（三十二歳）

○六月「生玉萬句」（假題）を撰び刊行す。これが西鶴の處女著作である。

○十月「哥仙大坂俳諧師」を撰び（「當世誰が身上」による）刊行す。その中に肖像と發句が出て居る。

同　二年（三十三歳）

○「歳旦發句集」に歳旦の發句一入集。（「西鶴の號で出て居るが、集は後の編輯とも見られるので、當時すでに改號して居たか明かでない）

○正月、宗因宅の初會に出座。（「俳諧之口傳」による）

同　三年（三十四歳）

○四月三日、妻二十五歳で歿す、誓願寺に葬る。その追善集「獨吟一日千句」を撰び刊行、序文に松風軒西鶴と署して居る。

○四月、宗因判の「大坂獨吟集」刊、獨吟百韻一卷收めらる。鶴永の號である。

○十一月、伊勢村重安撰「糸屑集」刊、西鶴の號で發句五入集。

同　四年（三十五歳）

○春、大阪玉造和氣遠舟宅で催された「藤萬句」に出座。（「太夫櫻」による）

○十月、「古今誹諧師手鑑」を編し刊行す。

○片岡旨恕撰「草枕」刊、旨恕との兩吟、旨恕・西舟・西夕との四吟各歌仙一卷入集。

同　五年（三十六歳）

○三月、樋口兼賴撰「熱田宮雀」成る。發句入集。

○四月十一日豐後の中村西國の爲に「俳諧之口傳」を草す。

○五月二十五日大阪生玉本覺寺で獨吟千六百句興行。「西鶴俳諧大矢數」と題して刊行す。

○十一月、岡西惟中撰「俳諧三部抄」刊、發句一・附句一入集。

○冬、「烏賊の甲や我か色こぼす雪の鷺」を發句とした獨吟百韻興行。（「俳諧珍重集」）

同　六年（三十七歳）

○春、中村西國撰「俳諧胴骨」刊、由平・西國との三吟三百韻を收む。（板本は今傳はるものなく、作者各自筆の卷だけが知られて居る）

○五月、青木友雪撰「大坂檀林三日千句」刊、友雪等と三月中旬頃興行した櫻の千句（西鶴の附句百十、追加の卷に發句一）を收む。

○五月十二日、岡西惟中の大阪住宅初會興行に出座。（「太郎五百韻」）

○秋、京都那波葎宿宅で江戸の田代松意と會し、三吟三百韻を興行す。「虎溪の橋」と題して刊行す。（原本刊記なし、阿誰軒の「誹諧書籍目錄」により推定）

○秋、岡西惟中と兩吟二百韻興行。（「太郎五百韻」）

○十一月「物種集新附合」を編纂刊行す。

○高石石齋撰「珍重集」刊、獨吟百韻入集。

○片岡旨恕撰「難波風」刊、旨恕・貞因・昌本との四吟百韻入集。
○筑前の西海が上阪して諸家と參會した時の俳諧を集めた「大視」刊、これに序を與ふ。
又西海との兩吟歌仙一卷入集。
○西翁・西夕との各獨吟三百韻を收めた「三鐵輪」刊。
○この年「博多百合」・「五德」刊。(「俳諧書籍目錄」延寶六年の條に見えるが、二書ともなほ原本が知られない。)

同　七年（三十八歳）

○正月、惟中撰「太郎五百韻」刊、惟中との兩吟秋二百韻入集。
○二月、友雪・遠舟・正察との四吟百韻一卷を收めた「俳諧四吟六日飛脚」刊。
○三月、水雲子撰「難波すゝめ」刊。俳諧點者の條に「鑓屋町　井原西鶴」と見える。
○三月、門人西六・西花・西吟・西友と五百韻を催し、「西鶴五百韻」と題して刊行す。
○五月、青木友雪撰「兩吟一日千句」刊、四月十四日友雪と兩吟した千句を收む。
○七月十日、尾張鳴海の下鄕知足來訪、俳諧を催す。(「知足齋日々記」)
○七月、三田淨久撰「河内鑑名所記」刊、發句入集。
○八月、「句箱」刊。友雪・生重・辰壽等と催した歌仙六卷（西鶴の附句二十四）を收む。
○十月八日、大阪天滿天神の社頭で西波・賀子・友雪・滿平（來山）等と一日千句を興行し、「飛梅千句」と題して刊行す。
○十一月、惟中撰「近來俳諧風體抄」・富永辰壽撰「花みち」刊、發句・附句入集。
○十二月、旨恕撰「わたし船」刊、十一月七日旨恕宅で梅翁・旨恕・惟中等と催した十一吟百韻（西鶴の附句九）並に梅翁・西虎・旨恕等との七吟百韻（西鶴の附句十四）入集。
○九月、（但し序文には「延寶七年霜月十一日」とある）「物種集」の續篇たる杉村西治撰「二葉集」刊、西鶴の附句五十四入集。
○尾張鳴海の知足・巽言・如風等の八吟百韻一卷稿本「俳諧喚續集」に評點を加ふ。
○仙臺で大淀三千風が三月五、六日の兩日に興行した獨吟三千句「仙臺大矢數」に跋文並に獨吟歌仙一卷を送る。
○十二月、中島隨流「俳諧破邪顯正」を出して西鶴を阿蘭陀西鶴と罵り、又冬、松江維舟「俳

諧熊坂」を出して西鶴・惟中をばされ句の大將と罵る。

○この年「杉燒集」刊。（「誹諧書籍目錄」延寶七年の條に西鶴作としてあるが、今原本の傳はるものがない。ただし種彦の手記によれば「杉燒集」は由平・益友の兩吟集であるといふ。）

同　八年（三十九歳）

○五月七日、大阪生玉で四千句獨吟を興行し、翌年「大矢數」と題して刊行す。

○和氣遠舟撰「太夫櫻」（四月刊）・神戸友琴撰「白根草」（五月刊）・木原宗圓撰「阿蘭陀丸二番船」（八月奥書）・中村西國撰「雲くらひ」（九月刊）・澤井梅朝撰「江戸大坂通し馬」（九月刊）に發句・附句・連句入集。「備前海月」（五月刊）に西鶴の附句見ゆ。

○三月、中島隨流「俳諧猿蓑」を出して再び西鶴等を罵る。

延寶年間

○零本逸題俳書（著者藏。横本一册、前半を缺きかつ題名・刊年等を詳にしないが、集中貞因の作最も多く、同人の撰になるものか。）刊、發句・附句入集。

○撰者不詳「堺絹」（春・夏の零本二册のみ知られて居る。）刊、發句三入集。

天和元年（四十歳）

○正月、役者評判記「難波の貌は伊勢の白粉」刊。（「野傾友三味線」によれば本書は西鶴の作である。延寶八年冬の顔見世評判と推定され、隨つてこの年春の刊行であらう）

○四月、「大矢數」刊。

○十一月、兼賴撰「熱田宮雀」刊（序文により推定）、兼賴との兩吟歌仙入集。

○太田友悅撰「それ〳〵草」（五月刊）に發句・附句、齋藤賀子撰「大坂みつかしら」（八月刊）に賀子との兩吟百韻入集。

同　二年（四十一歳）

○正月、土橋春流の乞により西鶴自ら難波俳家百人の像と句とを筆して與へ、これを「難波色紙百人一句」と題して刊行す。西鶴自身の像並に發句出づ。

○正月、西村未達撰「俳諧關相撲」刊、西鶴點の歌仙一卷を收む。

○三月二十八日、師西山宗因歿す。

○四月、梅林軒風黑撰「高名集」刊、發句入集。板下挿繪共に西鶴の筆か。

○松花軒蛇鱗撰「犬の尾」（正月刊）・松水軒如扶撰「俳諧三ケ津」（四月刊）・中堀幾音撰「家土産」（五月刊）・大淀三千風撰「松島眺望集」（五月刊）に發句入集。
○十月、「好色一代男」大阪で刊行さる。

同　三年（四十二歳）

○三月二十七日、高津南見庵で先師宗因の「周忌を營み、追善本式百韻を興行す。「精進膾」と題して刊行す。
○八月八日、夢想獨吟表八句成る。

貞享元年（四十三歳）

○三月、「好色一代男」江戸で刊行さる。
○四月、大淀三千風大阪に來遊し、一水主催の俳諧が興行されたのに出座す。（「日本行脚文集」による）
○四月、「好色二代男」刊行。
○六月五日、住吉の神前で一晝夜二萬三千五百句を獨吟す。
○八月、中村西國撰「誹諧引導集」刊、附句入集。
○十月、「古今俳諧女歌仙」を編し刊行す。作者の繡像は西鶴の自畫である。

同　二年（四十四歳）

○正月、宇治加賀掾のために新作した淨瑠璃「暦」刊行さる。
○鈴木清風撰「稻莚」に發句一入集。
○正月、「西鶴諸國咄」刊。
○二月、「椀久一世の物語」刊。（西鶴作と推定さる。）
○七月十六日、加賀掾の段物集「小竹集」（八月刊）の爲に序文を草す。

同　三年（四十五歳）

○正月、「近代艶隱者」刊。（この書一般に西鶴の作と認められてゐるが、やはり西鶴の序に言つて居る通り、西鷺軒の作とすべきである。）
○正月、「好色三代男」刊。（これは西村市良衛門の作で西鶴の作ではない。）
○二月、「好色五人女」刊。

○六月、「好色一代女」刊。
○十一月、「本朝二十不孝」成る。翌年刊行。
○水田西吟撰「庵櫻」(三月刊)に發句一入集。
○田中玄順著「本朝列仙傳」刊。(挿繪は西鶴の筆と言はれてゐる。)

同　四年(四十六歳)

○正月「男色大鑑」・「本朝二十不孝」刊。
○「懐硯」刊。(この書刊記はないが序に「貞享四年花見月初旬」とある。)
○四月「武道傳來記」刊。
○五月「西行撰集抄」刊。(挿繪は西鶴の筆かといふ。)
○九月「好色旅日記」刊。(生川春明の説によれば、本書は片岡旨恕の作と思はれる。)
○九月「好色一代男」江戸で再版さる。

貞享年間

○「椀久二世の物語」刊。(西鶴作と推定さる。)

元禄元年(四十七歳)

○正月「日本永代藏」刊。
○二月「武家義理物語」刊。
○六月「色里三所世帯」刊。(西鶴作かとも言はれてゐるが疑問である。)
○十一月「新可笑記」刊。(自序に「西鵬」と識せり。)
○「好色盛衰記」刊。(本書は西鶴の署名はないがその作と推定される。)

同　二年(四十八歳)

○正月「本朝櫻陰比事」・「一目玉鉾」刊。
○三月「新吉原つね〳〵草」刊。(本書は西鶴と磯貝捨若との合作であらう。)
○十一月十一日、俳諧式目傳書を草す。(眞蹟)

同　三年(四十九歳)

○二月十日、鬼貫主催の鉄卵の追善俳諧に出座す。(「大悟物狂」)
○燈外撰「生駒堂」・鬼貫撰「大悟物狂」・圍水撰「秋津島」(本書には「西鵬」とある)に入集。

○冬、團水撰「團袋」に序す。なほ同書に團水との兩吟二卷收めらる。（刊行は元祿四年である。本書にも「西鵬」とある。）

○可休撰「俳諧物見車」刊。西鶴の評點を難じたのに對して團水「特牛」を出して反駁す。（「物見車」には「西鵬」とも「西鶴」ともある。）

○六月「眞實伊勢物語」刊。（西鶴作かと言はれるが疑はしい。）

同　四年（五十歳）

○春、谷木因の來訪を迎へ、汐干狩し俳諧を催す。（「國の華」）

○荻原律友撰「四國猿」・島順水撰「渡し船」・賀子撰「蓮の實」・流水堂江水撰「百人一句」・麻野幸賢撰「河內羽二重」・高木自問撰「難波曲」・轍士撰「我が庵」に入集。（「渡し船」の附句及び「百人一句」には「西鵬」とある。）

○この年春頃「嵐無常物語」刊。（西鶴作と推定される。）

○八月「石車」三卷を出して「物見車」を反駁す。（この書には「松魂軒」と號してゐる。）

○十二月二十八日、歌水・艶山兩吟歌仙に評點を加ふ。（「難波俳林二万翁」と署してゐる。）

同　五年（五十一歳）

○朧麿撰「八重一重」（中に獨吟の半歌仙がある）・季範撰「如月」・助叟撰「新始」・沾德撰「誹林一字幽蘭集」・御風山春色撰「わたまし抄」（此書には跋文をも寄せてゐる）・遠舟撰「すかた哉」・楊々子撰「浦島集」に入集。

○前句附集「難波土產」に評點を加ふ。

○正月「世間胸算用」刊。（元祿十二年八月再版。）

○三月廿四日、光含心照信女歿す。（誓願寺月牌には西鶴妻とあるが實は娘か）

同　六年（五十二歳）

○休計撰「浪花置火燵」・遠舟撰「不知翁」・梅枝軒閑水撰「題名不詳」に入集。

○八月十日歿す。誓願寺に葬る。法號仙皓西鶴。

○正月「浮世榮華一代男」刊。（西鶴作か）

○冬「西鶴置土產」刊。

同　七年

○小中南水・玉置安之撰「熊野烏」刊、西鶴の發句並に獨吟百韻の一部を收む。
○不角撰「芦分船」に入集。
○二月「置土產」を「西鶴彼岸櫻」と改題して江戸の書店から刊行す。
○二月、前句附集「奈良土產」刊、西鶴點の高點句出づ。
○三月「西鶴織留」刊。（但し序文には「卯月上旬」とある。正德二年五月再版。）
○十一月、尼崎松撫軒朴翁撰「蓮の花笠」刊、西鶴が閻魔王宮で五百番の勝句の點をした話見ゆ。

同　八年

○安江草也撰「備後砂」に草也との兩吟連句第三まで收めらる。
○「誹諧寄垣抄」に西鶴點の前句附出づ。
○正月「俗つれ〳〵」刊。

同　九年

○珍著堂遊林撰「誹諧反古集」に辭世の句出づ。
○坂上稻丸撰「吳服絹」に西鶴の句出づ。
○正月「萬の文反古」刊。（正德二年九月再版。）

同　十年

○二月、笠附集「俳諧塗笠」刊、西鶴點の笠附出づ。
○幻夢作「西鶴冥途物語」刊。（西鶴地獄巡りの話がある。）

同十一年

○正月「彼岸櫻」の改題再版たる「朝くれなゐ」刊。
○正月「小夜嵐」刊。（西鶴の署名あれど全く僞作。）

同十二年

○正月、四方郎朱拙撰「今日の昔」刊、西鶴の句をあげてこれを貶してゐる。
○四月「西鶴名殘の友」刊。

同十三年

○雪松撰「俳諧名所百物語」に西鶴の句出づ。

同十四年

○正月「好色成盛衰記」を改題した「西鶴榮華咄」刊。

○梅薗堂の「元祿太平記」に西鶴の評がある。

同十五年

○轍士撰「花見車」に西鶴の句をあげてある。

元祿年間

○團水撰「くやみ草」に西鶴の發句一出づ。

寶永元年

○木因撰「國の華」第十二に西鶴・木因兩吟の歌仙表六句出づ。

○炭翁(西鶴の遺弟といふ)撰「俳諧染糸」に西鶴の句出づ。

同　二年

○團水京から難波に赴いて西鶴十三回忌を營み、翌年正月追善集「心葉」を刊行す。

○「懐硯」を「筆の初そめ」と改題し、新に二章を加へ今西鶴の著として刊行さる。

同　五年

○也蘭撰「俳諧一枚起請」に西鶴の發句出づ。

○「置土產」を「風流門出加增藏」と改題し、卷頭の一章だけ改めて刊行す。

同　七年

○九月「西鶴跡追當流誰身上」刊。(「飛鳥川當流男」の改題本で西鶴に關係はない。)

寶永年間

○園女撰「菊の塵」に西鶴の句出づ。

○「懐硯」の改題本「四身物語」刊。(年代は推定による。)

正德五年

○正月「丹波太郎物語」刊。(同年江島屋板の役者評判記「役者返魂香」に西鶴自筆のまゝ上梓したものだとあるが、內容から見て僞作とすべきである。)

○「新小夜嵐物語」刊。(「椀久二世の物語」の改題。)

同　六年

○二月、天狗堂轉蓬作「西鶴傳授車」刊。（西鶴地獄巡りの話がある。）

享保五年

○「五人女」の改題本「當世女容氣」刊。

寶暦六年

○「男色大鑑」の改題本「古今武士形氣」刊。

寛政四年

○江戸談林七世一陽井素外西鶴百回忌を營み、日暮里養福寺の境内に宗因・西鶴・才麿等の句碑を建て、「俳諧百回鶴の跡」を撰ぶ。

【補】

延寶七年

○四月、西國撰「見花數寄」に西國との兩吟歌仙一卷入集。

芭蕉雜考

宗因一座の芭蕉連句

芭蕉の連句で最も古い年代のものとして知られてゐるのは、寛文五年の冬貞德十三回忌の追善に、蟬吟子の主催で興行された百韻一卷であらう。この一卷は蟬吟子の發句、季吟の脇で始まつて居り、その中に芭蕉の付句が十八句あつたといふ。それは竹人の「芭蕉翁全傳」によつて傳へられてゐる事だが、竹人も十八句の中僅か五句引用してゐるだけで、他は全く知る事ができない。竹人在世の頃まではまだその追善百韻を書寫したものが、鳥羽の實相寺に昔のまゝ殘つて居たものと見えるが、今はすでに佚亡してその行方を知らない。ついで寛文七年刊の「續山井」に芭蕉の付句が三句出てゐる。しかしこれもその前句と付句と二句づゝ載せてゐるだけなので、まだ一卷を通じて芭蕉の面目を窺ふことはできない。一卷の連句として纏つたものは、まづ延寶四年の奉納二百韻が最も年代の古いものであらう。然るに最近神戸川西利露氏の

藏にかゝる「談林俳諧」と題した寫本を閲讀してゐる際、たま〳〵芭蕉が宗因等と一座して居る延寶三年夏興行の百韻一卷を發見した。それはたゞ年代が古いといふばかりではない、宗因と芭蕉と一座してゐるといふ事が、強く私の興味を惹いた。

一體宗因と芭蕉との關係については從來種々の說が傳へられて居る。宗因が嘗て市村竹之丞座の觀劇に行くと、そこへ芭蕉も居合せて、初めて宗因と對面した。時しも門人何某が句案に「子はまさりけり竹之丞」として上の五文字を置きかね、梅翁にうかゞつたところが、「おや〳〵〳〵」と冠すべしと敎へた。後に芭蕉は此の事を門人に示してその奇才を稱嘆したといふ。或は又芭蕉の若い時、宗因と共に九州へ旅行したことがあるなどゝも傳へて居るが、これらの說は確證の據るべきものがなく、そのまゝ信ずることは出來ない。しかし芭蕉は自ら「梅の花俳諧國にさかんなり」といふ信章の發句に「こちとうづれも此時の春」とつけて、檀林の風調に心醉し、また「上に宗因なくんば、我々の俳諧は今以て貞德の涎をねぶるべし」とも言つたといふのだから、彼が宗因に心服する所深かつた事はいふまでもない。しかも宗因と親しく相語つた事があるか否かといふ事實については、從來全くこれを證すべき文獻的資料がなかつた。

竹人も「貞德老人の流を好み、洛の季吟・貞室、攝の宗因等にしたしみ遊ぶ事歲あり」と言つて居るけれども、その據る所を明かにして居ない。然るにこの一卷の百韻によつて延寶三年卽ち宗因がはる〴〵江戸に下り「されば爰に談林の木あり梅の花」と談林十百韻の卷頭に獅子吼した年、芭蕉もまたその風を仰いで、信章・幽山等と共に宗因に親炙した事が明かにされたのである。それは芭蕉の研究家にとつては、確かに興味深い一の新發見でなければならぬ。それに芭蕉がこの頃からすでに「桃青」といふ號を用ひて居た事なども分る。かたゞ〳〵芭蕉の連句としては頗る注目に値するものだと思ふので、その付句は僅か十句に足りないけれども、百韻全部をこゝに錄して見ることにした。芭蕉の研究上資する所があれば幸である。

延寶三卯五月　東武にて

宗因　いと涼しき大德也けり法の水
磋薔　軒を宗と因む蓮池
幽山　反橋のけしきに扇ひらき來て
桃青　石壇よりも夕日こほるゝ

領境松に殘して一時雨　信木
雲路をわけし跡の山公事　吟
或は日月は海から出るとも　少
よみくせいかに渡る鴈かね　似
四季もはや漸〳〵早田刈ほして
あの間此間に秋風そふく　章也
夕暮は袖引次第局かた　市才
座頭もまよふ戀路なるらし　春
そひへたりおもひ積て加茂の山　山
室のとまりの其遊ひもの　青
草枕おきつ汐風立わかれ　章
一生はたゝ萍におなし　春
わひぬれはとなん云しもきのふ今日　因
それ初秋の金のなし口　畫
十年を爰に勤て袖の露　筆

おほん賀あふく山のはの月　春山
春は花艶の比は西の丸　畫
參内過て既に在江戸　章
時を得たり法印法橋其外も　青
新筆なれとあたひいくはく　春
哥のこと世上に眼高ふして　因
明石の浦は蟹もしる覽　畫
蛸にも其入道の名は有そかし　也
八日〳〵は見えし堂守　市
今もかも例をたかへぬ佛生會　春
夏花やつゝし咲匂ふらん　才
あの山の風をもかなと窓明て　山
月の前なる雲無心なり　因
露時雨ふる借錢の其上に　市
見し太夫さま色替ぬ松

空起請烟となるも理りや
夜討むなしき野邊の夕暮
あてのみの酒氣を風や盗むらん
雨一とをり願ふ川こし
名號の本尊をかけよ鳥の聲
それ西方に別路の雲
口舌事手をさら〳〵とおしもんて
しら紙ひたす涙也けり
高面をのぞく障子の穴床し
ゆひのさきなる中川の宿
蒔繪さへ寺町物と成にけり
敷寄は茶湯に化野の露
石灯籠月常住の影見へて
雪隱につゝく築山の色
ますき垣南山丼に花の枝

又

山因春吟也章市青才因山春青畵因

うり家淋し春の黄昏
欠落の跡は霞の立替り
雪崩れする其岩のはな
松明の煙につゝく白湯かた
果しあふよに出あへや出あへ
聲高のみなもと聞は衆道也
よりて芝居の垣間見をせん
おもほえす古市着の錢をさくり
めくら腰ぬけ夢の世中
慮外者さはらはなとゝ肱を張
上様風の吹旅の空
御荷物に唐船一艘つくられたり
蜘てふ虫も糸のわけ口
鬢を撫て來へき宵也月の下
伽羅の汐に露そこぼるゝ

芭蕉雜考

市春山章因畵市吟春山才因春畵也

戀草の色は外郎氣付にて　才
はなかみ袋形見なりけり　市
さる間三年はこゝにさし枕　章
親の細工をあらためすして　山
何物か人のかたちと成やらん　也
しはし樂屋の内そ床しき　山
來て見れは有し昔にかはら町　市
小石をひろひ塔となしけり　因
ない物そ眞の舍利は求ても　春
誰かしつつる天竺の秋　畫
窄人を尋出たる空の月　章
霧にこもりし城の遠近　春
花おる事附り堀の魚取事　才
すり餌によする梅のうくひす　青
やよ見たか祇園あたりのはるの空　因

うしろ帶して塗笠編笠　春
屋敷者跡にたつたは年こはい　市
順の舞には小々性か先　因
常紋の袴のそばをかいとりて　春
雨にも風にもかよはふよなふ　吟
夢うつゝ女姿のちみとろに　春
胸にたくのを別火とやいふ　市
しゝくふた酬ひを戀にしられたり　章
たか參宮の伊勢ものかたり　也
見たい事しや松坂こえてかけ踊　山
遠く遊はぬ盆の夕暮　因
住つけは殘る暑さも苦にならす　春
月はことゝふうら店の奥　畫
秋の風棒にかけたる干菜賣　春
賤かこゝろも明樽にあり　因

網手をもくり返しぬる網のうけ　山
あときか浦や牛のかけ摩　市
みつらいふわつはも清き渚にて　章
馴てもつかへたてまつる院　鬻
そも是は大師以來の法の華　春
土の筆にも道や云らん　才

宗因十五　吟市十二
磋畵十　少才八
幽山十三　似春十三
桃青九　執筆一
信章九　又吟三
木也七

（句引に桃青九とあつて實は七句よりなく、又似春は句引に十三とあつて實は十五句見える。これは春と青と草體が類してゐる爲に、書寫の際青とあるべき個所二を春と誤つたのであらう。）

脇句をつけた磋畵といふ人は、どんな人か分らないが、宗因の發句から見ると出家の身であるらしい。恐らく宗因は磋畵の住んでゐる寺などに招かれ、主客挨拶の句で百韻の卷頭を起したものであらう。なほこの「談林俳諧」と題した寫本は、始めから一冊のさうした書物ではなくて、諸種の談林俳書から拔抄したものに、筆寫した人が假にかく名づけたものらしい。中には信德・政定・仙庵の京三吟や、山水獨吟十百韻、その他宗因の判した諸家の獨吟歌仙などが順序もなく採錄されてあつて、右の百韻も恐らく何かの刊本から抄出したものであらう。又この芭蕉一座の百韻のすぐ前には、同じく延寶三年五月宗因が老後の思出に江戸へ下り、歸さに鎌倉一見の時似春と幽山とその跡を慕つて、道すがら三吟の俳諧をしたといふ百韻一卷――この鎌倉三吟は「宗因七百韻」にも收められてゐるが、右の寫本とは少異がある。――が寫されてある。それでこの百韻二卷だけは必ず同じ俳書から抄出したものと思はれるが、今その原本を明にする事が出來ないのは遺憾である。（大正十四年十二月三日）

〔補記〕

寛文五年の冬興行された貞德十三回忌追善の百韻は、その後南總の天堂一叟が編した「芭

蕉桃青翁正傳記」中に、全部抄寫して傳へられてゐる事が分つた。右について一叟の記す所は、すべて竹人の全傳によつたらしいが、別に季吟に關する記事と、この百韻全部の抄寫とが添へられて居るのである。案ふに竹人の原稿本には、すでに百韻全部が抄寫されてあつたのだが、その後傳寫の際煩を厭うて省かれたのではあるまいか。一叟はその原稿本によつて更に全部抄出しておいたものであらう。なほ右百韻は勝峰氏編の「新編芭蕉一代集」中に全部採錄されてゐるからこゝに紹介する事を略する。

「田舍の句合」の延寶版

「田舍の句合」は安永四年闌更の覆刻したものが世に行はれ、その外「新七部集」・「一葉集」・「袖珍鈔」等にも收められてゐるので、内容そのものはすでに汎く知られてゐる。しかしその刊行當時の古板本は世に多く傳はるものゝあるのを聞かない。夙く半化房も、かの覆刻本の序に延寶の刊本は時うつり櫻木朽ち、男女の文字もわき難ければ、再び刻んで世に弘むる事にしたと言つてゐるくらゐである。ところが此の書はそれより以前にも、よほど稀覯であつたものと見えて、享保乃至寶曆年間と思はれる頃、既に別種の覆刻本が出來てゐる。それは題簽に、

俳諧合　田舍　其角

とある半紙本で、識者の中にも往々これを以て延寶の古板本と見なして居るものもある。しかし此の書が決して延寶頃の古板でないことは、書物の體裁や板下の文字などを一見すればすぐ分ることである。序跋もなく刊行年代・書肆名等も一切記してないので、はつきりした事はいへないが、大體享保から寶曆頃までの間の覆刻本だらうといふ見當はつく。それでは延寶の原本は遂に湮滅に歸してしまつたものであらうか。だがさう斷念するには少し早すぎる。神戸川西和露氏の文庫中には右にあげた二種の覆刻本の外に又全く別種の一本を藏するのである。しかもその一本こそ紛ふ方なき延寶の古板であると思はれる。管見としては誠に珍しいと思つたので、邊家の誇を顧みず、あへてその書を紹介して見よう。

和露文庫藏本は寬文・延寶頃の俳書によくある中本形の一冊本で、表紙だけは後に改めたものらしく、題簽も缺けてゐる。且つ肝要な刊行年代・書肆名等をも記してないのである。しかしその體裁・板式等から見て、それが延寶年代の刊行たることは疑ふ餘地がない。のみならず

その板下の文字は、――後年の書體と比すればよほどまだ垢抜けのしない所はあるが、――確かに其角の筆蹟である。而してその内容を前二種の覆刻本に比較して見ると、やはり二三の異同は免れないが、後の二種共比較的忠實な覆刻本であることが分る。その著しい異同をあげると、享保乃至寶暦年間の版と思はれる方では、第二十四番の判詞「ふせくにたらす」が「ふせくにたへす」、第二十五番右の句「世につくも髪」が「世のつくも髪」などと誤つてゐる如きである。又安永版の方は序文の「希逸が辯も口にふたす」を「口にふるす」と誤つてゐる如きである。しかし安永版の方が原本に忠實ならんとしたあとが見える。「口にふるす」なども、延寶版を一寸見ると、さう讀めるやうな字體なので、闌更が直接この延寶の古板によつた事は明かである。只不思議なのは、延寶版の序文にはその本文だけあつて、かの

延寶八歳次庚申仲秋日　嵐亭治助序

といふ年次が識されてないことである。しかし阿誰軒の「俳諧書籍目錄」の附錄を見ると、

田舍句合一　時代不見　其角句合判者芭蕉　一匁

と出てゐる。即ち古板本に年代が記されてなかつたことは、右の「時代不見」といふのに依つて傍證されるであらう。しかもかの享保版にはちやんと「延寶八歳頃云々」と明記されてゐるのであるが、これは覆刻當時他の何かの資料――恐らくは嵐雪の草稿などで――によつて補つたものであらう。而して安永版は前にも述べた通り、直接延寶の古版本によつてゐる事は明かであるが、しかも享保版も參考に資して居る事は、本文の振假名訓み方などによつて推測される。隨つて延寶八歳次の識語も、そのまゝ享保版によつて補つたものと思はれる。

なほ阿誰軒の俳書目錄下卷には

江戸俳諧合二冊　桃青判　其角　杉風　作

とあつて、「田舍の句合」と「常盤屋の句合」と二冊で一部を成したものらしい。延寶版の題簽に「田舍句合」とあるのみで、「俳諧合　田舍」とある所以である。（昭和二年八月十三日）

〔補記〕

「田舍の句合」と合して一部をなすべき「常盤屋の句合」も、また一般に闌更の覆刻した安永版によつて行はれ、その外「新七部集」・「一葉集」等に收められて居るが、延寶の原板はやはり傳本が極めて少い。幸ひに奈良縣丹波市の天理圖書館にはその一本が藏せら

れ、「又田舍の句合」の和露文庫本も今は同圖書館の有に歸して居る。卽ちここに「江戸俳諧合」の二冊が原版本によつて揃へられたわけである。

鼾の圖

芭蕉が吉野行脚のをり、同行した萬菊丸の鼾に因つて、戯れにそれを圖に描いたことは名高い話で、その鼾の圖も「枇杷園隨筆」に摹刻されてあるから誰も知つてゐる。尤も同書には圖の由來については何も記してないが、それは百明房の「俳諧冬扇一路」――寶曆八年刊――中の伊賀實錄によつて詳しく知る事が出來る。「冬扇一路」は別段紹介するほどの珍らしい俳書ではないが、話が面白いから一寸その由來を拔抄して見よう。

鼾の圖といふものあり。予（註、編者百明のことである）丙寅行脚の比、大津の驛菊峯亭にして支考其圖を摸寫したるを見る。翁鼾の圖伊賀にありと計書るを寫して、おかしきまゝにはいかい鼾の圖といふ一集を出せり。是や翁のふとんにても着て旅寢し給ふ姿歟、いぶかしかりけるが、此の地（註、伊賀上野をいふ）へ來て聞くに、彼圖にいさゝかも違はず。端書に萬菊殿鼾の圖とありて、圖の上にこゝは車を引如し、こゝは何〳〵といろ〳〵戯書し給ひて、甚めづらしきもの也。鼾に姿をつけ給ふ處古今にあらずと感じ侍る。是は猿雖か宅にて萬菊が鼾の高きに寢兼給ひて、夙く自かゝせ給ひけるとなむ。今桃雫といへる風士秘藏すとぞ。

「枇杷園隨筆」によれば、この鼾の圖は伊賀上野内神屋三四郎所藏とある。それは桃雫の子か孫か、若くは全く人手に渡つてゐたものか、いづれとも分らぬが、士朗の頃まではとに角傳來してゐたのだ。今なほ上野のどこかに傳はつてでも居るのなら、わざ〳〵でも見に出かけたい氣がする。「冬扇一路」の伊賀實錄中には、なほ芭蕉に關するいろ〳〵の話がのせてある。大がい世に知られてゐる話ではあるが、ついでに興味のある條を一二拔抄して見よう。

翁の夏冬の夜など仕立られけるは、俳名智秀女となん。今に存命ことし壽算九十二なりとぞ。智秀女は武門友田角左衞門といへるの室也。常に茶色を好給ひかつ左右の袵に長短の物數奇の有けるよし、褻喪の袂の右のみじかきによれるかしらず。彼是の物語聞てその世猶ゆかし。翁は蠟燭を嫌ひ給ふ。その詮は夜の更る事のしるれば也とて。

芭蕉が文臺捌きに便なため、右の肩行を一寸ばかり短くした所謂俳諧袖を、伊賀の梢風尼に作

つて貰つた事は、「俳家奇人談」などにも出てゐて、よく知られた話だが、右の智秀女といふのは卽ち梢風尼の事である。夫の友田角（一に覺に作る）左衞門も俳號を良品といつて、芭蕉に師事してゐた。予は數年前上野に遊んだをり、萬福寺にこの夫妻の墓を展した事がある。今當時の旅日記を出して見ると、二の碑面にそれ〴〵

享保十五年六月□（磨滅）六日
英峯慈看居士

寶曆八戊寅天四月十三日
圓淨院智周禪尼

と刻されてあつたことを控へてある。ついでにそれもこゝに書きつけておく。卽ち梢風尼は恰度百明が上野に行脚したころ歿したのであつた。（昭和二年八月十三日）

芭蕉翁行脚掟

芭蕉が門人に行脚の心得を示した所謂行脚掟といふものは、石兮の「芭蕉翁七書」を始め、一葉集・芭蕉翁一代集・蕉翁俳談秘錄等にも採錄され、一般に信ぜられて居る。しかし元來これは元祿寶永頃の古い俳書等には全く見えないもので、大江丸の「俳諧袋」・成美の「隨齋諧話」・干當の「關の清水物語」等に傳へる所も、いづれも本文に多少の異同があつて一定して居ない。加之その內容が甚しく儒者臭い所があり、文章も意の通じ難い所が少くない。だから成美も夙く「右の掟書も芭蕉の筆力に似ず、されば後人の僞作とおもはるれど、しばらくしるして明眼の人の批評をまつものなり」と疑つて居る。がこれらの疑問はとにかくとして、この行脚掟は一體いつ頃始めて世に知られたものであらうか。管見の範圍では露柱庵鳥醉が、その師柳居の十三回忌追善集として出した「五七記」（寶曆十年刊）の附錄に揭げたものが最も古い。それは野州那須郡高久の角左衞門方に傳へた芭蕉の眞蹟によつたものだといふ。すると成美が「隨齋諧話」に、「ある人の奧州高久の角左衞門がもとにて、ばせをの眞蹟を珍藏したるをしたしく見たりといひし、その寫のまゝを左にのす」と言つて揭げた本文と同一であるべき筈だがなほ二三の小異がある。特に「一葉集」等に傳へる所とは大分異同が多い。しかし「隨齋諧話」の基く所も、「五七記」の據つたものも、同一たるべき事は容易に推測されるので、しかも「五七記」は最も早くこれを世に紹介したものであるから、今同書によつてまづその本文を示さう——引く所はすべて原本のまゝ——。傍點を施したのは「隨齋諧話」と異る個所である。

一、一宿再宿すへからす、あたゝめさる蕉を思ふへし。
一、腰に寸鐵たりとも帶すへからす、物而物の命を取る事なかれ、君父の讎あるものは門外に遊へし、いたゝきふまぬの道忍ひさる情あれは也。
一、衣類器財相應にすへし、過たるはよからす、足さるもしかす。
一、魚鳥獸の肉好むてくふへからす、美食珍味にふける人は佗事にふれやすき物なり、菜根を咬て百事をなすへき語を思ふへし。
一、人の求なきに己か句出すへからす、望をそむくもしからす。
一、たとへ嶮岨の境たりとも、所勞の念起すへからす、起らハ中途より歸るへし。
一、馬駕に乘る事なかれ、一枝の枯杖を己か痔脚と思ふへし。
一、好て酒を飲へからす、饗應により固辭しかたくとも、微醺にして止むへし、亂に及はすの節、幽亂起歳の戒、祭にもろみを用るも醉るを憎んて也、酒に遠さかるの訓あり、つゝしめや。
一、船錢茶代忘るへからす。
一、佗の短をあけ己か長を顯す事なかれ、人を誘て己にほこるは甚賤き事也。
一、俳談の外雜話すへからす、雜話出なは居眠して勞を養ふへし。
一、女姓（マヽ）の俳友にしたしむへからす、師にも弟子にもいらぬ事也、此道に親炙せは人をもて傳ふへし、總して男女の道は嗣を立るのみ也、流蕩すれは心敎一ならす、此道は主一無適にして成す、能己を省へし。
一、主あるものは一針一草たりとも取へからす、山川江澤にも主あり、勤よや。
一、山川旧跡したしく尋入へし、あらたに私の名を付る事なかれ。
一、一字の師恩たりとも忘るゝ事なかれ、一句の理をたに解せす、人の師となる事なかれ、人に敎るは己を成して後の事也。
一、一宿一飯の主もおろそかに思ふへからす、さりやとて媚諂事なかれ、如此の人は世の奴也、此道に入る者は此道の人に交るへし。
一、夕を思ひ旦を思ふへし、旦暮の行脚といふ事は好まさる事也、人に勞をかくる事なかれ、しは〳〵すれは疎せらるゝの言を思ふへし。

右翁眞蹟十七ケ條の掟は野州那須野郡高久の角左衞門方にありとそ。
雲鈴法師かいへる十七ケ條の掟といふは此事にやあらんと爰に記す。

右の眞蹟を傳來したといふ高久の角左衞門は、俳號を青楓といひ、芭蕉が奥の細道の行脚の折宿つた家の主で、「雪丸げ」によれば、

落ちくるやたかくの宿のほとゝぎす

は、この角左衞門の許での吟であるといふ。なほ「奥細道拾遺」や「蝶之遊」等には同家に芭蕉の眞蹟類を多く藏して居る由を言ひ、寛政九年刊の「茂々代草」にも、郭公の句に曾良の脇をついだ芭蕉眞蹟が載せられてある。而して右の角左衞門傳來の眞蹟と稱する行脚掟は、「五七記」・「隨齋諧話」の外、寛政二年刊竹之坊撰の「ちから杖」にも收められ、「芭蕉翁七書」や「關の清水物語」に載する所も、ほゞこれと同系統のものによつたと思はれる。もしこれらの所傳が確かであるならば、この行脚掟の確實性も多くなつて來るわけだが、「五七記」所傳のものがすでに「高久の角左衞門方にありとぞ」とあつて、鳥醉が實見したのではない。成美も然り。そこに疑念を挿む餘地は十分に存するわけである。

「五七記」についで古い所見は、明和九年に珪山の門人科戸三杵の撰んだ「藤枝折」に載するものである。この書は伊香保の俳人たちが、芭蕉眞蹟の一紙を埋めて「くたびれて宿かるころや藤の花」の句碑を建てた時の記念集で、撰者は「俳士往復のたすけともならば、俳道に少しき功なきにしもあらじ」と言つて、蕉翁行脚の掟を寫し出してゐるのである。而してその本文は左の如く「五七記」所載のものと、文句順序等に大分異る點が多い。傍點を施したのはその著しい個所である。

一、一宿は可也、再宿すへからす、煖さる莚を思ふへし。
一、腰に短刀たりとも帶すへからす。
一、君父の儀あるものは門外に遊ふへし、いたゝき踏ぬの道忍ひさるあれはなり。
一、馬駕に乘へからす、他の勞を思慮すへし。
一、名所古跡したしく尋入へし、あらたに私の名を付る事なかれ。
一、嶮岨の境たりとも所勞の念を起すへからす、起らは中途より歸るへし。
一、船饗茶代忘るへからす。
一、主あるものは一木一草たりとも取へからす、山川江澤にも主あり、つとめよや。
一、衣類器財相應にすへし、過たるはよからす、足らさるはしからす。
一、鳥獸魚鼈の肉好て喰へからす、美食珍味に耽る人は他事にふれやすきもの也、菜根を咬て百事をなすへきの語を思ふへし。
一、人の求なきに己が句を出すへからす、望を背も宜からす。
一、好て酒を飲へからす、饗應により固辭しかたくとも、微醺にして止へし、亂に及はすの敎あり、祭にもろみを用ゆるも醉るを憎て也、酒に遠さかるの訓あり、つゝしめや。

一、他の短をあげ己が長を顯すことなかれ、人を謾て己に誇るは甚賤き事也。
一、俳諧の外雜話すへからす、雜話甚なは居眠して勞を養ふへし。
一、女性の俳友にしたしむへからす、俳道に執心せは博ふるに席を正しうすへし、流蕩すれはこゝろ純一ならす、此道は主一無適にして成就す、能己を省るへし。
一、一字の師恩たりとも忘る事なかれ、一句の理をたに解さすんは人の師となる事なかれ、人に教るは己をなして後の事也。
一、一宿一飯の主もおろそかに思ふへからす、さりやとて媚諂の事なかれ、諂諛の人は世の奴也、此道に入者は此道に交るへし。
一、夕を思ひ旦を思ひ吟友に信をつくすへし、金銀寶玉を乞ふ事なかれ、しは〳〵すれは疎せらるゝの語を思ふへし。

右十八箇條門弟子某に書してあたふるもの也

元祿元年戊辰春三月

はせを庵桃青

これは所傳を明かにして居ないが、元祿元年の識語があるから、奥の細道の旅中でない事は明かである。隨つて角左衞門傳來のものとは異る系統のものと見なければならない。ついで安永六年信濃の眠郎が、燕城山下に芭蕉の穗屋の吟を以て薄塚を築いた折の記念集「雪の薄」に行脚掟を載せてゐる。これも所傳を明にして居ないが、條目の順序は「五七記」所載とほゞ同一であり、又嚮に述べた角左衞門宅で芭蕉の吟じた時鳥の句などもあげてあるから、「五七記」系統のものによつたのかと思はれるが、しかも異同も亦少くない。今「五七記」と異なる著しい點だけをあげよう。

一、一宿なすともゆへなき所に再宿すへからす、樹下石上に臥ともあたゝめた(マヽ)る莚をおもふへし。
一、腰に……君父の仇ある所には門外にも遊へからす、いたゝきふまぬ意忍ひさる情あれはなり。
一、衣類器財相應にすへし、……足さるもしからす、程あるへし。
一、ゆへなきに馬駕に乘事なかれ、一枝を己か瘦脚とおもふへし。
一、好んて酒を……餙に及はすのいましめあり、祭にもろみを用るも……。
一、主あるものは一針一草たりとも取へからす、山川江河にも主あり、勤よや、山川旧跡みたりに名をあらたに付る事なかれ。
一、一宿一飯……此道の人は此道に遊人と交るへし。
一、夕部をおもひ……しは〳〵すれは疎んせらるゝの言をおもふへし。將龍食たりともこのむへからす。

右之條々我門の行脚者可慎者也

當時を見侍るに如斯の掟を守り行脚する俳客は十に一もなし、不相應に美をかさり、利慾のために媚諂らひ、僞をいふて世を渡るはあさましき事なり。あるいは古人の名を賣、自己の勝手の能やうにいゝちらすは、誠に羊頭をかけて狗肉を賣の徒にて切賣の功者といふへし。

右の如き異同があると、これを角左衞門傳來の眞蹟から寫し傳へたものとは思はれない。これまた別種の系統に屬するものであらう。――「當時を見侍るに云々」以下は撰者の附言である。――その他七書・一葉集等に掲ぐるものもそれ〴〵異同はあるが、內容に至つては要するに同一である。但し「五七記」所載の「君父の讎あるものは門外に遊へし」や、飲酒の戒の「亂に及はすの節幽亂起歲の戒」等は意が通じない。「七書」には前者を解して「門外に遊ふへしとは其人と交るへからすといふ事也」と言ひ、後者は本文を「亂に及ぶの節迷亂起罪の戒」として掲げてある。しかしこれは共に無理で、前者はやはり「雪の薄」や「一葉集」に「君父の仇ある所には門外にも遊ぶべからず」とあるに從ふべく、又後者は「亂に及ばすの」の下に文を脫し、かつその以下を誤寫したものにちがひない。起歲は「一葉集」の如く恐らく祀歲であらう。尤もこれは「五七記」所載のものを、芭蕉の眞蹟によるとしての推定で、最初から揑造したものであれば全然問題にはならない。要するにこれらの問題は、「五七記」以外更に確實な文獻が發見されないかぎり、なほ疑を存して置く外はなからう。たゞ漢文の出來損ひ見たやうな文章や、所傳が區々な點等から考察すれば、僞作と見るべき可能性が多いやうである。

附記、本稿は「五七記」所載の行脚掟について、雜誌「木太刀」昭和三年六月號に寄せた拙稿をもとにして、これに多少加筆した舊稿である。その後藤井紫影博士はこれらの資料について更に深い考察を進められ、結局これは三千風の行脚の條目によつて僞作したものと斷定された。その論文は雜誌文藝春秋の昭和四年五月號に掲げられ、なほ博士の「江戸文學叢說」中にも收められてゐる。芭蕉の行脚掟についての問題は、博士の說によつて氷釋されたと言つてよく、隨つてもはやこゝに舊稿を採錄する必要もないのであるが、鷄肋としてあへて收めた。

〔補記〕

雜誌「獺祭」昭和八年二月號所載高木蒼梧氏の「かれこれ草」中に、何丸が梓行した單行本「芭蕉翁行脚十七條」が紹介されてある。本文は前掲「雪の薄」所載とほゞ同一で、やは

り「右之條々……切實の功者といふべし」といふ同じ奥書がついてゐる。參考の爲、本文中「雪の薄」と異る主要な箇所だけを抄出しよう。

一、一宿なすとも……あたゝめたる蓮とおもふべし。

一、君父の（註、これは一、腰に…と別條になつてゐる）……倶に天をいたゝかさる忍ひさる情あれはなり。

一、好みて酒を……禁あり、祀歳の戒、祭に……。

一、女性の俳友に……慾て男女の道は詞を斷ッへし……。

右は月院社の藏で、北枝・希因・闌更と傳來したゝのだといふ。もとよりこの傳來はそのまゝ信ずべきではないが、とにかく「雪の薄」所載と同一系統のものであらう。

「五七記」についで古い所見を「藤技折」としたが、なほ寶暦十一年冬に成つた松村桃鏡編の「芭蕉翁文集」にも收められてあり、これが「五七記」につぐものである。

去來私考

去來の芭蕉入門

去來の俳諧生活はいつ頃から始まつたか。それははつきり分らないが、女郎の上に彼の句を見出すもので、最も古いのは貞享三丙寅年の其角の歳旦帖（紙數二丁横本）であらう。それはかの「日の春をさすがに鶴の歩み哉」を卷頭にした三ツ物に始まつて居ゝ、その中に

初春や家に讓りの太刀はかん　去來

の吟が見え――此の句は「續虚栗」にも出て居て、上五が「元日や」となつてゐる。「初春や」の方が初案の形であらう。――なほ

自出度人の數にもいらん年のくれ　はせを

秀句の市に出る松うり　蚊足

ときこへけれは

曉の足ゆふ馬の友ほえて　去來

の三ッ物がある。然るにこの貞享丙寅の其角歳旦帖は、右の外に又別種のものがあつたと見えて、二柳庵三四坊が西讃大野原に明和七庚寅の春を迎へた折、はからず其角のこの丙寅春薄を得、その引附の祖翁の歳旦吟が逸句だからといふので、自分の歳旦帖「松餝集」の中に、その一部を拔抄して出したものがある。その祖翁の句といふのは

幾霜にこゝろはせをの松かさり

といふので、是は前記横本歳旦帖にも正しく見えて居り、又去來の「初春や」の句も同じく拔抄されてある。其の他杉風・嵐蘭・蚊足・素堂等の句にも異同はないが、ひとり嵐雪の句は兩者全く異り、且つ「松餝集」に載する歳暮の吟中

年暮ぬ我に似合ひし松買ん　向去來

の句は、横本歳旦帖には全く見えないのである。又其角の歳旦吟も「松餝集」には一句多く出て居る。それから前にあげた芭蕉・蚊足・去來の三ッ物は、「松餝集」にもやはり出て居るが、「ときこへけれは」の文句が全く除かれて居る。――これは或は三四坊が不用と認めて轉載の際除いたのかも知れぬが、――按ずるに是等の異同は、三四坊が故意に原歳旦帖を改竄したものとは思はれない。恐らく異板のものであつたのであらう。當時歳旦の三ッ物は江戸と京都とで別別に出版され、しかも多少内容を異にする例は他にも見るやうである。すると現存横本は京都井筒屋板であるから、三四坊の見たのは江戸板であつたのかも知れない。

かくてともあれこの丙寅歳旦帖によつて、去來が少くとも貞享二巳丑の歳暮の頃には、もはや蕉門の人々と交渉をもつに至つてゐた事は明かである。すでに當時かうして蕉門の高足たちと名を列ね、芭蕉と三ッ物の吟をしてゐる程であれば、彼が句作を始めたのもさう新らしい事ではなかつたらうと思はれる。貞享二年は彼が三十五歳の時である。かの弓矢を捨てゝ浪人となつたのが二十四五歳の頃であつたとすれば、その後間もなく彼は風雅の世界に遊ぶやうになつてゐたのではあるまいか。その始めて俳諧に志した年代は、今日右の如く只臆測するにとゞまるだけだが、彼が蕉門と交渉をもつに至つた徑路については、ほゞ確かな推測を下すことが出來る。それはまづ彼の句が其角の歳旦帖の中に見出され、續いて「續虚栗」に彼の名を見ることによつても、其角との交游が彼を芭蕉の門に導くべき緒となつたことは、容易に窺ひ知ら

れるのである。其角はこれより先、貞享元年の夏京阪地方に遊んで、只丸・信德・虛中・千春等と唱和して「蠡集」五歌仙を興行し、又西鶴が住吉社頭に二萬三千句獨吟をやつた時、後見役をつとめて蠅拂の句を吐いたりした。この旅中に去來との交りは先づ結ばれたらしい。芭蕉が貞享四年(?)去來兄妹の所謂伊勢紀行に跋して、

さるを其角ひとゝせ都の空に旅寢せし頃、向井氏去來のぬし睦じき契り有て、酒飲み茶に語る折々、甘き辛き澁き淡き心の水の淺きより深きを傳へて、將に一掬して百川の味を知れるなるべし。

と云つて居るのは、即ち此の間の消息を傳へて居るものである。

素蓮の「芭蕉庵春秋」中の去來傳には、ちやんと「是より先貞享元年洛に於て其角に會しとなり」と記してある。これは何を據り所としたのか分らぬが、貞享元年其角が京都で去來に會つた事は、芭蕉の伊勢紀行奥書で確かである。「蠡集」に去來との唱和がないのは、當時まだ俳人としての去來が信德・千春等と雁行する丈の名聲がなかつたからであらう。

去來の伊勢紀行はその中の句が、貞享四年十一月十三日刊行の「續虛栗」中に見えるので、貞享四年の事だらうとされてゐる。但し芭蕉の文面から見ると、まだ去來と直接會つた事がないやうだから、實は貞享三年秋のことであるかもしれぬ。この紀行は當時深川に送つて、翁の斧正を乞うたので、「笈日記」には「いづれの時の秋にや去來千子が伊勢詣での頃、道の記かきて深川に送りけるに、奥書の褒美ありて」とあつて、年代の點は明記してない。

貞享二年の春には芭蕉も京に上つた。しかしその折の「甲子吟行」中には、京では秋風に會つた事の外に何も記してないので、當時去來と相識る機會があつたかどうかは分らぬ。ついで考察すべきは既に述べた貞享三年の其角歲旦帖である。この歲旦帖に名を列して居るのは、芭蕉を始め、其角・文鱗・枳風・李下・仙化・杉風・擧白・嵐雪・嵐蘭・揚水・芳重・朱絃・コ齋・蚊足・去來・素堂の十七人で、去來を除けば皆明かに江戸の人々ばかりである。その中に京都から去來が一人加はつて居るのはをかしい。或はこの歲旦三ツ物興行の當時、去來は江戸に下つて居たのではあるまいかと思へぬこともない。しかしかの歲暮の連吟に「と聞えければ」とあるのは、その場に一座して居なかつた事を證するので、これだけでは直ちに貞享二年の冬去來東下の事實を認める事は出來ない。これは恐らく當時京都における蕉門系の俳人として、其角と最も交渉の深かつた去來の句を、特にその歲旦帖の中に加へたといふだけのことであつたらう。——實際當時はまだ去來以外には、京都地方で蕉門系の有力な俳人は居なかつたので

ある。――然るに「一葉集」によれば、その貞享三年の部に

久方やこなれ〳〵と初雲雀　去來

を發句として、以下芭蕉・其角・嵐雪と四吟歌仙一卷をあげて居る。この歌仙は管見の範圍では、明和八年刊後川撰「梅の草紙」に採錄されたのが最も古く、後川の序文によればもと金城の萬子の藏であつたのを暮柳舍に與へ、更に後川に傳へられたものであるといふ。ついで京都の車蓋が天明七年に出した「俳諧歌仙七部拾遺」の中にも收められ――それは又享和三年「七部集拾遺」にも再錄された。但し再錄の際大分訂正してある。――更に寶晉堂吳山が陸奥行脚中ある法師の秘藏してゐる卷を見、それが車蓋の紹介したものと異同があるからといふので、享和二年冬「無底籠」を撰んで其の中にこの一卷を加へた。以上傳へるもの三種それ〴〵語句に多少の異同はあるが、皆その年代については明示してない。今最も早く紹介された「梅の草紙」に付てその初表だけを示すと、

南窓一片春と云題に

久かたやこなれ〳〵と初雲雀　去來

旅なる友をさそひ越す春　芭蕉
からはかす櫻の庵はき置て　其角
よろしく長き一瓢の酒　嵐雪
月はれてともし火赤き海の上　芭蕉
峠のそこに吹秋の音　去來

といふのである。而してこれは「一葉集」によれば、前に述べた如く貞享三年の事になつて居るが、素蓮は「芭蕉庵春秋」の貞享四年の條に、「月日未詳、去來東都に下向して俳諧興行」と記して、この初雲雀の四吟歌仙が成つた事を述べ、更に

按、去來の東都下向は故人も是非を說かざる所也　然れ共此俳諧世に有るに於ては、後學者の說を待つこと不ゝ能故、今考ふるに芭蕉脇句「旅なる友をさそひ越す春」とあれば、去來の東都下向ありしこと明かなれ共　年月又知るべからず、されば共愚が今年と定めたるは、續虛栗集の內、今年五月十三日其角が母の五七日追善各悼中に去來が一句あり、但其集に各悼と題したれば、文音の唫にあらで、正しく一座なしたるを知るべし、然れば今年三月東都に下り、同じく五月迄逗留せしに極まれり。

と詳しい考證を試み、なほ又「去來抄」に「をとゝひはあの山越えつ花盛り」の句について、芭

蕉の批評があるが、これも吉野行脚以前、芭蕉去來對面の事實があつた事を證すると述べて居る。素蓮の考へは一應誠に尤もであるが、そこには果して粗漏な點が存しないであらうか。「一葉集」の年代はその據る所を知る事が出來ないが、とにかくなほ考察の餘地は存する。

俳書大系芭蕉一代集にも右の歌仙を貞享三年の部にあげて居る。而して一代集は「無底籠」を底本として、發句の前書に「貞享三丙寅正月」とあるが、「無底籠」には「梅の草紙」と同じく

南窓一片春といふ題に

とあるだけで、年代は記してない。「七部拾遺」に家藏本には年代の前書はない。しかし雀志編の「嵐雪集」を見ると、その中にもこの歌仙を「拾遺」から引いて貞享三年としてある。だから「七部拾遺」の異版――「七部拾遺」にはいろ〳〵版の異つたものがあるやうである。――に或は右のやうな年代の前書があつて、一葉集や一代集もそれに從つたのではないかと思ふ。

去來の東下が貞享三年たる事を證すべき別の憑證は、この年閏三月江戸で出版された「蛙合」である。此の書は撰者仙化の跋にも明かに

頃日會二深川芭蕉庵一而群蛙鳴句以二衆議判一而馳二秃筆一。

とある通り、この頃芭蕉庵で催された蛙の句合である。而してその第五番に去來は李下と取組んで、

一畦はしばし鳴きやむ蛙哉

の句で勝を得て居るのである。これは當時去來が深川の芭蕉庵に居たとしないでは、外にどう解する事が出來るであらう。これを以て見れば前記初雲雀の歌仙も亦、恐らくこの年東下して間もなく興行されたものであらう。

以上說く所やゝ煩はしきに過ぎたが、要するに去來は先づ其角を通じて芭蕉と接近し、貞享三年の春には夙くも蕉門の兩高足たる其嵐の二子と伍して、一卷の歌仙に親しく師翁の捌きを受けるまでになつたのである。卽ち去來が芭蕉に直接敎を乞ふやうになつたのは、まづ貞享三年の春のことだと斷定してよからうと思ふ。只こゝに一つ解し難いのは、「去來抄」に去來が始めて、

夕凉み疝氣起して戻りけり

といふ句を師翁に見せて笑はれたといふ話が出て居るが、これは一體いつの事であらう。もしこの貞享三年春を以て、芭蕉と去來と始めて相會した時だとすれば、この句は當時の他の吟と